

博士学位論文

# 従属節におけるアスペクトの研究

熊本県立大学大学院文学研究科

日本語日本文学専攻

和田 礼子

# 目次

第1章 はじめに.....	5
第2章 日本語のAspectとAspect的特徴に基づく動詞の分類.....	9
2.1 日本語のAspect.....	9
2.1.1 AspectとAspectuality.....	9
2.1.2 Aspect的な意味について.....	13
2.1.2.1 継続性と完成性.....	13
2.1.2.2 パーフェクト性と反復性.....	16
2.1.2.3 維持性.....	19
2.1.3 出来事間の時間的前後関係.....	20
2.2 Aspect的特徴に基づく動詞の分類.....	22
2.2.1 形態論的Aspect対立に基づいた動詞の分類—工藤による動詞分類.....	22
2.2.2 語彙的Aspectに基づく動詞の分類.....	24
2.3 第2章のまとめ.....	29
第3章 ナガラ節のAspect的特徴.....	31
3.1 ナガラに関する先行研究.....	31
3.1.1 意味分析を中心とした記述.....	31
3.1.2 文の階層性という観点からの研究.....	32
3.1.3 時間性と接続関係を別の体系としてとり扱った研究.....	33
3.2 Aspect的特徴に基づくナガラの分類.....	35
3.2.1 ナガラの二つの用法.....	35
3.2.2 従属節のAspect的特徴.....	36
3.2.3 堀川(1994)との比較.....	38
3.2.4 構文的逆接と文脈的逆接.....	39
3.2.5 付帯状況ナガラと逆接ナガラの構文的な違い.....	41
3.3 付帯状況ナガラ節のAspect的特徴.....	44
3.3.1 限界動詞+ナガラのAspect.....	46
3.3.2 主節のAspect.....	51
3.3.3 付帯状況ナガラの用法.....	53
3.3.3.1 並立用法と付帯用法.....	53
3.3.3.2 付帯用法の下位分類.....	55
3.3.4 付帯状況ナガラの用法まとめ.....	60
3.4 逆接のナガラ.....	64

3.4.1	逆接ナガラ節のアスペクト的特徴	64
3.4.2	逆接ナガラ文を構成する非限界動詞	68
3.4.3	逆接ナガラ節の共通性	70
3.5	第3章のまとめ	71
第4章	西日本方言話者と東京方言話者の付帯状況ナガラ節のアスペクト認識	74
4.1	アスペクト認識に見られる方言の影響	74
4.2	アスペクト体系にみられる地域差	76
4.2.1	共通語のアスペクト体系と西日本方言のアスペクト体系	76
4.2.2	3項対立の方言にみられる地域差—熊本方言と高知方言の相違点	77
4.3	ヨル・トル・テルトコ・ナガラ節のアスペクト調査	79
4.3.1	調査の概要	79
4.3.2	ナガラ節が動作の進行を表す動詞群「着る、片付ける、汚す」	81
4.3.3	ナガラ節が動作進行と結果維持を表す動詞群「座る、立つ、乗る」	82
4.3.4	ナガラ節が結果維持を表す動詞群「握る、よりかかる、ぶらさがる」	85
4.4	第4章のまとめ	87
第5章	コーパスを利用したナガラ文の使用分析—テとナガラの置き換えの可否—	89
5.1	付帯状況テとナガラの置き換え	89
5.2	先行研究:仁田(1995)	91
5.3	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に見られるナガラの使用状況	94
5.4	『日本語学習者作文コーパス』に見られるナガラの使用例	96
5.4.1	『日本語学習者作文コーパス』の概要とナガラ使用数	96
5.4.2	ナガラの誤用例:ウチニへの修正	98
5.4.3	ナガラの誤用例:テへの修正	99
5.4.3.1	「維持」の局面を持たない動詞+ナガラ	99
5.4.3.2	手段を表す用法	99
5.5	第5章のまとめ	102
第6章	限界動詞の運動局面の焦点化	104
第7章	結 論	109
7.1	ナガラ節のアスペクト的特徴と意味の関連	109
7.2	アスペクト的特徴と意味の相関	111
7.3	アスペクト性認識の違い	113
7.4	今後の課題	114
	《資料》「ヨル・トル・テルトコ・ナガラ」調査 質問紙及び調査結果	115
	参考文献	130
	謝 辞	135

## 既発表論文

本論文の第3章、第4章、第5章は以下の論文に基づいており、その後の研究によって明らかになった内容を新たに加筆、修正したものである。

- (1) 「「ナガラ節」のAspectと意味について」『熊本大学留学生センター紀要』(1) p.131-141 (1997): 第3章は、本論文を大幅に加筆修正したものである。
- (2) 「逆接か同時進行かを決定するナガラ節のAspectについて」『日本語教育』(97) p.94-105 (1998): 第3章は本論文を大幅に加筆修正したものである。
- (3) 「西日本方言話者と東京方言話者の共通語使用場面におけるAspect認識ー同時進行ナガラ節、テルトコ形のAspectについてー」『鹿児島大学留学生センター紀要』(1) (2013): 第4章は本論文を加筆修正したものである。
- (4) 「コーパスを利用したナガラ文の使用分析ーテとナガラの置き換えの可否を中心にー」『熊本県立大学大学院文学研究科論集』(2013): 第5章は本論文を加筆修正したものである。

## 用例の出典

- (新) 『CD-ROM版新潮文庫の百冊』(1995)
- (B) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国立国語研究所



## 第1章 はじめに

第1章では本研究の目的と考察の対象を明示し、分析の視点と本稿の構成について述べる。

本研究は、従属節の持つアスペクト的特徴と、従属節の意味との関連性について分析を行うものである。従属節を構成する接続形式は、その意味を実現するのに適したアスペクト的特徴を表しうる動詞と結びつくことで、文法性を保つことができる。

例えば、「PとともにQ」は出来事Pの進展に相関して出来事Qも進展するという関係を表す(庵2001 p.447)が、それだけでなく、「～と同時に」に近い意味を表すこともできる。(庵2001 p.448)

- (1) 年をとるとトモニ、涙もろくなる。
- (2) 彼は大学を卒業するトモニ、アメリカに渡った。(庵2001 p.448)

(1)は従属節の漸進的変化に相関して主節も変化することを表している。一方(2)は従属節の変化を漸進的なものとして捉えるのではなく、ひとまとまりの変化として捉え、その変化の成立と同時期に主節の変化がおこったことを表している。

(1)のように「～とともに」が出来事Pの進展に相関して出来事Qも進展するという関係を表すためには、従属節を構成する動詞は漸進的な変化の過程を表しうる動詞でなければならない。(2)の「卒業する」は漸進的な変化の過程を表すことができないため(1)の用法では使えない。

(1)は主節と従属節の変化が同時に起こっており、(2)は同時期であるとはいえ、従属節の出来事の変化終了は主節の出来事が起こる条件であることから、従属節は主節に先立って起こっている。

同様の例として、「PでQ」があげられる。テ節は付帯状況、継起、理由、並列などの用法がある。

(3) (4)は付帯状況と、継起を表す例である。

- (3) a 立って話した。(付帯状況)
- b うつむいて聞いた。(付帯状況)
- c 手を振って行進する。(付帯状況)
- (4) シャワーをあびて寝た。(継起)

付帯状況を表すテ節は(3)a、bのような変化結果の維持か、(3)cのような反復動作継続の局面を表す。継起を表すテ節は「シャワーをあびる」という動作をひとまとまりのもの(完成の局面)として捉え、テ節動作終了後に主節動作が行われたことを表す。

付帯状況とは、主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況を表す(日本語記述文法研究会2008 p.248)。この、付帯状況という意味の実現には、主節と従属節の同時性が条件となるが、従属節のアスペクト的意味が「継続」でなければ同時性を表すこと

はできない。また、継起の意味が実現するには、従属節は完成相でなければならない。

通常テ節では、動作動詞は完成相を表すため、継起の用法となるが、テ節の動作が反復して行われる場合、継続相となり、付帯状況を表すことができる。また、変化動詞の中で、変化結果の状態を主体的に維持するといった、「維持」の局面を持つ動詞の場合、付帯状況を表すことができる。

このように、従属節のアスペクト的特徴は、従属節を構成する接続形式の意味が成立するための条件となることがわかる。そして、従属節の動詞は、条件とされるアスペクト的特徴を表すことができるものでなければならない。

動詞が辞書的意味として持っているアスペクト的特徴によって、動詞を分類する方法は、大きく、2通りに分けられる。方法の一つは動詞のテイル形が表すアスペクト的特徴をもとに分類する方法であり、もう一つの方法は、「ずっと、何時間も、徐々に」といった副詞表現や、「～続ける、～たまま」などと共起するか否かといった観点で分類する方法である。後者は、動詞の表しうるアスペクト的特徴を、より仔細に取り出す方法として、有効であると考えられる。

従来、日本語のアスペクト研究の中心は主節述語部分のアスペクトを対象にしたもの、あるいは、スルーテイルといった形態論的対立に基づく研究が主流であったが、本研究では、従属節のアスペクトを取り上げる。また、テ節やナガラ節のように、複数の意味用法を持つ接続形式において、形態的には同じでもアスペクト的意味が異なると、その意味用法が異なることを主張する。これは、接続形式の使用条件を具体的に規定することであり、研究成果は日本語教育で広く活用することができる。

ここで、「アスペクト」という文法カテゴリーについて述べておきたい。仁田(1997, 2009)は、文法カテゴリーはその作用領域の大きさにおいて、包み、包み込まれるという関係にあり、一つの層状構造を形成していると述べている。具体的には下の文について、下のような重層構造を示している。

- ・ 彼に見られていなかったでしょうね。

彼に[[[[[[見]ラレ]テイ]ナカッ]タ]デショウ]ネ](仁田1997 p.142)

この文に文法カテゴリーを当てはめると図1-1のようになる。(仁田2009 p.27)



図 1-1 文法カテゴリーの層状構造(仁田 2009)

仁田(2004)は、日本語の文は客体化・対象化された出来事や事柄を表す「命題」の部分と、命題

をめぐって話し手の捉え方や、話し手の発話・伝達態度のあり方を表す「モダリティ」の部分によって構成されていると述べ、日本語の文の基本的な意味—統語構造を、図 1-2 のように示している(仁田 2004p.12)。図 1-1、1-2 からヴォイス、アスペクト、肯否、テンスは話し手の判断や、伝達態度ではなく、起こっている事態を描写するというレベルの文法カテゴリーであるといえる。



図 1-2 日本語の意味—統語構造(仁田2004)

テンス・肯否は、「スル(辞書形)・ータ・ーナイ・ーナカッタ」の形で、全ての動詞がこの形態を持ち、同時に「スル(肯)(非過去)・ータ(肯)(過去)・ーナイ(否)(非過去)・ーナカッタ(否)(過去)」という意味を表すことができる。

一方、アスペクトは、代表的なアスペクト形式であるテイル形式を例にとっても、テイル形式を持つ動詞と持たない動詞があり、テイル形式を持つ動詞でも、動詞が表す動きの特徴によって「動作の継続」と「結果の継続」、さらには「結果状態の維持」と、指し示す事態が違うという点で、テンス・肯否とは大きく異なっている。

また、アスペクトは「出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違である」(工藤 1995)と定義されているが、この「把握の仕方」は、指し示す出来事の性質や文脈、あるいは日本語母語話者がもつ方言によって、変化する可能性がある。

例えば、「電話を切りナガラため息を一つついた(三宅 1999)」という文で、「電話を切る」という瞬間的な動きを、スローモーションのように引き伸ばして捉えれば、この文は正用と判定されるが、そうでなければ非文として扱われる。「座りナガラお茶を飲んだ」を正用とするか、不自然と思うかは、日本語母語話者でも、意見が分かれる。これはテンス・肯否というカテゴリーでは、決して見られない現象である。本研究では、このような事例について分析し、考察を行う。

本論文の構成は以下のとおりである。

まず、第 2 章では日本語のアスペクト研究について概観し、本論文内で使用する用語について規定する。さらに、アスペクト的特徴に基づく動詞の分類を行う。

第 3 章では、従属節におけるアスペクト的特徴と用法の相関について述べる。具体的には、ナガラ節の用法をナガラ節のアスペクト的特徴によって、付帯状況ナガラと逆接ナガラに分類し、付帯状況ナガラ節のアスペクト的特徴は「動作継続」「変化結果の維持」「反復」であること、また逆接ナガラ節はパーフェクトであることを指摘する。さらに、第 2 章で分類した動詞の種類ごとに、ナガラ節ではどのようなアスペクト的特徴が現れるか分析し、ナガラ節の二つの用法について考察を深める。

また、付帯状況ナガラ節の使用条件として、ナガラ節の事態がエネルギーの供給を伴う、動的な事態であることを指摘し、このことも、アスペクト的特徴との関連で説明する。

第 4 章では、日本語母語話者の間に見られる、アスペクト認識の相違、即ち、「座りナガラ」を「座

った後の状態」ととらえるか、「立っている状態から腰掛ける状態に変化している途中」ととらえるかといった違いについて取り上げる。このようなことが起こる要因の一つに方言の影響が考えられるのではないかという仮説をたて、西日本方言話者と東京方言話者に対して調査を行った。調査の結果、「着る、片付ける、汚す」のような動詞に関しては、アスペクト認識の違いは見られなかったが、「座る、立つ、乗る」のような動詞では違いが見られた。

第5章では、同じ付帯状況の用法を持つ、ナガラとテの置き換えの可否について論じる。まず、テ節の先行研究を概観し、動詞の語彙アスペクトと、取り出されるアスペクトの局面について分析する。次に、ナガラ節との置き換えの可否について、どのような要因が作用しているのか考察し、ナガラとテの用法の違いについても言及する。また、日本語学習者の誤用例を分析し、アスペクトに関わる用法の確認とともに、主節とナガラ節動詞の意味関係についても考察する。

第6章では、限界動詞の運動の局面を焦点化する表現形式について述べる。「ゆっくり・徐々に」や「～ハジメル」は、通常テイル形式では取り出されない動詞の運動の局面を取り出すことができる。ナガラやヤスイ・ニクイといった表現形式にも同様の現象が見られるが、「ゆっくり・徐々に」などに比べると、直接的ではない。

「ゆっくり・徐々に」は運動の局面のみを取り出す表現形式であるが、ヤスイ・ニクイとナガラは、複数の用法をもち、従属節のアスペクト的特徴によって、用法が特定できるという点で共通していることを述べる。

第7章は結論として本論をまとめ、また、残された課題について指摘する。

## 第 2 章 日本語のアスペクトとアスペクト的特徴に基づく動詞の分類

### 2.1 日本語のアスペクト

ナガラ節のアスペクトについて論じる前に日本語のアスペクトについての概念や、使用する用語の定義について定めておく必要がある。第 2 章では先行研究をふまえ、本稿の日本語のアスペクト、アスペクチュアリティに関する基本的な考えを述べる。次に、完成相、継続相、維持、パーフェクトが表すアスペクト的意味について定義する。

#### 2.1.1 アスペクトとアスペクチュアリティ

日本語の文法カテゴリーには、ヴォイス、アスペクト、テンス、丁寧さ、肯否、モダリティがある。文法カテゴリーとは「文の中で必ず表さなければならない文法的意味」(庵 2001 p.74)のことで、例えば、日本語では発話時以前に起こった出来事を表す場合、述語部分には必ず過去を表すテンス形式をつけなければならない。

‘時’に関係する文法カテゴリーにはアスペクトとテンスがある。工藤(1995)は、アスペクトとテンスをそれぞれ次のように定義している。

工藤(1995 p.8)

•アスペクト

基本的に完成相と継続相の対立によって示される〈出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違〉を表す文法的カテゴリー。

•テンス

基本的に過去時制と非過去時制の対立によって示される〈出来事と発話時との外的時間関係の相違〉を表す文法的カテゴリー。

アスペクトとテンスの違いは、出来事の「内的時間」を問題にするか「外的時間」を問題とするかという違いである。

(1)a. きのう、本を読んだ。

b. そのとき、本を読んでいた。

(1)a の「読んだ」は分割できない、ひとまとまりの動きとして捉えられているのに対し、(1)b の「読んでいた」は読み始めたが、読み終わっていないという事態を表す。(1)a、bのテンスはどちらも過去を表すが、アスペクト的意味として(1)a は完成相、b は継続相を表す。このようにアスペクトとテンスは一つの事態の異なる側面を表す概念である。

さらに、アスペクトについて見ていく。高橋(2005)、コムリー(1976)はアスペクトを次のように定義している。

高橋(2005 p.80)

- ・アスペクトもテンスも時間に関係した文法的カテゴリーであるが、アスペクトは動詞の表す運動が、基準となる時間とどのように関わるかについてのカテゴリーであり、テンスは動詞の表す運動が、時間軸上のどこに位置するか(基本的には発話時とどう関わっているか)にかかわるカテゴリーである。
- ・動詞のあらわす運動は、時間とともに進行するものであって、はじまりとおわりがある。この、はじまりとおわりのある運動をどのようにとらえるかということに関わる文法的なカテゴリーをアスペクトという。

コムリー (1976 p.3)

As the general definition of aspect, we may take the formulation that ‘aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation.’

(アスペクトの一般的な定義を、「アスペクトは場面の内部の時間的構成を表す様々な方法である」とする。)

これらの先行研究から、アスペクトが「出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違」を表す文法的カテゴリーであると捉えて論を進めることは妥当であると考ええる。

現代日本語のアスペクト研究を見ると、まず、金田一(1950)は動詞のテイル形式を取り上げ、その意味の違いによって動詞を4種に分類した<sup>1</sup>。金田一(1950)がシテイル形式のみを取り上げたのに対し、奥田(1977)は日本語のアスペクト体系をスル(完成相)ーシテイル(継続相)の対立関係によってとらえた。

奥田(1977 p.89)

site-iru という文法的なかたちはsuruという文法的なかたちと対立的な関係をむすびながら、アスペクトの体系をなして、いまかりにsuruを《完成相》、site-iruを《継続

---

<sup>1</sup> 金田一(1950)の動詞の分類

状態動詞 : テイル形式を持たない → ある、いる

継続動詞 : テイル形式で、動作が進行中であることを表す → 読む、書く、降る

瞬間動詞 : テイル形式で、動作、作用が終わり、その結果が残存していることを表す  
→ 死ぬ、(電灯が)点く

第四種の動詞: テイルという形でのみ使用される動詞 → そびえる、すぐれる

相」と名づけておこう。動詞の、ふたつのアスペクチュアルなかたちは、一方がなければ他方もありえないという、きりはなすことのできない有機的な関係のなかにある。

これをふまえ、工藤(1995)は日本語の形態論的形式によるアスペクト・テンス体系を表2-1のようにあらわしている。

表 2-1 アスペクト・テンス体系(工藤1995 p.36)

アスペクト テンス	完 成 相	継 続 相
非 過 去	スル	シテイル
過 去	シタ	シテイタ

工藤(1995)が、この理論的枠組みの本質を「アスペクトもテンスも、marked form と unmarked form の相補対立関係による一般的文法的意味である」と述べているように、奥田(1977)、工藤(1995)は形態論的対立がアスペクトの意味の対立と対応するという立場をとっている<sup>2</sup>。これは単語レベルのアスペクト体系であるといえよう。

一方、文レベルのアスペクトの意味を表す、構文論的なカテゴリーとして、アスペクチュアリティがある。須田(2010)はアスペクチュアリティについて次のように説明している。

須田(2010 p.87-88)

文における、さまざまなアスペクト的な意味と、その多様な表現手段との体系をアスペクチュアリティと呼ぶ。(中略)アスペクトが単語における語論的なカテゴリー(形態論的なカテゴリー)であるとするれば、アスペクチュアリティは、文における文論的なカテゴリー(構文論的なカテゴリー)である。

同様に、工藤(1995)ではスルーシテイルといった単語レベルの〈文法的＝形態論的カテゴリー〉をアスペクトと呼び、文レベルの様々な表現手段からなる〈機能・意味的カテゴリー〉をアスペクチュアリティと呼んでいる。工藤(1995)はアスペクチュアリティを動的出来事(＝運動)の〈時間的展開の様態〉とし、その表現手段を図2-1のようにまとめている。

<sup>2</sup> 同じ文法的アスペクトの立場の副島(2007)は、スルーシテイルの対立だけでは日本語のアスペクト体系は語りつくせないとして、シテイルに「シツツアル、シテアル」を加えた有標形式とスル(無標形式)が対立していると主張している。

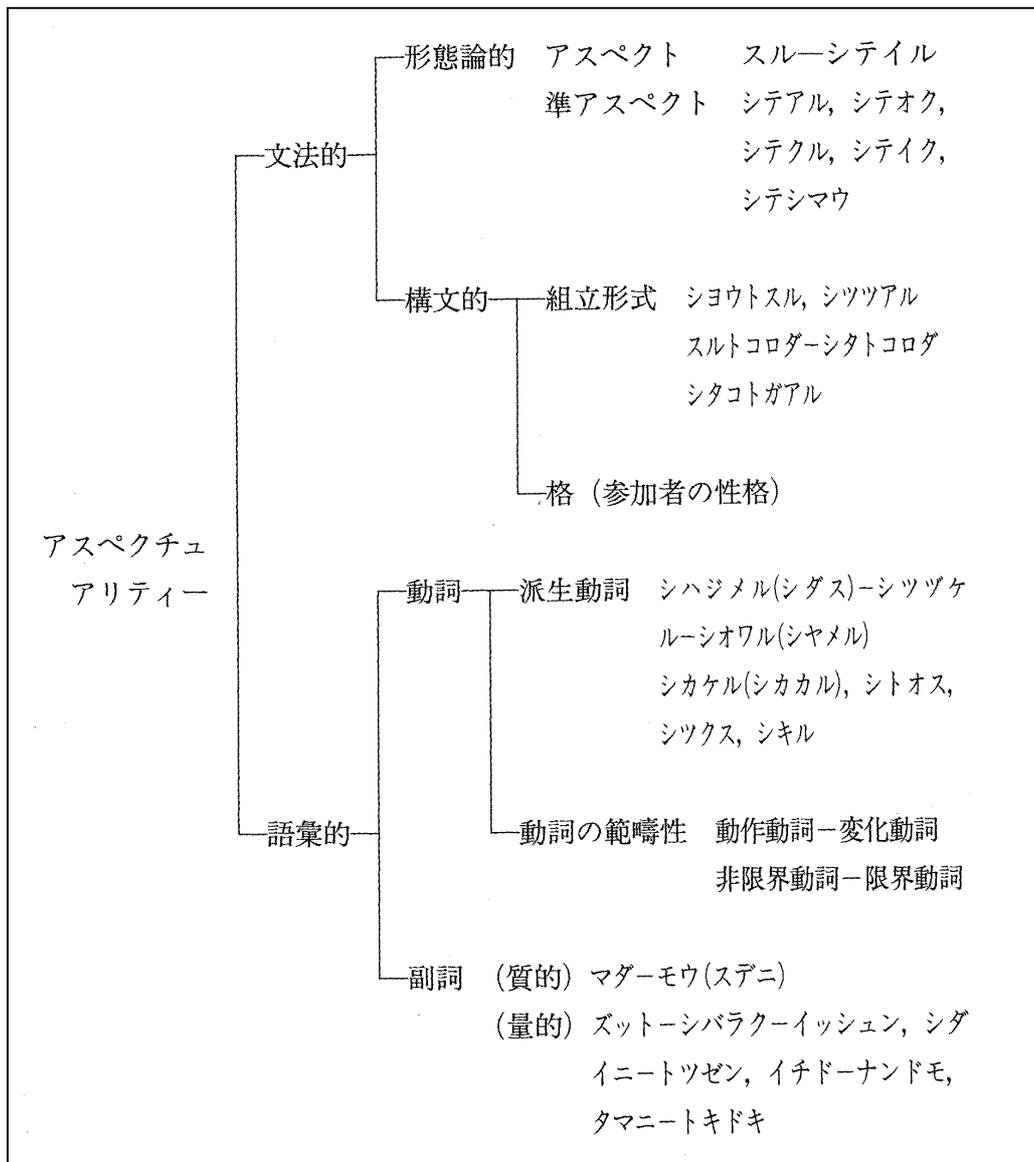


図 2-1 アスペクチュアリティの表現手段(工藤 1995 p.32)

図 2-1 を見ると、アスペクチュアリティはまず、「文法的」表現手段か「語彙的」表現手段かに分けられる。工藤(1995)は「文法的」表現手段について①義務性②包括性③規則性④抽象性(一般性)⑤パラダイグマティックな対立性といった 5 つの観点から文法化の程度を規定している。

例えば「語彙的」表現形式に分類されている「シハジメル、シツヅケル、シオワル」などは、「始める、続ける、終わる」といった動詞の意味を保持しているが「シテアル、シテオク、シテクル」などは「語彙的意味から解放され、抽象化が進んでいるため(工藤 1995)」、「文法的」とみなされる。しかし、「シテアル、シテオク、シテクル」は「死んである、流れておく」が言えないなど、使用される動詞が限られていることから②包括性が欠如しており典型的な形で文法化が進んでいるとは言えない。

このため、「シテアル、シテオク、シテクル」は準アスペクトに位置づけられている。①～⑤の要件を全て満たし、最も文法化が進んだアスペクト形式は「スルーシテイル」である。

「語彙的」表現手段は「動詞」的なものと「副詞」に分けられている。共起する副詞によって、文のアスペクト的意味が表される例としては、「ズット走る」「イッシュン見る」などがあげられる。「ズット走る」は継続性を表し、「イッシュン見る」は継続性を表すことはできない。

「語彙的」表現手段の中の動詞の範疇性とは、副島(2007)のいう「動詞の意味に内在化されたアスペクト的意味である語彙的アスペクト(lexical aspect)」である。工藤(1995)は、アスペクト対立の有無と、その下位分類として限界性の有無という観点から動詞を分類している。アスペクト的特徴による動詞の分類については、2.2節で詳細に述べる。

本研究は従属節のアスペクト的意味について考察するものであるが、動詞が辞書的意味として持っているアスペクト的意味と、従属節が表しうるアスペクト的意味は相関していると考えられる。また、従属節のアスペクトは、従属節を構成する副詞句の影響を大いにうける。この意味において、本稿が研究対象としているのは、スルーシテイルといった文法的・形態論的なカテゴリーではなく、動詞の範疇性を含み、語彙的なものであるといえる。

次に、2.1.2ではアスペクト的意味と、これを表す用語について述べる。

## 2.1.2 アスペクト的な意味について

### 2.1.2.1 継続性と完成性

工藤(1995)は、アスペクトは、完成性、継続性にパーフェクト性、反復性を加えた4つの意味から成ると指摘している。2.1.2ではこの4つのアスペクト的意味について確認する。

まず、完成性と継続性について見てみよう。奥田(1977)は完成性と継続性について次のように述べている。

奥田(1977)

完成相<sup>3</sup>:ひとまとまりの動作。動作をまるごとさしだす。

分割を許さない globality のなかに動作をさしだす。

継続相:継続のなかにある動作。

工藤(1995)は奥田の定義に「時間的限界性」という概念を加え、次のように説明している。

---

<sup>3</sup> 「完成相」「継続相」について須田(2010)は「これは、アスペクト的な意味ではなく、形態論的な形につけられた名前である(p.24)」と述べている。本稿もこれを、アスペクト形式であるスルーシテイルを表すものとして扱い、アスペクト的性質を現す場合には「完成(性)」「継続(性)」を使う。

工藤（1995）

完成相：長い時間継続するものであっても、その継続性を無視して、圧縮し一つの出来事、事件として処理する。

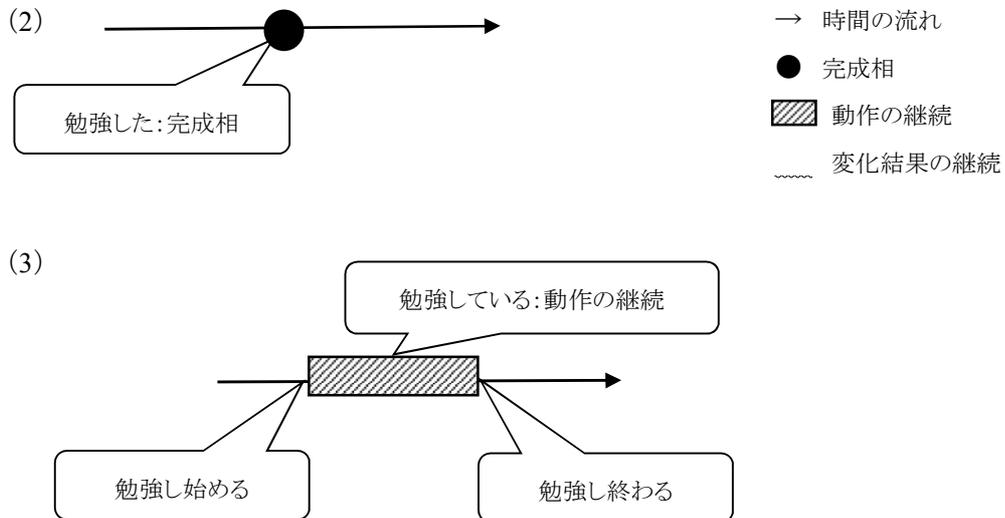
いわば点的に時間的に限界づけられてとらえられる。

継続相：短い時間の出来事であっても、時間的に限界づけられないで、継続的にとらえる。

このことを次の文を例にして考える。

- (2) きょう、3時間勉強した。
- (3) 太郎は隣の部屋で勉強している。

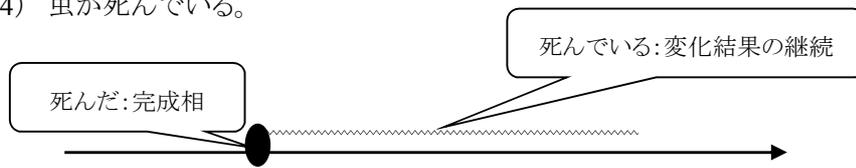
(2)は完成性を表し(3)は継続性を表す。(2)の「3時間勉強した」には「勉強し始める」「勉強している」「勉強した」というそれぞれの局面は問題にされず、動作が始まってから終わるまでが、ひとまとまりの事態として提示されている。一方、(3)の「勉強している」は「勉強スル」という動作が継続しているという局面がとりだされている。(3)の「勉強している」には「勉強し終わる」という局面は含まれておらず、この意味で時間的限界性がない。(2)(3)を図にすると次のようになる。



金田一(1950)は「継続動詞」+テイルは「動作継続:進行」、「瞬間動詞」+テイルは「変化結果継続:結果」を表すことを指摘して動詞を分類した。一方、奥田(1977)はテイル形式が表す共通のアスペクト的意味を「継続性」ととらえ、工藤(1995)は動作の「進行」と変化の「結果」を「継続性」のバリエーションと説明している。

(3)は「動作継続」であり、(4)は「変化結果継続」である。(4)を図に表すと、次のようになる。

(4) 虫が死んでいる。



さらに、完成相が表すアスペクト的意味のバリエーションとして、工藤(1995)は「ひとまとまり性」と、「限界達成性」とをあげている。

工藤(1995 p.80)

- ①〈ひとまとまり性〉 運動(動作、変化)の成立＝開始限界から終了限界までを全一的にとらえる。
- ②〈限界達成性〉 開始の時間的限界か、終了の時間的限界のどちらかのみをとらえる。
  - (2・1) 〈終了限界達成性〉 変化の終了(結果の成立)限界をとらえる。
  - (2・2) 〈開始限界達成性〉 動作の成立＝開始限界をとらえる。

工藤(1995)は(2・1)と(2・2)は相互排他的であるが、①と(2・1)、あるいは①と(2・2)は必ずしも相互排他的ではなく、「ひとまとまり性」と「限界達成性」は焦点化の相違でもあり、〈場面・文脈〉に相関すると述べている。

(2・1)と(2・2)は相互排他的で、動詞が語彙的にもつ限界性の有無によって、区別される。「終了限界」「開始限界」について金水(2000)は図 2-2 を示して説明している。図 2-2 は運動動詞が表す出来事の時間的な構造である。

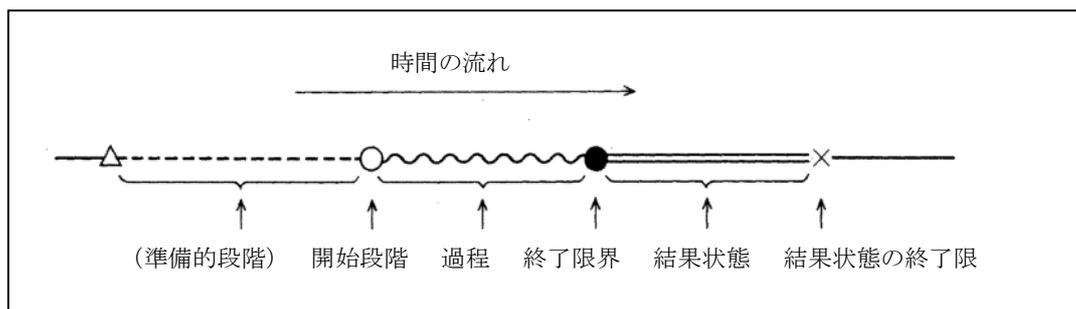


図 2-2 運動動詞が表す出来事の時間的な構造(金水 2000)

金水(2000)はすべての動詞がこのような構造を持っているわけではなく、「この構造のどの部分を持っているかによって動詞の意味的特徴がわかる(p.17)」と述べている。「歩く、見る」などの動

作動詞は、開始限界が達成されたことで動作が成立する。一方、変化動詞は終了限界を越えなければ動詞の意味が成立しない。例えば、動作動詞「歩く」について見ると、生まれたての馬が1、2歩、歩いたのを見ても「歩いた(開始限界達成)」と言えるが、変化動詞である「倒れる、落ちる」は運動が終了しなければ、動詞の意味は成立しないのである。

ここでは、完成性、継続性といったアスペクト的意味に加え、開始限界達成、終了限界達成といった概念についてみた。

### 2.1.2.2 パーフェクト性と反復性

次にパーフェクト性、反復性、について述べる。「完成相」と「継続相」の対立が基本アスペクト体系と呼ばれているが、工藤(1995)は派生的なアスペクト的意味として「反復相」「パーフェクト」「単なる状態」の3つをあげている。

- (5) その本なら一度読んでよ。(パーフェクト)(工藤 1995 P38)
- (6) あの頃は、よく、人が結核で死んでいた。(反復性)(工藤 1995 P38)
- (7) この道は曲がっている。(単なる状態)(工藤 1995 P38)

副詞句や修飾句を持たない文では、アスペクトの基本的意味「完成－継続」が現れるが、複文や副詞句を持つ文では、この派生的意味が出現する。派生的意味の出現には様々な条件があると考えられる。

派生的なものの中で、「単なる状態」は金田一(1950)の第四種の動詞のテイル形式に表れるが、工藤(1995)はこれを「時間のなかでの展開性」を問題にしておらず、「脱アスペクト化」しているとして、拡大アスペクト・テンス体系(図2-1)から除外している。

工藤(1995)はパーフェクトについて「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、力を持っていること」と述べ、次の3点を強調している。

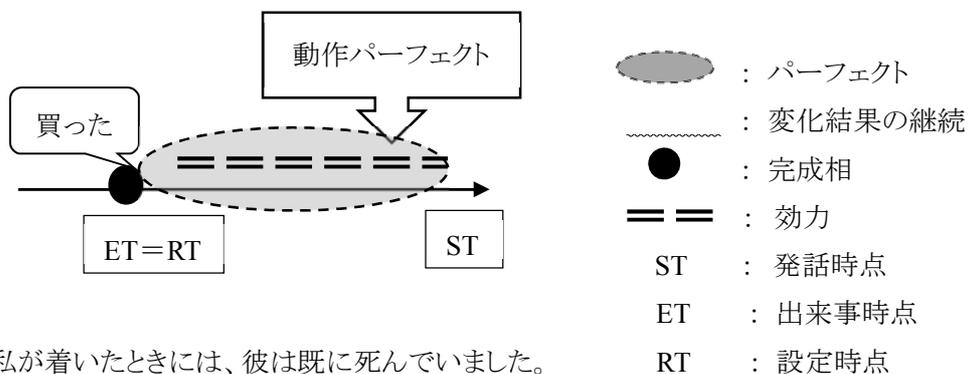
工藤(1995 p.99)

- ①発話時点(ST)、出来事時点(ET)とは異なる〈設定時点〉(RT)が常にあること。
- ②設定時点にたいして出来事時点が先行することが表されていて、テンス的要素としての〈先行性〉を含んでいること。
- ③しかし、単なる〈先行性〉ではなく、先行して起こった運動が設定時点とのむすびつき＝関連性をもっていることとらえられていること。つまり、運動自体の〈完成性〉とともに、その運動が実現した後の〈効力〉も複合的に捉えるというアスペクト的要素を持っていること。

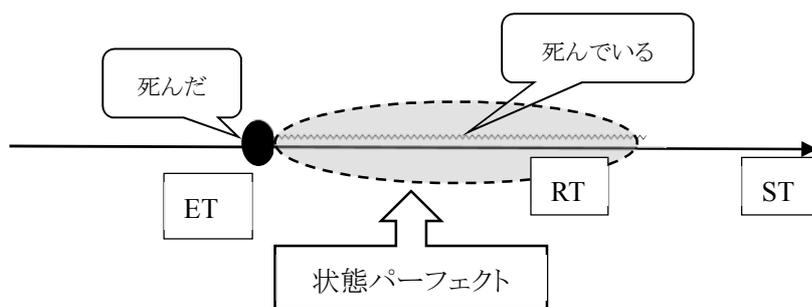
パーフェクトの特徴は「先行性」「完成性」「効力」にあるといえるだろう。(8)(9)のような文はパ

ーフェクトの意味を持つ文であり、パーフェクトが表す意味は次のように図示することができる。

(8) 犯人は三日前にそのスーパーで包丁を買っている。



(9) 私が着いたときには、彼は既に死んでいました。



変化動詞の継続相は「変化結果」を表しており、変化が継続相に先だっておこるとい点ではパーフェクトと同じである。このため工藤(1995)はパーフェクトを広義にとらえ、変化動詞の継続相を〈状態パーフェクト〉、(8)(11)のようなパーフェクトを〈動作パーフェクト〉と呼んでいる。〈状態パーフェクト〉を表すのは変化動詞に限られるが、〈動作パーフェクト〉は動詞の種類に関わりなく、出現する。

(10) 山田はアメリカに行っている。(状態パーフェクト)

(11) 山田は3年前にアメリカに行っている。今度で2度目だ。(動作パーフェクト)

スルーシテイルのアスペクト的意味とパーフェクトの現れ方は次のように表すことができる。

表2-2 スルーシテイルのAspect的意味

	基本的意味	パーフェクトの種類 (派生的意味)
スル	完成	—
シタ	完成	動作パーフェクト
シテイル	継続：動作継続	動作パーフェクト
シテイタ	結果継続	動作パーフェクト／状態パーフェクト

完成性、継続性、パーフェクト性が 1 回の運動について表れるAspect的特徴であるのに対し、反復性は複数回の運動を連続体として捉えるという特徴がある。寺村(1984)はこれについて次のように述べている。

寺村(1984)

- 本来点的な事象でも、それが連続すると線的な事象と見なされるということがある。  
(p.128)
- (「父ハコノ頃 6 時前ニ起テイル」という文について)いわゆる瞬間動詞が、ある文脈の中で、現在連続している習慣を表すことができるのは、それらは一つ一つとしては点であるが、連続したものとして、線として解釈されるからである。(p.130)

また須田(2010)は反復性について次のように述べる。

須田(2010 p.98、99)

反復性における頻度や周期性は非限定的であるため、それを表す文の述語動詞は、継続相で過程継続を表し、完成相で過程継続の非明示を示す。つまり、完成相もくりかえされている動作を表すが、その過程が継続しているということは、積極的に明示していないのである。これは、個々の動作の内的な時間構造に関わるものではなく、くりかえされる複数的な動作全体が、過程のようにとらえられるかぎりにおいて、Aspekチュアリティに属すると言えるだろう。

反復性が出現するのは、「この頃、いつも、ときどき、毎日」などが共起する場合である。寺村(1984)、須田(2010)は、反復性が、動詞のもつ語彙的Aspectの特徴に関わらず、「継続」の局面を表すことを指摘している。反復性はパーフェクト性と同様、工藤(1995)によって派生的Aspectに位置づけられているが、基本Aspectとの違いは、動詞句のAspect的意味が、動詞のもつ語彙的Aspectではなく文を構成する副詞句などの要素によって決まるという点にある。

### 2.1.2.3 維持性

森山(1988)は「時定項分析」という手法で動詞句のアスペク的な意味を分析している。

森山(1988 p.138)

新しいアスペクト研究の手法として、動きの質的变化を表す点(時定項)を規定して、それを組み合わせることによって意味を総合的に分析する分析方法(時定項分析)を提案する。これによって、アスペクトに関与する諸形式、副詞的成分をもまとめて分析し、さらにいわゆる継続相、完成相の意味をはじめ、アスペクト諸形式の意味を統一的に分析・記述しようとするものである。

森山(1988)はシテイル、シハジメル、シカケル、などの、アスペクト形式だけでなく、共起する副詞的成分の影響で表れる、動詞句のアスペク的な意味を取りだし、類型化した。三宅(1999)が「この分析には、単なる表面的な分類にとどまらない、動詞のアスペク的な意味の内部構造にまで踏み込んだ分類が可能になるという利点がある」と述べているように、動詞が語彙的に持つアスペク的な性質をさらに詳細にとらえようとしている。

森山(1988)はまず動詞を「一時的なもの」と「持続的なもの」に分けた。持続性の有無は「3時間、しばらく」といった、期間成分の共起によって判定される。「一時的なもの」は「一時点的な変化」か、「無変化」かのどちらかであり、持続的なものには「過程」「維持」「結果持続」がある。持続的なものは下のような基準で3分類されている。

#### 持続の局面

- |                        |             |
|------------------------|-------------|
| ①動きが運動として展開している期間： 過程  | ・人が3時間歩く。   |
| ②動きの結果の保存が主体的に行われる： 維持 | ・人が3時間座る。   |
| ③動きの結果が持続的である： 結果持続    | ・3時間時計が止まる。 |

「過程」「維持」「結果持続」は全て期間成分とは共起するが、「結果持続」は「～シツヅケル」とは共起せず、「～シハジメル」と共起するのは「過程」のみである。

表 2-3 持続の局面と共起成分

		期間 成分	～シ ツヅケル	～シ ハジメル
過程	歩く	○	○	○
維持	座る	○	○	×
結果持続	止まる	○	×	×

森山(1988)は、「継続」というアスペクティックの意味を持つ「動作進行」や「結果継続」にはない性質を持つものとして「維持」を設定している。「維持」は持続的な動きの中で「動きの結果の保存が主体的に行われ、過程と結果持続の中間的なもの(森山 1998)」である。そしてこの「維持」という局面について、森山(1988)は次のように述べている。

森山(1988)

- ・持続的な動きの局面のなかでも、典型的な運動の局面は[過程]であるのに対し、典型的に非運動的なものは[結果持続]であるといえる。中間にあるのが[維持]である。

(p.143)

- ・[過程]が状態化された場合、展開中の運動が取り上げられることになり、いわゆる進行中の意味になる。次に[維持]が状態化された場合、結果が主体の意志によって、保存、維持中という意味になる。(p.147)

例えば、「ぶらさがる」は維持の局面をもつ動詞であるが、森山(1988)は「鉄棒にぶらさがり続ける」ことは、「運動」の局面であるか判断が微妙であるとしている。詳しく見てみると、「ぶらさがっている」という局面は、「時計が止まっている」という典型的な非運動の局面とは異なり、結果の保存が主体的に行われており、「運動」の局面とも捉えられる。典型的な運動の局面を表す[過程]は「走り始める(開始限界)→走っている(過程)」という構造を持つが、「ぶらさがる」は「ぶらさがった(終了限界)→ぶらさがっている(維持)」という構造をもつ。このため、「結果持続」と「運動」という二つの性質を持つものとして「維持」を設定しているのである。

この維持性という性質をアスペクティックの意味のひとつとして認め、これを動詞が本来語彙的として備えているのかどうかという視点は、本研究が行う、従属節のアスペクト分析において、有効であると考えられる。

以上、継続性、完成性、パーフェクト性、反復性、維持性という、5つのアスペクティックの意味について確認した。次に、2.1.3 では談話(=複数の文の集合体)レベルに表れるアスペクトの機能について述べる。

### 2.1.3 出来事間の時間的前後関係

工藤(1995)はテキストに表れるアスペクトの機能を次のように述べている。

工藤(1995 p.61)

アスペクトは〈他の出来事との外的時間関係のなかで、運動内部の時間的展開の姿をとらえる〉ものであって、複数の出来事間の時間関係〈タクシス〉を表し分けるというテキスト的機能を果たす。出来事間の時間的順序性＝タクシスという時間概念の取り出しはアスペクトの考察にとって、本質的な重要性をもっている。

アスペクトは談話の中では複数の出来事間の時間的關係を表すという機能を持っている。「出来事間の時間關係＝タクシス」はテンス同様、外的時間を表すが、テンスが過去と非過去で対立するのに対し、タクシスは継起的か同時かで対立する。

「出来事間の時間關係」＝タクシス」というカテゴリーの中では、完成相は継起性を、継続相は同時性を示すという点で対立している。

(12) 手を洗った。食卓についた。料理が運び込まれた。サルをつれた曲芸師が入ってきた。

(13) 手を洗った。食卓についた。前の二人は楽しそうに話している。

(12)「洗った」「食卓についた」「運び込まれた」「曲芸師が入ってきた」は、いずれもスル形式で、これらの出来事が継起的に起こったことを表している。「手を洗った」「食卓についた」「料理が運び込まれた」を継起的な出来事としてとらえるのは常識的な類推に助けられるからだとも言えるが、「サルをつれた曲芸師が入ってきた」は全く関連性のない出来事であるにもかかわらず、やはり継起性は崩れない。

しかし(13)は継起的に起こったことではなく「食卓についた」とき「二人が楽しそうに話す」という出来事はすでに始まっており、「食卓についた」時点で継続していたことを表す。(12)(13)を簡略化して次のように示す。

(12)' A シタ。B シタ。C シタ。

(13)' D シタ。E シタ。F シテイタ。

(12)'は A、B、C が A→B→C の順番で継起的に起こっている。一方(13)'では D と E は継起的に起こるが、F と E は同じ時間枠に位置づけられており、工藤(1995)はこれを同時性と呼んでいる。このようなテキスト機能は複文においても見られる。

(14) 6時に太郎は起きて、テレビを見た。

(15) 6時に太郎は起きていて、テレビを見ていた。

(14)は「起きる(完成性)→見る(完成性)」が継起的に起こるが、(15)は6時の時点で「起きている」という状態にあり、その状態でテレビを見ていたことになる。つまり、「6時」の時点で、「起きている(継続性)」ことと「見ている(継続性)」ことは同時に起こっている。

本研究では、従属節のアスペクト的意味を分析するため、タクシスについては、主節と従属節間の時間的先後関係についてとりあげる。ナガラ節が完成性、パーフェクト性を表す場合、ナガラ

節は主節に先行して起こり、ナガラ節が継続性、反復性、持続性の場合には主節とナガラ節のタクシスは同時性を表す。

## 2.2 アスペクト的特徴に基づく動詞の分類

2.2 節では、アスペクト的特徴に基づく動詞の分類について述べる。先行研究を見ると、これには大きく、二つの流れがある。一つは奥田、工藤を中心とした、日本語学の分野で進められた分類の方法で、形態論的アスペクト対立に基づいた動詞の分類である。

もう一つは、動詞が語彙的意味として持っているアスペクト的特徴に基づいた分類で、ここでは、Vendler をふまえ中右、三原が行った分類について見ていく。

### 2.2.1 形態論的アスペクト対立に基づいた動詞の分類—工藤による動詞分類

奥田(1977)は金田一(1950)の「継続動詞」と「瞬間動詞」という、動詞の動きが表す時間の長さによる分類を批判し、形態論的アスペクト対立を持つ動詞を「動作動詞」と「変化動詞」に分けた。奥田の「動作」か「変化」かという観点に、「主体」か「客体」かという観点を組み合わせ、工藤(1995)は動詞を次のように分類した。

#### (A) 外的運動動詞 (アスペクト対立 有)

##### (A・1) 主体動作・客体変化動詞

開ける、折る、消す、倒す、曲げる、入れる、並べる、抜く、出す、運ぶ、作る...

##### (A・2) 主体変化動詞

行く、来る、帰る、立つ、並ぶ、開く、折れる、消える、曲がる、入る、出る、太る、就職する...

##### (A・3) 主体動作動詞

動かす、まわす、打つ、蹴る、押す、食べる、見る、言う、歩く、泳ぐ、走る、泣く、飛ぶ、揺れる...

#### (B) 内的情態動詞 (アスペクト対立の部分的変容)

思う、考える、あきらめる、感心する、苦しむ、あきれる、驚く、味がする、聞こえる、痛む、ふるえる、疲れる、(はらが)へる...

#### (C) 静態動詞 (アスペクト対立 無)

ある、いる、そびえている、値する、意味する、違う、甘すぎる、泳げる、話せる、優れている、ありふれている...

「(A) 外的運動動詞」はスルーシテイルのアスペクト対立があり、運動をあらわすという意味で、動詞らしい動詞といえる。「(B) 内的情態動詞」は思考や感情、感覚を表す。スルーシテイルのアスペクト対立はあるが、「{私は／\*彼は}そう思う」のように人称によってスル形、シテイル形の使用

制限があり、「(A) 外的運動動詞」とは区別される。「(C) 静態動詞」は存在や関係性などを表す語で、スルーシテイルのAspect対立がない。「(A) 外的運動動詞」が動詞らしい動詞であるとするれば、「(C) 静態動詞」は、その対極にあるといえる。

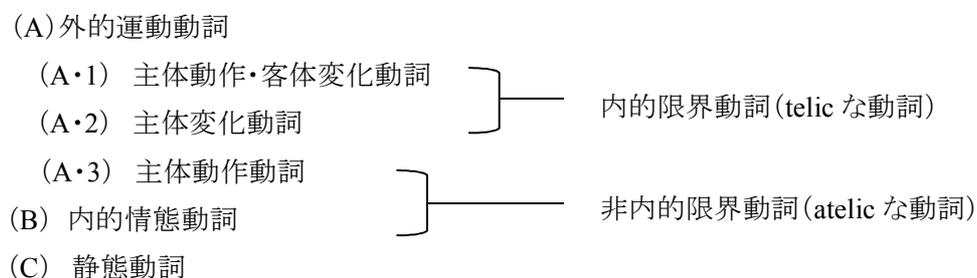
(A・3)「主体動作動詞」のテイル形は動作の継続を表し、(A・2) 主体変化動詞のテイル形は変化結果の継続を表す。一方、(A・3)「主体動作・客体変化動詞」のテイル形は能動態では動作の継続を表し、受動態では変化結果の継続を表す。

以上の分類は、シテイル形式に表れるAspect的意味によって動詞を分類したものであるが、工藤(1995)ではこの分類を、「内的時間的限界」という別の観点から見た場合、異なる分類になることも指摘している。「内的時間的限界」を工藤(1995)は次のように説明している。

工藤(1995 p.57)

語彙的意味の中から〈運動が必然的に尽きる内的時間限界〉という示唆的意味特徴をとりだしながら、この限界の有無の観点から、動詞を大きく2分類する考え方もありうる。(「駅まで歩く」のような場合における〈外的限界〉と区別して、動詞の語彙的意味自身のなかにある時間的限界を〈内的限界〉と呼ぶこととする。)

この「内的時間的限界」の観点からの分類を先述の工藤の動詞分類にあてはめると、次のようになる。



外的運動動詞のうち「主体動作・客体変化動詞」と「主体変化・主体動作動詞」は終了限界が動詞の語彙的意味に含まれている「内的限界動詞」であり、「主体動作動詞」と「内的情態動詞」は終了限界を語彙的意味に持たない「非内的限界動詞」である。

この「動作動詞・変化動詞」という観点と「内的限界性」という観点は奥田を引き継いだものであるが、両方の観点を取り入れることに対して、須田(2010)は「動作動詞と変化動詞という動詞分類と、限界動詞と無限改動詞という動詞分類とは、動詞語彙を分ける境界(どの範囲でグループ分けするか)が異なることになる。(p.136)」と、批判している。須田(2010)は「動作動詞・変化動詞」は継続相のAspect的な意味の分析に使われ、「内的時間的限界」は完成相のAspect的な意味の分析に使われると指摘し、両者を次のように関係付けるべきだと主張する。

須田(2010 p137)

もし、動作動詞、変化動詞(さらに状態動詞、活動動詞、態度動詞)などを、アスペクトに関わる動詞の語彙・文法的な系列として位置づけるならば、限界動詞と無限界動詞という動詞分類が、アスペクトに関わるもっとも一般的な分類であるのに対して、動作動詞、変化動詞などは、より具体的な現実を反映する、その下位分類であるということになる。

「動作動詞」「変化動詞」という分類は、シテイル形式に表れるアスペクト的意味によって動詞を分類したものであり、この点において、形態論的アスペクト対立に基づいた動詞の分類と行うことができる。一方、「限界性」を基準にした分類は、動詞の語彙的アスペクトに基づくものである。

動詞が語彙的に持つアスペクト的特徴に基づいた動詞分類について、節を改め、次節でさらに詳しく見ていきたい。

## 2.2.2 語彙的アスペクトに基づく動詞の分類

スルーシテイルといった形態論的対立によらず、動詞が本来、語彙的意味として持っているアスペクト的特徴に基づいた動詞の分類は、英語動詞を分類した Vendler(1967)の分類が広く援用されている。Vendler(1967)をふまえ、日本語動詞を分類したものに中右(1994)、三原(2004)がある。また、限界性の有無を動詞分類の中心に据えたものに、副島(2006)、須田(2010)がある。

本節ではまず、Vendler(1967)の4分類をふまえ、動詞を3つに分類した三原(2004)の分類について述べる。

三原(2004)は Vendler(1967)の分類を次のように説明している。

三原(2004) p.7-8

Vendler 分類は、まず状態性の基準によって状態(state)動詞を取り出し、次に限界性(完了性とも言う)の基準によって動作に必然的な終わりが無い活動(activity)動詞を孤立させる。(終わりが無い動詞を非限界動詞、終わりが有る動詞を限界動詞と言う。)そして、限界動詞を瞬間性の基準によって、動作が瞬間的に遂行される到達(achievement)動詞と、動作を行うのに時間を要する達成(accomplishment)動詞に区分する。(中略)

- a. 状態動詞 desire, want, love
- b. 活動動詞 run (around), walk (and walk), push (a cart)
- c. 到達動詞 recognize, win (the race), die
- d. 達成動詞 run a mile, paint a picture, recover from illness

中右(1994)は Vendler は「主として動詞の語彙論的アスペクトを扱うが、真相は動詞そのものの

性質というよりはむしろ、構文の性質を扱っている(p.455)」と指摘しており、三原(2004)もこれを、「実際には動詞分類ではなく動詞句(VP)分類である(p.8)」と述べている。これは run が「活動動詞」と「達成動詞」に置かれていることからわかるように、run around(走り回る)は限界性を持たないが、run a mile(1 マイル走る)は限界性を持つといった現象をさしている。

動詞の限界性が、文中の動詞以外の要素によって変わる現象について工藤(1995)は「二側面動詞」として取り上げている。工藤(1995)は(16)a、b を例に、動詞の語彙的アスペクトのみではテイル形式の意味が決定できず、構文的条件によって「動作の継続」か「結果の継続」かが決まると述べ、このような「のぼる、ふえる」のような動詞を工藤は二側面動詞と呼んだ。(p.79)

(16)a. {崖の上に／崖の上を}のぼっている。

b. {1 万人に／じよじよに}ふえている。

これに対して三原(2004)は、動詞を一つの類型に収めきれないのは二側面動詞に限ったことではないとして(17)のような例文を挙げている。

(17)a. 『罪と罰』を{2 日間／2 日で}読んだ。

b. 川岸を{30 分ほど／鉄橋のところまで 30 分ほどで}歩いた。

三原(2004)は(17)a の「2 日間読んだ」、(17)b の「30 分ほど歩いた」は限界性をもたないが、(17)a「2 日で読んだ」、(17)b「鉄橋のところまで歩いた」は限界性を有しているとしている。

(16)(17)に見られるような、本来限界性を持たない活動動詞が述語となる文に、付加詞をつけることで、動作の限界点を設定することを、三原(2004)ではアスペクト限定と呼んでいる。アスペクト限定詞が付加されることで活動動詞は達成動詞へと変換されるわけであるが、三原(2004)は「付加限定詞は随意要素であるので、これを含まない方をその動詞の基本用法とすることができる(p.31)」と述べ、工藤(1995)の「二側面動詞」、Vendler(1967)の「run の重複」のような取り扱いを回避している。

さらに、中右(1994)、三原(2004)は、限界動詞である「到達動詞」と「達成動詞」をひとつにまとめ、動詞全体を「状態(state)動詞」、非限界動詞である「行為(action)動詞」、そして、限界動詞である「過程(process)動詞」の 3 つに分類している。Vendler の「到達動詞」と「達成動詞」を区別する基準は瞬間性であったが、これに対し、三原(2004)は(18)のような例をあげ、瞬間性で動詞動詞を区別することに疑問を呈している。(p.23)

(18)a. 積み荷が(衝突事故のため)一瞬で崩れた。

b. 裏山が(群発地震のため)1 週間で崩れた。

(18)で「崩れる」という運動が成立するために要する「時間」を規定しているのは、動詞以外の要素であり、このことから、限界動詞を区別する必要はないと結論付けている。

また三原(2004)は、工藤(1995)が設定した「内的情態動詞」を「行為(action)動詞」に分類している。工藤(1995)は「内的情態動詞」はスルーシテイルの形式を持つが、「{私は／\*彼は}そう思う」のような人称制限があることから、「外的運動動詞」と区別している。しかし、三原(2000)は内的情態動詞の「未完了的特質」「ルが表す未来事態」「未完了の逆説」をとりあげ、内的情態動詞が「行為動詞(非限界動詞)」であると主張している。以下、この三原(2004)の主張を見ていく。

三原(2000)は「未完了的特質」を、動作の終了に要する時間を表す「～{分／時間／日／年}で」との共起テストを使って調べている。「壊れる、届く」のような限界動詞はこれらの表現と共起するが、「悲しむ、苦しむ」のような内的情態動詞は共起しないことから、内的限界動詞は限界動詞ではないとしている。

- (19) a. コンピューターが{3週間で／2ヶ月で}壊れた。
- b. 小包が{3時間で／2日で}届いた。
- c. \*国民が大統領の死を{3時間で／2日で}悲しんだ。
- d. \*農民が日照りに{3ヶ月で／2年で}苦しんだ。

次に、三原(2000)では、行為動詞はスル形式では未来の事態を表し、状態動詞は(未来を表す文脈がなければ)基本的に現在の事態を表すことをふまえ、内的情態動詞が行為動詞と同じふるまいをみせることを(20)(21)の例文をあげて指摘している。

- (20) a. 太郎が大阪に来る。
- b. 花子がショパンを演奏する。
- c. 僕は明日は家にいる。
- d. 太郎が図書館にいる。
- e. 本棚に本がある。
- (21) a. 僕はもう諦めるよ。(諦めている)
- b. 親が悲しむぞ。(悲しんでいる)

(20)a.b.は行為動詞のスル形式で、未来の事態を表し、(20)c.d.e.は状態動詞で、「明日」という未来を表す文脈の c.は未来を表すが、d.e.は現在を表す。一方、(21)a.b.は内的情態動詞で、スル形式では未来の事態を表しており、現在の事態を表すにはテイル形式を用いなければならない。(21)a.b.の特徴は(20)a.b.と同じであることから、三原(2000)は、内的情態動詞は状態動詞とは異なるが、行為動詞とは同じであるとしている。

最後に三原(2000)は「未完了の逆説」という現象をとりあげ、内的情態動詞と行為動詞の共通

性を主張している。「未完了の逆説」とは、「歩く、叱る」のような行為動詞は、2.1.2 で述べたように、終了限界をもたない非限界動詞であるため、開始限界を超えることで運動が成立したとみなされる。このため、行為動詞のテイル形式は(22)a.b.のように事態の成立を含意することになる。一方、限界動詞である「作る、立てる」のテイル形式は(22)c.d.のように、事態の成立を含意しない。

- (22) a. 赤ちゃんが歩いている。(→赤ちゃんが歩いた)
- b. 母親が子どもを叱っている。(→子どもを叱った)
- c. 山本さんが桶を作っている。(×→桶を作った)
- d. 菜穂子が納屋を建てている。(×→納屋を建てた)

これを内的情態動詞に当てはめると(23)のように、行為動詞と同じふるまいを見せる。

- (23) a. 村田さんは大家を恨んでいる。(→大家を恨んだ)
- b. 孝志は弟の才能を妬んでいる。(→才能を妬んだ)
- c. 被災者が食料不足に苦しんでいる。(→被災者が苦しんだ)

工藤(1995)も「内的情態動詞」を非内的限界動詞(atelic な動詞)としていることから、三原(2000)で示されたような、行為動詞と共通するアスペクト的特徴について認識していることがわかる。両者の違いは、三原(2000)が、工藤の「内的情態動詞」にみられるような人称制限の問題を、アスペクトによる動詞分類に持ち込むべきでないという立場から、内的情態動詞を行為動詞に分類している点にあるといえよう。

三原(2004)が限界性の有無を確認するために行っている様々なテストは、工藤(1995)の「外的運動動詞」「内的情態動詞」という枠組みのグループ分けとは異なるが、「主体動作動詞」は「行為動詞」に相当し、「主体変化動詞／主体動作・客体変化動詞」は「過程動詞」に相当するものとしてとらえられている。

本研究は、従属節におけるアスペクト的意味の分析にあたり、動詞のスルーシテイルといった形態がもつアスペクト的特徴だけでなく、文脈の中で持ちうるアスペクト的特徴について言及し、そこから導かれる従属節の意味を特定しようとするものである。動詞のアスペクト的特徴は、限界性と関係が深いため、本研究では限界性の有無を上位の概念とし、工藤(1995)の「主体変化」「客体変化」「主体動作」をその下位概念として、動詞の分類を行いたい。

具体的には、まず状態動詞を取り出し、次に、限界性の有無という観点から動詞を二分した、中右、三原の3分類にならう。そして、その名称は「限界動詞」、「非限界動詞」とする。限界動詞の下位分類を「主体動作・客体変化動詞」と「主体変化動詞」、非限界動詞の下位分類を「主体動作動詞」と「内的情態動詞」とし、必要がある場合は区別することとする。

三原(2004)は Vendler の分類と工藤(1995)の分類は基本的には同質であると見ており、工藤の分類に、Vendler の分類を対応させているが、これに三原の分類、さらに、本稿の分類を対照させたものを表 2-4 に示す。

表 2-4 動詞分類比較

形態論的対立に基づいた分類	語彙的アスペクトに基づいた分類		本稿の分類	
	工藤の分類	Vendler の分類		三原の分類
(C) 静態動詞		状態動詞	状態動詞	[ 状態動詞 ]
(A) 外的運動動詞 (A・1) 主体動作・客体変化動詞		達成動詞	過程動詞	[ 限界動詞 ] ・主体動作・ 客体変化動詞
(A・2) 主体変化動詞		到達動詞		・主体変化動詞
(A・3) 主体動作動詞		活動動詞	行為動詞	[ 非限界動詞 ] ・主体動作動詞
(B) 内的情態動詞		規定なし		・内的情態動詞

表 2-4 の「本稿の分類」について説明する。形態的対立に基づいた動詞分類でも、語彙的アスペクトに基づいた動詞分類においても、第一に行われる分類の基準は「運動が時間的に展開するか否か」である。運動が時間的に展開しない動詞は、「静態動詞」(工藤 1995)あるいは「状態動詞」(三原 2004)として、まず取り出されており、本稿もこれにならう。時間的に展開しない動詞を本稿では「状態動詞」と呼ぶことにする。「状態動詞」は、「ある、いる、そびえている」など、運動が時間的に展開しない種類の動詞である。

次に、運動が時間的に展開する動詞について、運動の限界性の有無という観点から分類すると、「限界動詞」と「非限界動詞」に分けられる。「限界動詞」と「非限界動詞」は次のように、運動の展開に対応するアスペクト的特徴が異なる。

非限界動詞 : 運動開始→継続→運動終了

限界動詞 : 運動(変化)開始→(運動・変化の進行)

→運動(変化)終了→変化結果継続

非限界動詞の下位分類には、「食べる、書く、見る」など動作を表す「主体動作動詞」と、感情、思考を表す「内的情態動詞」がある。

限界動詞の下位分類には「主体変化動詞」と「主体動作・客体変化動詞」がある。「主体変化動詞」には「着る、履く」などの再帰動詞や「座る、立つ、乗る、うつむく、落ちる」などの姿勢、位置変化を表す動詞がある。「主体動作・客体変化動詞」は「作る、置く、落とす、片付ける」などの動詞

で、動作主が主語の場合、継続の局面は「動作の進行」を表すが、受動態では、継続の局面は「変化結果の継続」となる。「主体変化動詞」でも、変化進行の過程が認識できる(24)のような場合、「閉まる」は変化結果ではなく、「変化の進行＝継続」の局面を表している。

(24) ドアが「ギー」という音をたてて、ゆっくりと閉まるのを、遠くから見ていた。

以上、2.2.2 では、語彙的アスペクトに基づく動詞の分類に関する先行文献を概観し、形態論的アスペクト対立に基づいた動詞の分類と比較した。さらに本研究で取り扱う動詞の名称についてまとめた。

### 2.3 第2章のまとめ

2.1 では日本語のアスペクトに関する先行研究を概観し、アスペクト的特徴に基づく動詞の分類を行った。アスペクトは出来事の「時間的展開性(内的時間)」の把握の仕方を表す文法カテゴリーである。単語レベルの、スルーシテイルという形態論的対立に基づくアスペクト的意味の対立がある一方、文レベルの様々な表現形式によって表されるアスペクト的意味はアスペクチュアリティと呼ばれる。

アスペクト的な意味には、「継続性」「完成性」「パーフェクト性」「反復性」「維持性」がある。「継続性」の下位分類には「進行」と「結果」がある。主体動作動詞の継続の局面は「動作の進行」であり、主体変化動詞の継続の局面は「変化結果」の継続である。「完成性」の下位分類には「ひとまとまり性」と「限界達成性」がある。「限界達成性」はさらに「終了限界達成性」と「開始限界達成性」に分けられる。

アスペクト的意味についてまとめると、図 2-3 のようになる。

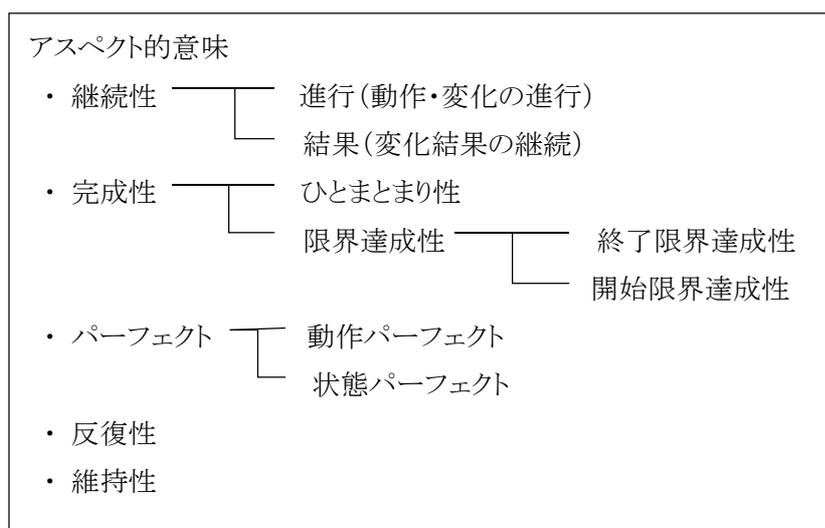


図 2-3 アスペクト的意味

「パーフェクト」は、設定時間に先行して運動が終了し、終了後もその効力が続いているという局面で、パーフェクトの特徴はこの「先行性」「完成性」「効力」の3点である。パーフェクトには「動作パーフェクト」と「状態パーフェクト」があり、「動作パーフェクト」は動詞の語彙アスペクトに関わりなく現れるが、「状態パーフェクト」は限界動詞の「変化結果の継続」を表すため、限界動詞にのみ現れる。

「維持」は変化結果の維持が主体的に行われている局面に現れる。「変化結果の継続」が非運動の局面であるのに対し、「維持」は変化結果を主体的に保持する運動の局面であるという点に特徴がある。

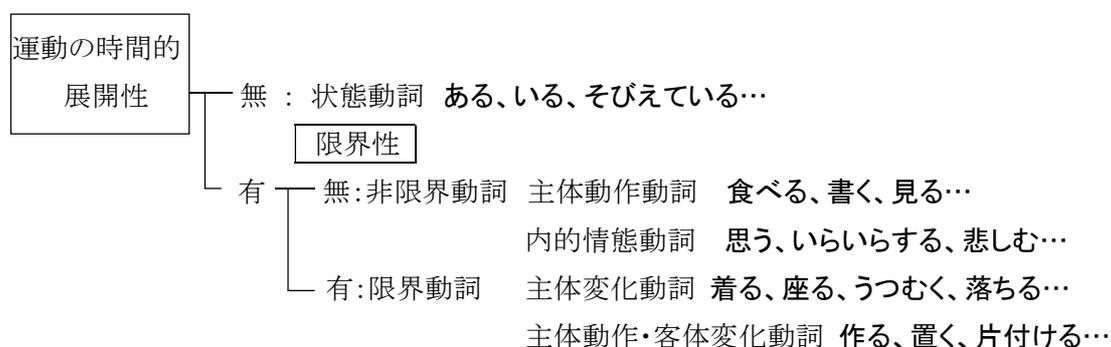
また、アスペクトには、複数の出来事の時間関係＝タクシスを表すという機能がある。複数の文の集合体である談話、あるいは複文において、「完成性」「パーフェクト性」は継起性を表し、「継続性」「反復性」「持続性」は同時性を表す。本稿では従属節のアスペクトについて分析するため、タクシスについては、主節と従属節の時間的先後関係について見ていく。

次に 2.2 節ではアスペクト的特徴に基づく動詞の分類について概観した。アスペクト的特徴に基づく動詞の分類には、形態論的カテゴリーに基づくものと、語彙的アスペクトに基づくものがあった。

形態論的カテゴリーに基づくものは、テイル形式に現れるアスペクト的特徴をもとに、動詞を分類するものだが、本研究では動詞が表しうるアスペクト的特徴を広くとらえる必要があることから、語彙的アスペクトの観点で分類をおこなった。

まず「運動の時間的展開性の有無」という観点から、これを持たない動詞として「状態動詞」を取り出し、次に「運動の時間的展開性」を有する動詞については、限界性の有無という観点から「限界動詞」、「非限界動詞」とに分けた。「限界動詞」の下位分類には、「主体変化動詞」と「主体動作・客体変化動詞」がある。「非限界動詞」の下位分類には「主体動作動詞」と「内的情態動詞」がある。

まとめると、次のようになる。第3章以降では、動詞の種類について述べる際はこの名称を用いる。



## 第3章 ナガラ節のアスペクト的特徴

### 3.1 ナガラに関する先行研究

ナガラに関する先行研究には森田(1980)、南(1974、1993)、堀川(1994)、三宅(1999)、益岡(2000)、松田(2000)、村木(2006)などがある。森田(1980)は意味分析を中心としている。南(1974、1993)は従属句の階層性という観点からナガラを逆接と非逆接に分類している。堀川(1994)はナガラ節と主節の時間的共存性という観点からの分析を行い、村木(2006)は時間性と接続関係とを分けて分析することを主張している。また、益岡(2000)、三宅(1999)は動詞の語彙アスペクトという観点から分析を行っている。松田(2000)は付帯状況ナガラの用法について述べている。本節ではまず、これらの研究を概観し、次に、ナガラ節のアスペクト的特徴に基づいて、2つの用法に分類し、これを検証する。

#### 3.1.1 意味分析を中心とした記述

意味分析を中心とした研究には森田(1980)がある。森田はナガラの意味として次の3つをあげている。

森田(1980 p.841)

- ①主として体言に付いて「～ながらに／～ながらの」の形で、次に述べる動作や状態のようすやありさまが、ある状態のままであることを表す。
- ②意志的な動作動詞の連用形に付いて、次に述べる動作と同時に副次的な動作が行われることを表す。同時進行の場合は瞬間動作の動詞には付かないが「手をたたきながら歩く」のような反復行為の場合成り立つ。非情物や自然現象はナガラを用いると状態説明になる。
- ③無意志的な動作動詞や状態動詞、動詞＋ているなどの連用形、形容詞の連体形、形容動詞や副詞の語幹、体言、打ち消し「ない」などについて、その状態や状況にふさわしくない事態・事柄が同時に存することを表す。

森田はナガラ節の動詞の意志性の有無、「瞬間動詞」「継続動詞」という動詞のアスペクト的特徴、テイル形か、連用形か、ナイ形かといった形態によって「同時進行」と「逆接」とに分けているが、次のような矛盾も抱えている。

森田(1980 p.843)

同時進行②と解するか逆接③と解するかは微妙で、両者は本質的な違いではない。

(中略)「何度も失敗を重ねながらも遂にやりおおせた」を<sup>4</sup>同時進行と取るか、逆接と解するかは AB の意味関係の取り方によって決まってくる。

森田(1980)は、動詞の種類や形態だけではなく前後の意味関係によっても逆接の意味が含まれると指摘している。逆接と非逆接の違いは文脈によって決まることになるが、その条件については明らかにしていない。

また、森田は意志的な動作動詞＋ナガラで同時進行、無意志的な動作動詞＋ナガラで逆接の意味になると述べている。しかし、益岡(2000)が(1)(2)のように指摘しているとおり、無意志動詞＋ナガラでも同時進行の意味を表す例が数多く観察されており、意志性の有無は「同時進行」、「逆接」といった用法の使用条件には当たらないことになる。

(1) 足をとられてよろよろしながら感嘆しました。(益岡 2000 p.202)

(2) 彼の言葉を聞き、震えながらペンを握んだ。(益岡 2000 p.203)

また、「座る」という動詞について見てみると、(4)は正用と見なされるが、(3)は容認度が下がる。このような、同じ「座る」という動詞であるにも関わらず、(3)(4)のように容認度に違いが見られることについての理由は、森田の分析からは得られない<sup>5</sup>。

(3) ??太郎は座りナガラ弘と話していた。(仁田 1995)<sup>6</sup>

(4) 近くの席にすわりながら「よくくるのか」と聞いた。(新)

### 3.1.2 文の階層性という観点からの研究

南は従属句をその構成要素の成分、句と句の包含関係などによって、ABC の三類に分けている。「ナガラ」は「A 類のナガラ」《非逆接》と「B 類のナガラ」《逆接》に分けられている。A 類は構成要素の範囲がもっとも限られており、ついで B 類、C 類の順で広がる。南(1974、1993)の分類に従って A 類のナガラと B 類のナガラを比べてみると次のようになる。

1. A 類のナガラ節には「ナイ形」は現れないが B 類のナガラ節には「ナイ形」も現れる。
2. A 類のナガラ文は主文のモダリティに関して制約はないが、B 類のナガラ文の文末には命令や意志表現は現れない。

<sup>4</sup> ( ) の部分は筆者による補足である。

<sup>5</sup> 「座る」の語彙アスペクト的特徴については、日本語母語話者の間でも、アスペクトの捉え方に、差が見られる。これについては、第 4 章で詳細に述べる。

<sup>6</sup> 文法性の判断は仁田(1995)による。

(5) \*金ガアリナガラ、買ウノハヤメテオコウ。(南 1993 p.101)

(6) 金ガアリナガラ、買ウノハヤメタ。(南 1993 p.101)

(7) 歌を歌いナガラ歩いていこう。

3. A 類のナガラは主節と従属節の主語が同じでなければならないが、B 類のナガラは異なる主語であってもよい。

(8) 耳ハ聞コエヌナガラ フシハ整ワヌナガラ大キクロヲヒライテ高ラカニ歌ッテイルノデアル。(南 1974 p.123)

しかし堀川(1994)は、A 類のナガラでも異なる主語が出現することを指摘している。

(9) チェロが低音をささえながら、ヴァイオリンが美しい旋律を歌う。(堀川 1994 p.35)

南の研究は「ナガラ」のみを取り扱ったものではなく、従属句全般を対象としたものであるためナガラに関しては当てはまらない部分もあるが、逆接ナガラと非逆接ナガラの違いを文の構造的なものとしてとらえている点は注目される。

### 3.1.3 時間性と接続関係を別の体系としてとり扱った研究

村木(2006)は、従来、動詞+ナガラの用法が「同時進行」と「逆接」とに二分されてきたことに疑問を呈している。村木(2006)は「同時進行」は〈時間性〉〈同時か継起か〉で対立し、「逆接」は〈接続関係〉〈逆接か順接か〉で対立すると指摘した上で、次のように述べている。

村木(2006 p.10)

〈時間性〉と〈接続関係〉をそれぞれ独立の軸とすると、以下のような十字分類ができる。

①は「時間性」を問題にしている。一方、②は表現主体の判断を問題にしている。順接か逆接であるかは、表現主体が複数の事態をどうとらえるかという判断にもとづくものである。「同時」と「逆接」は異なるカテゴリーを問題にしているのである。

①-1 ふたつのことがらが同時におこる様子(時間性) → 同時性

①-2 ふたつのことがらが前後しておこる様子(時間性) → 継起性

②-1 ふたつのことがらの成立が自然であるととらえられる一偶然的な同時生起  
→ 順接

②-2 ふたつのことがらの成立が不自然であるととらえられる一偶然的とは思われない  
ふたつの事態 → 逆接

接続	時間性	同時	継起
	順接	①-1	①-2
逆接		②-1	②-2

村木(2006)は①-2 に分類できる文として(10)を例に挙げ、「そして、同時に」という意味ではなく、「そして、その後」という意味だと述べている。

(10) わたしたちは途中何度か休憩をとりながら、やっとここまで来た。

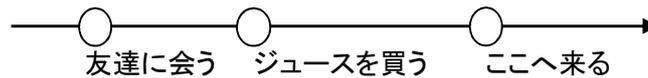
\* (わたしたちは途中何度か休憩をとった。そして、同時に やっとここまで来た。)

(わたしたちは途中何度か休憩をとった。そして、その後 やっとここまで来た。)

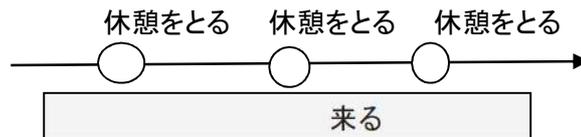
しかし、(10)の文は、「そして、その後」といった関係が成り立つといえるだろうか。(10)を(11)と比べてみよう。

(11) 友達に会って、スーパーでジュースを買って、ここへ来た。

(11)は「スーパーでジュースを買った。そして、その後、ここへ来た。」という読みが自然である。「来る」という動作と、「スーパーでジュースを買う」という動作に関連性はなく、それぞれが独立した動きとして解釈できる。(11)の動きを図示すると次のようになる。



しかし(10)の「休憩をとる」と「来る」という動作はどうだろう。(10)は(11)とは異なり、「休憩をとる」は「来る」がどのようにして成立したかを表していると考えられる。(10)の動きを図示すると次のようになる。



(10)と(11)の違いをアスペクト的に見てみよう。(11)は「会う」「買う」「来る」が完成性を持ち、出来事が継起的に起こったととらえられるが、(10)の「来る」は、出発地点から到着地点までの移動という意味を包含しており、この意味で、動きの継続性を表しているのとらえることができる。こう考えると、くりかえし起こる「休憩をとる」という動きは、「来る」がどのようにして成立したかという付帯状況の意味を表しており、二つの動きは幅のある時間の中にどちらも生起するという意味で、同時に行われたと解釈することができる。

村木(2006)では、時間性が継起で、接続関係が順接となる例が他に示されていない。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のサブコーパスである、「図書館書籍」を使って、ナガラ of 例文を抽出したところ、例文数は1152例だったが、この中に時間性が継起で、接続関係が順接となる例を見つけることはできなかった。

村木(2006)は、時間関係と、接続関係を分けて考えるべきだと主張するが、本稿では特に、逆接ナガラについては、時間関係と接続関係は相関すると考える。逆接のナガラについては3.4節で詳細に分析するが、結論を先取りして述べると、本稿では、「時間関係」が継起であれば、接続関係は必ず「逆接」となると考える。ナガラ節のアスペクト的意味と「継起」という時間関係は相関しており、このような時間性が「逆接」という接続関係が現れる使用条件となることを指摘する。

また、村木(2006)に示された時間性が同時で、接続関係が逆接となる例文については、3.2.4で詳細に分析する。これら先行研究をふまえ、次節ではアスペクト的特徴に基づくナガラの分類を行い、これを検証する。

## 3.2 アスペクト的特徴に基づくナガラの分類

### 3.2.1 ナガラの二つの用法

従来の先行研究では、動詞+ナガラに二つの用法があることが指摘されてきた。この二つの用法について、森田(1980)、グループジャマシイ(1998)では「同時進行」と「逆接」と呼んでいる。一方、益岡・田窪(1989)、三宅(1999)、松田(2000)、川越(2002)、日本語記述文法研究会(2008)では、ナガラを「付帯状況」と「逆接」とに分類している。

付帯状況という用語についてここで確認しておきたい。付帯状況について益岡・田窪(1989)、日本語記述文法研究会(2008)は次のように定義している。

益岡・田窪(1989 p.175)

- ・付帯状況を表す副詞節は、ある動作と同時並行的に行われている付帯的な動作や状態を述べるのに使われる。

日本語記述文法研究会(2008 p.248)

- ・主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況を表す。

村木(2006)が指摘しているように、「同時進行」と「逆接」という分類では、時間性と接続関係の対立になり、これでは対立軸がずれてしまう。主節と従属節の「同時性」は、非逆接ナガラ文の特徴の一つであるが、時間性のみならず焦点を当てるのではなく、主節との意味関係という観点から、本研究ではナガラの用法を以下のような「付帯状況」と「逆接」の二つに分類するという立場をとる。

(12) 付帯状況

- a. ラジオを聞きながら勉強します。
- b. 先生の話聞きながらノートをとる。

(13) 逆接

- a. 悪いことだと知りながら、つい、うそをついてしまった。
- b. 「必ず来る」と、昨日あんなに固く約束しながら、彼は来なかった。

一方、次のような、従来、逆接か付帯状況か区別がつかないとされる文もある。

(14) 古い伝統を守りながら新風を吹き込んだ。

(14)のように、これまで逆接とも同時進行ともとれるとされてきた文も、ナガラ節のアスペクトを明らかにすることで逆接か同時進行かを、構文的に区別することができると思われる。

### 3.2.2 従属節のアスペクト的特徴

ここで、従属節のアスペクトについて考えておきたい。アスペクト研究は従来、主に、主節動詞を対象に行なわれ、複文ではトキ(二)、マデ(二)、アイダ(二)などが研究されてきた<sup>7</sup>。また、動詞の接続形式も、スル形式、シテイル形式が中心で、連用形については、連用中止法や、テ形接続以外は、あまり広がりが見られない。そこで、本研究ではナガラ節のような、マス形<sup>8</sup>+表現形式によって構成される従属節のアスペクト的特徴に注目する。

三宅(1999)、益岡(2000)はナガラ節動詞の語彙的アスペクトから、ナガラの分析を行っている。三宅(1999)は、「[過程]<sup>9</sup>を持つ述語がナガラ節にある場合、付帯状況文として典型である」と述べた上で、ナガラ節の述語が[過程]を持たない動詞であっても、「反復」や「維持」といったアスペクト的特徴があれば、付帯状況文は成立すると述べている。また、益岡(2000)でも、付帯状況ナ

<sup>7</sup> 寺村(1984)、工藤(1995)で言及されている。

<sup>8</sup> 日本語教育では「食べます」の「食べ」、「書きます」の「書き」のような、マス形式に接続する動詞の語幹部分をマス形と呼んでいる。

<sup>9</sup> ここで言う[過程]は、森山(1988)の用語である。森山(1988)は「典型的な運動の局面」を[過程]と呼んだ。2.2.3で述べたように、[過程]を持つ動詞は「～時間」のような期間成分のほか、「～シツヅケル、～ハジメル」とも共起可能である。

ガラ節が動作だけでなく、変化結果の維持を表すことを指摘している。

本研究はこれらの先行研究をふまえ、また、三宅(1999)、益岡(2000)では論じられていない、逆接ナガラ節の aspekts 的特徴についても、分析を進める。

共通語の aspekts はスル(完成相)ーシテイル(継続相)で対立するが、ナガラ節の動詞はマス形で、シナガラは動作・変化結果の維持を表したり、パーフェクトを表わしたりする。シテイルはナガラ節ではシテイナガラとなり、動詞の種類に関係なく常にパーフェクトで逆接となる。つまり、ナガラ節の aspekts 対立は形態論的な対立ではないということになる。

また、aspekts は〈出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違〉を表す文法的カテゴリーであるが、談話の中では複数の出来事間の時間的関係を表すという機能を持っている。「出来事間の時間関係＝タクシス」はテンス同様、外的時間を表すが、テンスが過去と非過去で対立するのに対し、タクシスは継起的(先後関係)か同時かで対立する。「出来事間の時間関係」というカテゴリーの中では、完成相は継起性を、継続相は同時性を表すという点で対立している。ナガラのような複文は、一文の中に常に二つの出来事が現れることから、ナガラ節の aspekts はナガラ文に現れる二つの出来事のタクシスとも関連する。

ナガラには付帯状況と、逆接という二つの用法があり、ナガラ節の aspekts が「継続(動作・変化の進行)」、「変化結果の維持」「反復」を表す場合は付帯状況、「パーフェクト(動作パーフェクト、状態パーフェクト)」の場合は逆接になる。このことをまとめると表 3-1 のようになる。

表 3-1 ナガラ節の aspekts とタクシス

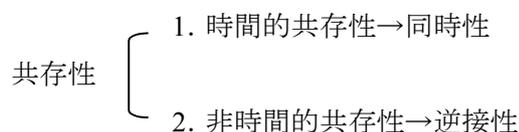
用法	ナガラ節の aspekts 的特徴	ナガラ節と主節の時間的前後関係 (タクシス)
付帯状況	継続(動作・変化の進行)、結果維持、反復	同時
逆接	パーフェクト(動作パーフェクト、状態パーフェクト)	先行:(ナガラ節の動作/変化の終了は主節の出来事に先行して起こる。)

逆接ナガラ節の aspekts 的特徴がパーフェクトであるという点について、もう少し補足しておきたい。パーフェクトとは「ある設定された時点においてそれよりも前に実現した運動が引き続き効力をもっていること(工藤 1995 p.99)」を表す aspekts である。本稿ではナガラ文における「設定された時間」は常に主節の時間であると考ええる。つまり、逆接ナガラ文においては、ナガラ節の出来事は常に主節に先行して起こると定義することができる。

以上、見てきたように、ナガラ節の aspekts 的特徴はナガラ節の意味、あるいは主節との時間的前後関係と関連していることから、従属節である連用形＋ナガラの aspekts について論じることは、ナガラ文の分析において有効な方法であると考ええる。

### 3.2.3 堀川(1994)との比較

堀川(1994)はナガラが根底的に持つ共通構造を「共存性」にあるとして、同時性と逆接性を次のように規定している。



このことを具体的に見てみよう。堀川(1994)は(15)のような文をあげている。

(15) チョコレートを食べナガラ、やせたいとこぼす。(p.36)

(15)について堀川(1994)は、「「チョコレートを食べる」ことを特定時に置いた解釈をすれば、同時性の解釈が生まれ、不特定時、一般的な解釈をすれば、逆接性の意味が出る。(p.36)」としている。特定時に「食べる」と「やせたいとこぼす」といった事態が共存していれば、非逆接の文として解釈されるが、運動、現象が現実時間に共存しているわけではなく抽象化されて共存していると解釈されれば、逆接の文となるのである。これを、ナガラ節のアスペクトという観点からみてみよう。

まず、(15)を付帯状況(堀川では同時進行)と解釈する場合、「食べナガラ」のアスペクト的意味は継続となり、「食べる」という動作が進行していることを表す。また、主節とナガラ節のタクシスは同時である。一方、(15)を逆接と解釈する場合、「食べナガラ」のアスペクト的意味はパーフェクトとなり、従属節の「食べる」という動作は、主節の事態が成立する時点では、すでに終了していることになる。堀川(1994)の論と、本章で述べたアスペクト的観点からの考察をまとめると次のようになる。

表 3-2 ナガラ節のアスペクト的特徴

	堀川(1994)	本稿が主張する ナガラ節のアスペクト的特徴
付帯状況のナガラ	・同時性＝ (主節と従属節の)運動・現象が 現実時間に共存している。	・動作継続・結果維持＝ 主節と従属節のタクシスは同時
逆接のナガラ	・(主節と従属節の)運動・現象が 抽象化されて共存している。	・パーフェクト＝ 従属節は主節に先行して終了し、主節 の成立時にその効力が残っている。

堀川(1994)はさらに、(16) (17)について以下のように述べている。

堀川(1994 p.37)

(16) 太郎は走りながらジュースを飲んだ。(同時性)

(17) 太郎は 30 キロも走りながら汗ひとつかいていない。(逆接性)

(中略)「走る」は通常の意味では時間的に幅のある動きを表す動作動詞であり、未完了の事態を表す。これに対し(17)のように「30 キロ」という変化量を規定する形式がついた場合には終結点が明示され、全体としてのひとまとまり性・完結性が出る。(中略)

時間的共存性が言えるためには、前件に時間的に幅のある未完了の動きが来た上で、後件の事態がその時間的な幅の中に入ることが必要である。一方、非時間的共存性としての逆接が出るためには、終結点のある既定の事態が存在した上で、別の事態が並立する事を表現することが必要である。非時間的並立をなすためには、時間的従属関係を持つてはいけないのである。

堀川(1994)が(16)「走りナガラ」の特徴としてあげている「時間的に幅のある動きを表す」「未完了の事態」は、「継続」のもつアスペクト的特徴である。また、(17)で用いられている「30 キロ」という限界点の設定は、「走る」という非限界動詞に限界性を与えている。堀川(1994)が指摘する逆接ナガラ節と付帯状況ナガラの特徴は、ナガラ節のアスペクト的特徴を捉えていると考えられる。しかし、堀川(1994)は逆接となる(17)の「走りナガラ」をパーフェクトとは考えていない。堀川(1994)は、パーフェクトの特徴は「ナガラの逆接性にふさわしい特徴である」と述べ、(15)'のようなテイル形式+ナガラをパーフェクトと呼んでいる。

(15)' チョコレートを食べていナガラ、やせたいとこぼす。(p.38)

本研究では、(15)'のようなテイル形式+ナガラだけでなく、「走りナガラ」のようなマス形+ナガラもパーフェクトを表すと主張する点で、堀川(1994)と異なる。また、本研究は、ナガラ節のアスペクト的特徴に着目することで、ナガラ節に用いられる動詞の種類や、主節との時間的先後関係といた、ナガラの使用条件をより具体的に示すことができると考える。

### 3.2.4 構文的逆接と文脈的逆接

前節では、ナガラ節のアスペクト的意味に基づいてナガラの用法を付帯状況・逆接に分類したが、このことで、従来、逆接か付帯状況か区別できないとされてきた(18)のような文についても明確に区別することができる。

(18) 「まんじゅうこわい」と言いナガラ、ぱくぱく食べている。

(18)は、「まんじゅうがこわい」と言う動作を続けている状態で、ぱくぱく食べている」という事

態を表す場合、付帯状況文であるが、主節と従属節が矛盾した事態を表しているため、逆接ナガラ文と区別できないといわれてきた。しかし、この場合、ナガラ節のアスペクト的意味は継続であり、主節とナガラ節のタクシスは「同時」である。また、主節との関係も、「主節と同時並行的に行われている付帯的な動作や状態」であるため、これを付帯状況の用法と捉えることに矛盾はない。

一方、過去のある時点で「まんじゅうがこわい」と言い、今「ぱくぱく食べている」のように、運動が抽象化されて共存している事態を表す場合、これは逆接ナガラ文となる。

(18)の二通りの解釈をまとめると、次のようになる。

	表されている事態	ナガラ節のアスペクトとタクシス
付帯状況 ナガラ	「まんじゅうがこわい」と言う動作を続けている状態で、ぱくぱく食べている	アスペクト:継続(動作の継続) タクシス:主節と同時
逆接ナガラ	過去のある時点で「まんじゅうがこわい」と言い、今「ぱくぱく食べている」	アスペクト:パーフェクト タクシス:主節に先行

ここで留意すべき点は、(18)は付帯状況と解釈した場合も「まんじゅうがこわい」と言っているノニ／クセニぱくぱく食べた」と、逆接の接続表現を使って書き換えることができるという点である。しかし、これは付帯状況ナガラが成立する際に必ず表れる、構文的意味ではない。(18)の付帯状況としての解釈は、付帯状況ナガラ文の「主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況」を表すという条件を満たしており、「逆接」という意味は、同時に起こった事態が、たまたま矛盾するものであったため出現したものである。

一方、(19)のように、ナガラ節がパーフェクトというアスペクト的特徴をもつと、「多くの小説を書いたノニ」のように、主節との関係は必ず逆接となる。(19)の「書きナガラ」はパーフェクトを表し、「小説を書いた→文壇で認められなかった」のように、従属節は主節に先行して終了している。

(19) 多くの小説を書きナガラ文壇で認められず、東京での創作生活は失敗に終わった。(新)

本研究では、「ナガラ節がパーフェクトであれば、必ず「逆接」の意味を帯びる」というように、構文的特徴と常に相関して現れる「逆接」を「構文的逆接」と呼び、(18)で付帯状況と解釈される事態を述べるときに偶然現れる逆接を、「文脈的逆接」と呼ぶことにする。「構文的逆接」は逆接ナガラ文に表れ、「文脈的逆接」は付帯状況ナガラ文に表れる。

以上をまとめると次のようになる。

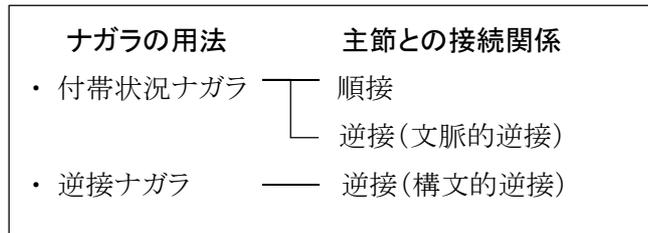


図 3-1 文脈的逆接と構文的逆接

「付帯状況」とは、「主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況」であり、主節との接続関係は規定されないため、「順接」の関係も、「逆接」の関係も現れうる。しかし、ナガラ節の Aspekte 的特徴がパーフェクトであり、ナガラ節は、主節に先行して終了するという構文的特徴を持つ場合、主節との接続関係は常に「逆接」となり、この場合の「逆接」は偶然もたらされるものではない。このような、構文的特徴によって必ず出現する逆接を構文的逆接と呼ぶこととする。

### 3.2.5 付帯状況ナガラと逆接ナガラの構文的な違い

付帯状況ナガラと逆接ナガラの違いは意味的なものではなく、文の構造的なものによるとする主張に、佐藤(1997)(1998)がある。佐藤(1997)は付帯状況ナガラは動詞句内に生起するが、逆接ナガラは動詞句内にはないと主張している。

佐藤(1997)ではまず、Koizumi(1993)で示された、とりたてて詞「サエ」を使った焦点化テストを行い、付帯状況ナガラが動詞句内に生起することを確認している。「サエ」を使った焦点化テストとは、「動詞に付置されたサエは、VP と VP に支配される要素を焦点化できるという性質を利用し、問題にスル要素が VP 内に存在しているかどうかを確かめるため(佐藤 1997 p.64)」のテストである。

Koizumi(1993)は(20)のような文をあげて、焦点化について説明している。

(20) Kiyomi-ga<sub>[xp]</sub>[<sub>vp</sub> ringo-o tabe]-sae] si-ta] (キヨミがりんごを食べサエした)

Koizumi(1993)は(20)でサエが焦点化できるのは「りんご」「食べる」「りんごを食べる」であるとする。この焦点化される語句にサエを直接接続させたものを(21) a、b、c に記す。

- (21) a. キヨミは [りんご]サエ食べた。  
 b. キヨミはりんごを [食べ] サエした。  
 c. キヨミは [りんごを食べ] サエした。

Koizumi(1993)はさらに、サエで焦点化した場合、付帯状況ナガラは(22)のように動詞句(VP)

に生起すると指摘している。

(22) [TV-o mi -nagara]benkyoosi-sae sita. (TV を見ながら勉強しさえした)

(Koizumi 1993 p.412)

(22)でサエが焦点化できるのは「TVを見ながら」と「勉強する」である。焦点化された語句にサエを接続させた文を(23)に示す。「TV を見ながら」を焦点化する場合は、サエではなくデサエを使用した。

(23) a. [TV を見ながら]でサエ勉強した。

b. TV を見ながら[勉強]サエした。

サエと同じく、否定するものを焦点化するとりたて詞「ハ」でも、同様の現象が見られる。(24)ハが焦点化できるのは「TVを見ながら」と「勉強する」である。

(24) Kiyomi-wa [TV-o mi -nagara]benkyoo-wa sinai. (Koizumi 1993 p.414)

a. [TV を見ながら]ハ勉強しない。

b. TV を見ながら[勉強]ハしない。

佐藤(1997)は、このテストを逆接ナガラについても行っている。

(25) 太朗が父が病気でありナガラ学校に来さえした。(佐藤 1997 p.65)

(25)でサエが焦点化しているのは「学校に来る」だけで、「父が病気でありながら」は焦点化されない。

(26) a. \*[父が病気でありながら]でサエ学校に来た。

b. 父が病気でありながら[学校に来]サエした。

これらのテストを「チョコレートを食べナガラやせたいとこぼす」の文にも行ってみよう。

(27) チョコレートを食べナガラやせたいとこぼす。(付帯状況)

:「食べナガラ」は動作進行を表す。ナガラ節と主節は同時に起こっている。

a. [チョコレートを食べながら]でサエ、やせたいとこぼす。

b. チョコレートを食べながら[やせたいとこぼし]サエする。

(28) チョコレートを食べながらやせたいとこぼす。(逆接)

:「食べながら」はパーフェクトを表す。ナガラ節は主節に先行して終了している。

- a.\* [チョコレートを食べながら]でサエ、やせたいとこぼす。
- b. チョコレートを食べながら[やせたいとこぼし]サエする。

(27)を付帯状況ナガラで、ナガラ節のアスペクト的意味は動作の継続であると設定すると、「チョコレートを食べながら」「やせたいとこぼす」はサエで焦点化されるが、(28)のように逆接ナガラで、ナガラ節はパーフェクトであると設定すると、「チョコレートを食べながら」はサエで焦点化されない。このことから、(27)は付帯状況ナガラの構文的特徴を持つが、文脈的に逆接の意味を帯びていると判断される

また、主節に否定表現がある(19)で、否定を焦点化するハを付加しても、やはり、逆接ナガラは焦点化されない。

(19) 多くの小説を書きナガラ文壇で認められず、東京での創作生活は失敗に終わった。

(新)

- a. \*[多くの小説を書きナガラ]ハ、文壇で認められず
- b. 多くの小説を書きナガラ[文壇で]ハ、認められず
- c. 多くの小説を書きナガラ文壇で[認められ]ハ、せず

以上、付帯状況ナガラと逆接ナガラの違いは意味的なものではなく、文の構造的なものであることを見た。

3.2.4 では、ナガラ文に見られる「逆接」には、付帯状況ナガラ文に現れる「文脈的逆接」と、ナガラ節がパーフェクトというアスペクト的特徴をもち、ナガラ節の運動が主節に先行して終了する場合に必ず現れる「構文的逆接」とがあることを指摘した。

ナガラ節が継続というアスペクト的特徴を持つ場合、主節との時間関係は「同時」であり、同時におこる二つの出来事のうち、従属節であるナガラ節の運動は主節の運動に付随して成立する。この場合、ナガラ節と主節の接続関係は、「順接」の場合もあれば、「逆接」の場合もある。どちらの接続関係となるかは、構文的に決まっておらず、文脈に依存している。付帯状況ナガラ文に現れる逆接を「文脈的逆接」とするのはこのためである。一方、ナガラ節がパーフェクトである場合、ナガラ節は主節に先行し、主節との接続関係は常に「逆接」となる。このような逆接は「構文的逆接」となる。

また、3.2.5 では付帯状況ナガラは取立て詞「サエ」や「ハ」によって焦点化されるが、逆接ナガラは焦点化されないという現象から、両者は異なる構造を持つことを確認した。取立て詞「サエ」や「ハ」によって焦点化される付帯状況ナガラは動詞句内に生起するが、逆接ナガラはこれとは異なる

る構造を持つ。

これらの事柄は、ナガラ用法が明確に2分されることを表しており、それは、ナガラ節のアスペクト的特徴によって区別される。このように、ナガラ文においてはナガラ節のアスペクト的特徴がナガラを表す意味、用法と相関していることがわかる。これをふまえ、次節以降、3.3節では付帯状況ナガラについて、3.4節では逆接ナガラについて、さらに詳細な分析を試みる。

### 3.3 付帯状況ナガラ節のアスペクト的特徴

3.3節では、付帯状況ナガラ節のアスペクト的特徴について述べ、次に付帯状況ナガラ用法についてまとめる。また、付帯状況ナガラは「動的場面に接続する」といった性格を明らかにする。

付帯状況ナガラ節は「動作の継続」、「変化結果の維持」というアスペクト的特徴を持つ。次の(29)(30)のナガラ節は付帯状況を表すが、ナガラ節のアスペクト的特徴が、「動作の継続」か、「変化結果の維持」かは動詞の語彙的アスペクトによって異なる。

(29) 僕はTVを睨みながら、しばらくその何かについて考えてみた。

[主体動作動詞]〈動作の継続〉(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』)

(30) 僕はポケットの中で十字架を握りながら、きっぱりと言った。

[主体変化動詞]〈変化結果の維持〉(浅田次郎『鉄道員』)

(29)のナガラ節は動作の継続で、「睨む」動作と「考える」動作は同時に行なわれている。(30)のナガラ節は変化結果の維持で、「握りはじめー握り終わる」という変化は終了しているが、その変化結果の状態は維持されており、その状態の中、「言う」という動作が行われている。(30)の主節とナガラ節の時間的關係は「同時」である。

「動作継続」も「維持」も、動詞が本来語彙的に、そのようなアスペクト的特徴を持っているかどうかで、出現が制限される。(29)の「睨む」は主体動作動詞(非限界動詞)で、「睨み始めるー睨んでいるー睨み終わる」のように、運動が「開始ー継続ー終了」といったプロセスを有しているが、(30)の「握る」は主体変化動詞(限界動詞)で、「握り始めるー握り終わるー握り続ける」のように、「開始ー終了ー維持」という形で運動が展開する。このため、「睨む」には「維持」の局面は表れず、「握る」には特殊な文脈がない限り<sup>10</sup>「動作継続」の局面が表れない。したがって、付帯状況ナガラ節では、「睨みナガラ」は動作継続を表し、「握りナガラ」は維持を表す。ナガラ節のアスペクト的意味が、動作の継続か、変化結果の維持かは動詞の語彙的アスペクトによって異なるというのは、このような理由による。

ところが、語彙的に継続の局面を表せないタイプの動詞でも、付帯状況ナガラ節を構成する場合がある。「電話を切る」、「接触する」は、継続の局面を捉えにくいタイプの動詞であるが、三宅

<sup>10</sup> 「ゆっくりと時間をかけて、指を1本1本動かして握る」のような文脈。

(1999)で示された(31)a、bは付帯状況を表す。

(31)a. 電話を切りながら、ため息を一つついた。(p.81)

b. ガードレールに接触しながら、こわごわ車を運転した。(p.80)

(31)aは、本来ならきわめて短い時間に完結する動作をスローモーションのように引き伸ばして動作継続の部分を取りだしている。(31)bは「接触する」という動きが何度もくりかえされている。反復は寺村(1984)が「点であるが、連続したものとして、線として解釈される」(p.130)と述べているように一続きの運動であると解釈され、ナガラ節では、その運動の継続に相当する局面を表していると考えられる。

語彙的に継続の局面を持たない動詞が付帯状況のナガラ節を成立させるためには、(31)aのように「時間を引き伸ばす」、または(31)bのように「くりかえす」といった文脈を与える必要がある。これらに共通するものは「時間的な幅」である。

庵他(2000)は、ナガラ節は「時間的な幅のある動作であることが必要」だと述べている。三宅(1999)も「ナガラ節は、その節中に生起する述語が、主語の述語より時間幅のある[過程]を持つと解釈される場合に、付帯状況文として成立する」(p.80)と述べている。運動の継続局面は[過程]をあらわし、時間的な幅が必要であるという特徴は、継続性をもつ特徴と共通している。また、森山(1988)が結果の維持を、持続的な動きの中で「動きの結果の保存が主体的に行われ、過程と結果持続の中間的なもの」と規定しているように、維持もまた、時間的な幅が必要だという特徴を持ち合わせている。

「動作の継続」「維持」の局面を表すには、「時間的な幅」という条件が必要で、動詞が「動作の継続」「維持」という意味を語彙的に備えている場合、ナガラ節は自動的に「時間的な幅」を持つが、そうでない場合は「引き伸ばし」や「繰り返し」といった文脈を用いて「時間的な幅」を形成し、条件を整える必要が出てくる。言い換えれば、通常の場合では表されない「動作の継続」や「維持」の局面は、「引き伸ばし」や「繰り返し」といった文脈によって引き出すことが可能となるのである。

このように、動詞の通常の場合では表されない局面が、「文脈」によって引き出される例は、ナガラ節だけに現れる特殊な現象ではなく、同様の現象が「かけ」名詞構文にも見られる。村尾(2013)では「かけ」名詞構文について「派生接辞「-かけ」が付いて、ある行為、出来事が途中のままで完了していない様子を表す表現である」(村尾 2013 p.126)と述べ、(32)のような例をあげている。

(32)a. 飲みかけのビール

b. 読みかけの本

c. \*駅に着きかけの電車

また、この「かけ」名詞構文を構成する動詞について、次のように述べている。

村尾(2013 p.128)

アспектに関わるドメインのうち「完結」や「過程」を喚起し、完結の有無について[+完結]、時間幅の有無について[+時間幅(一瞬時性)]を指定できる動詞が「かけ」名詞構文に生起できると言える。ただし、達成動詞<sup>11</sup>のような特定の動詞タイプが潜在的にこの条件をより満たしやすいというだけで、絶対的なものではない。

村尾(2013)、高見・久野(2006)は、運動継続の局面を持たない「着く」のような動詞は、(32)cでは非文であるが、(33)のような文脈を設定すれば、「かけ」名詞構文を構成することができるとしている。

(33) まだ完全には停車していない、駅に着きかけの電車のドアが急に開いて、乗客が数十人プラットフォームになだれ落ちた。(高見・久野 2006 p.86)

(33)について村尾(2013)は、「電車が駅に着く瞬間をあたかも超高速カメラで静止した状態のように主観的にとらえ、それを1枚の静止画像として心的に思い描くという見方が反映されている(p.134)」と分析している。静止画像として捉えるという心的操作によって、「まだ完全には停車していない、駅に着きかけの電車＝到着が完結する前の過程」を取り出すことが可能になるのである。

以上、付帯状況ナガラ節は、「動作の継続」「変化結果の維持」というアспект的特徴を持つことを確認した。また、ナガラ節では通常の場合では表されない「動作継続」や「維持」の局面も、文脈によって引き出すことが可能であること、このような現象はナガラ節に限ったものではなく、他の表現形式においても観察されることを見た。「電話を切りナガラため息をつく」や「駅に着きかけの電車」のように、本来 [過程]を持たない動詞であっても、スローモーションの映像や、超高速カメラで撮った静止画のようにとらえるという心的操作によって、時間幅を持つものとしてとらえられるのである。

### 3.3.1 限界動詞+ナガラのアспект

付帯状況のナガラ節は継続、あるいは維持といったアспект的特徴を持つ。2.1.2 で見たように継続には「動作の継続」と「結果継続」の2種類がある。「動作の継続」を表すのは非限界動詞である。限界動詞の中で主体動作・客体変化動詞のテイル形式は能動態では動作の継続を表し、

---

<sup>11</sup> 村尾(2013)では「ビールを飲む」「本を読む」のように、目的語によって動作の終結点が示される主体動作動詞(非限界動詞)も[+完結]とみなされ、達成動詞(限界動詞)に含まれるものとして扱われている。

受動態では変化結果の継続を表す<sup>12</sup>。付帯状況ナガラ節は「主節と同じ主体の状態・状況を表す」ことから、能動態であると判断されるため、主体動作・客体変化動詞＋ナガラは「動作の継続」を表す。また、同じ限界動詞である主体変化動詞は、テイル形式で変化結果の継続を表すが、ナガラ節では「変化結果の維持」を表すものがある。ナガラ節のAspectが「変化結果の維持」であれば、付帯状況のナガラとして成立するが、(34)のように「変化結果の継続」を表す場合、付帯状況ナガラ文としては不適格となる。

(34) \*彼は車を3台持ちながら、場面に応じて使い分けている。

(34)は「車を3台所有していて、場面に応じて使い分けている」という文意では不自然な文となる。「持つ」は「持ったー持っている」のように「変化ー変化結果の継続」という形で運動が展開する。このような「結果の継続<sup>13</sup>」を表す動詞は、ナガラに接続して付帯状況の文を作ることはできない。以上をまとめると、表3-3のようになる。

表 3-3 動詞の種類と、付帯状況ナガラ節のAspect的特徴

		ナガラ節のAspect的特徴	付帯状況ナガラ
非限界動詞		動作の継続	○
限界動詞	主体動作・客体変化動詞	動作の継続(能動態)	○
	主体変化動詞	変化結果の継続	×
		変化結果の維持	○
		動作の継続	○

限界動詞の「結果の継続」は付帯状況のナガラ節では不自然だが、限界動詞が「変化結果の維持」を語彙的Aspectとして持つ場合、付帯状況ナガラ節は「維持」の局面を表し、自然な文となる。では、「変化結果の継続」と「変化結果の維持」には、どのような違いがあるのだろうか。「変化結果の維持」とは「持続的な動きの中で「動きの結果の保存が主体的に行われ、過程と結果持続の中間的なもの(森山 1988)」であった。次の(35)b、c ナガラ節は変化結果の維持を表している。

(35)a. 父は重い荷物をかつぎながら「よっころしよ」と声を出した。

b. 父は重い荷物をかつぎながら歩いていった。

c. その犬は大きな肉をくわえながら橋を渡って行きました。

<sup>12</sup> 工藤(1995 p.72)

<sup>13</sup> 「変化結果の継続」は状態パーフェクトととしてとらえる。ナガラ節が状態パーフェクトの場合、付帯状況ではなく、逆接となる。

「かつぐ」のような動詞は動作継続も結果維持も表すことができる。(35) a の「かつぎナガラ」は継続を表し、「かつぐ」という動作と「声を出す」という動作が同時に行われているが、(35) b は「かついだ後、その状態で歩いていった」という意味である。(35) c は「肉をくわえた後、橋を渡った」ことを表しており、どちらも「かついだ結果」、「くわえた結果」を主体的に保存している。

ナガラ節で変化結果の維持を表すことのできる動詞、できない動詞を分けると次のようになる。

変化結果の維持を表すことのできる動詞:つかむ、握る、ぶらさがる…

変化結果の維持を表すことのできない動詞:はおる、ぬぐ、たちどまる…

行く、来る、帰る…(移動動詞)

維持を表すことができない動詞は「結果の継続」が単なる状態にすぎず、そこに「結果を維持する」という主体性が感じられない。一方、維持の局面では、結果状態の保持のために、意識的に力を加え続けなければならない。

Comrie (1976)はこのような、エネルギーの供給を伴う運動について次のように述べている。

Comrie (1976)

states are static, i.e. continue as before unless changed, whereas events and processes are dynamic, i.e. require a continual input of energy if they are not to come to an end;

(p.13)

状態は静的で、変化がおこるまでは、それ以前と同じように続く。それに対して、出来事と過程は動的で、終わりに至らない限り、エネルギーの継続的な供給を求める。

To remain in a state requires no effort, whereas to remain in a dynamic situation does require effort, whether from inside or from outside. (p.49)

ある状態にとどまるために、effort は求められないが、動的な場面にとどまろうとすれば、内部から、あるいは外部からの effort が必要である。

Comrie (1976) は動的な出来事が「続く」場合にも、動的な場面に「とどまる」ためにも、何らかの effort が必要であると述べている。そして、動的な場面に必要な要素として、「エネルギーの供給」、あるいは「effort」をあげている。

Talmy(2000)も、力動性:force dynamics<sup>14</sup>という概念を用いて、同様の指摘をしている。力動性とは、「主動体(本来的に、動きや静止の傾向を持つもの)と対抗体(主動体に対して、それに対抗する力を加えるもの)の間の相互作用」(影山 2004 p.27)である。両者の関係は、動こうとするものを押しとどめたり、とどまろうとするものを動かしたりする際の、力の向かう方向として表される。(36) a、b を Talmy(2000)では図 3-2 のように表している。(p.415、416)

(36) a. The ball kept rolling because of the wind blowing on it.

(ボールは吹きつける風によって転がり続けた)

b. The log kept lying on the incline because of the ridge there.

(丸太はそこに畝があるため、斜面に横たわり続けた)

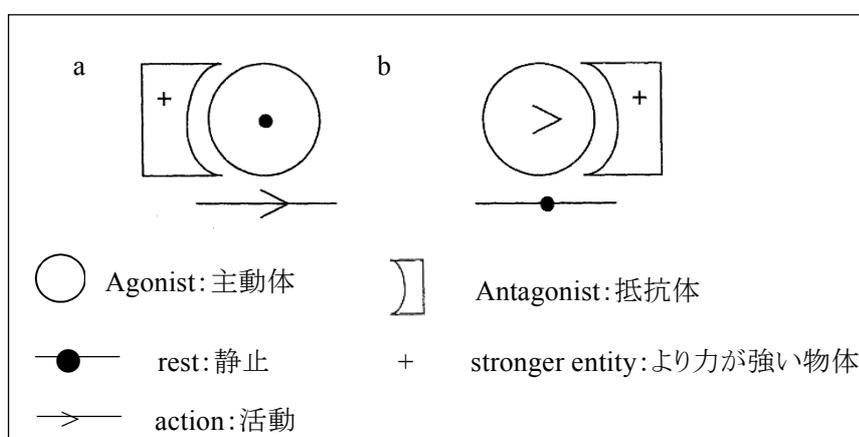


図 3-2 力動性: Talmy(2000)

力動性を説明するために松本(2003 p60)は次のような例をあげている。(36) a' は(36) a と同じ図で書き表され、(36) b' は(36) b と同じ図で書き表すことができる。

<sup>14</sup> Talmy(2000 p.409)

A semantic category that has previously been neglected in linguistic study is that of force dynamics-how entities interact with respect to force. Included here is the exertion of force, resistance to such a force, the over-coming of such a resistance, blockage of the expression of force, removal of such blockage, and the like.

従来、言語研究で取り扱われなかったカテゴリーに、力動性がある。力動性とは存在と力の相互作用についてのカテゴリーである。ここに含まれるのは、力の行使、そのような力に対する抵抗、そのような抵抗に打ち勝つこと、力が表されることに対する妨害、そのような妨害の除去などである。(筆者訳)

(36) a'. The fan kept the air moving. (扇風機が空気を動かし続けた)

b'. The brace kept the logs from rolling down.

(留め金が丸太が転がり落ちるのを防いでいた)

(36) a、a'のように動き続ける場面同様、一見、静止しているように見える(36) b、b'においても、「転がり落ちるのを防ぐ」という力が加えられている。「防ぐ」という動詞に目に見える動きは確認されないが、(36) b「留め金」の作用として比喩的な「力」を表しており、このような場面も「動的である」と捉えることができる。

また、同じ動詞であっても、多義性を持つ動詞の場合、表す場面が動的であったり、静的であったりする。(34)でみたような「持つ」という動詞には、「保有する・所有する」という意味と「(物体を手で)持つ」という意味がある。「保有している・所有している」という状態を継続させる場合、通常の間脈では、エネルギーの注入は必要ないが、「(物体を手で)持っている」という状態を継続する場合、エネルギーの注入が必要となる。このような場面は森山(1988)のいう、維持の場面に相当する。動的な「持つ」と、静的な「持つ」の例を次に見てみよう。

(37) a. 彼は車を3台持っている。(所有)

→ \*彼は車を3台持ちながら、場面に応じて使い分けている。

b. 彼は携帯電話を片手に持っている。(持つ)

→ 彼は携帯電話を片手に持ちながら、ドアを開けた。

(37) aは所有の「持つ」で、状態を継続するためにエネルギーの注入は必要ないが、(37) bは物を実際に「持つ」という動作で、持ち続けるためには、エネルギーの注入が必要であり、これは維持の局面とみなすことができる。(37) aのような所有の「持つ」はナガラ節で付帯状況を表さないが、(37) bのような「持つ」はナガラ節で付帯状況を表す。

以上のことから、「変化結果の継続」と「変化結果の維持」の違いとして、「変化結果の継続」は静的場面であるが、「変化結果の維持」は動的場面であるといえることができる。

このほかに、限界動詞の中でも(38)のような再帰動詞はナガラ節で動作の継続を表す。

(38) ネクタイをしめながら会社に行った。

(38)は家でネクタイをしめる時間がなく「ネクタイをしめる」という動作をしながら会社に向かったというような意味になる。この場合、「会社に行った」は会社に着いた時点を目指すのではなく、「家を出る」など、「会社に着くための動作」を指している。「ネクタイをしめて、その状態で会社に行った」という意味では非文となる。

「座る」もテイル形式で結果の継続を表すが、ナガラ節では動作継続の局面が捉えられる。

- (39) a. ??太郎は座りナガラ弘と話していた。(仁田 1995)<sup>15</sup>  
b. 近くの席にすわりながら「よくくるのか」と聞いた。(新)

しかし、仁田(1995)は(39) a に「ユツタリ」のような副詞を付加し、変化後の姿勢維持に焦点が当てられるような文脈を与えれば、(40)のように、容認度は上がると指摘している。

- (40) 太郎はユツタリ座りナガラ弘と話していた。(仁田 1995 p.96)

森山(1988)は、維持の局面を表す動詞では、(41)のような「タママ・ナガラ」交替が可能であることを指摘し、「座る」も維持の局面をもつ動詞であると述べている。

- (41) a. もたれながら話をする＝もたれたまま話をする (森山(1988)p156)  
b. 座りながら話をする＝座ったまま話をする

他方、「座る」「立つ」について、日本語教育教師用の参考図書では「「座りながら話す」「立ちながらしゃべる」は不自然で、それぞれ「座って話す」「立ってしゃべる」が正しい」(岡本他 2009 p145)と解説されている。

このように、「座る」「立つ」+ナガラ(付帯状況)については、文法研究者、日本語教師の間でアスペクトをどう捉えるかという点で、見解が分かれている。「座る」「立つ」+ナガラ(付帯状況)に見られるこのような相違に関しては、方言の影響という観点から、第4章で詳細に分析する。

以上、本節では、「限界動詞+ナガラ」において、ナガラ節のアスペクトが維持で、変化結果を主体的に保持するといった動的な場面では、ナガラは付帯状況を表すが、変化結果の継続という、エネルギーの注入が行われない、非動的場面では付帯状況ナガラは成立しないことを見た。付帯状況ナガラを表す「動作継続」はエネルギーの注入を伴う、動的場面であることから、付帯状況ナガラは動的場面をあらわすという特徴を持っているといえよう。

### 3.3.2 主節のアスペクト

工藤(1983)は一定の構文的条件のもとでは、通常はテイル形式で変化結果の継続を表す変化動詞であっても、「うごきの継続を表す」と指摘している。その構文的条件の一つに「変化をもたらす動きを規定する修飾語がついている場合」があり、ナガラ文の主節に変化動詞がテイル形式で現れると、それは動きの継続を表すと指摘している。(42)の「来ていた」は「来た後」ではなく、「来る途中:走っている」を表している。

---

<sup>15</sup> 文法性の判断は仁田(1995)による。

(42) 木村がバーバリーのレインコートの裾をひらひらさせながら小走りに来ていた。

(工藤 p.67)

工藤(1983)は変化動詞のテイル形式について指摘しているが、ナガラ文では、主節の動詞がスル形式であっても、時間的に幅のある動作の継続を表すことができる。これは動作動詞の場合顕著に現れる。

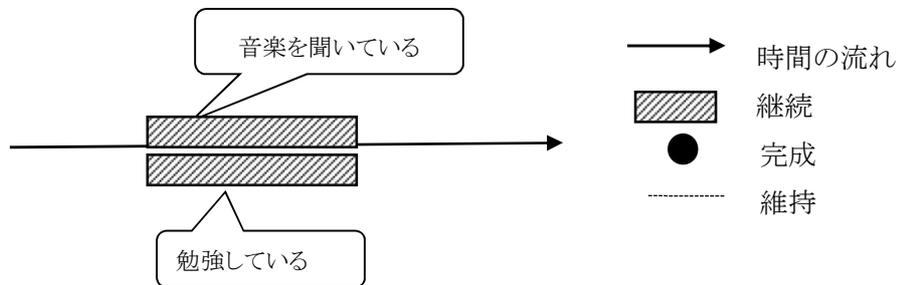
(43)a. 音楽を聞きナガラ勉強する。

b. 音楽を聞きナガラ勉強している。

(43)a、b のナガラ節は動作の継続、主節も動作の継続を表す。(43)a の主節動詞「勉強する」はスル形式であるが、「音楽を聞く」という動作が継続している時に、「勉強する」という動作がある幅をもった時間続けられていることを表している。運動が時間的幅を持つのは継続の局面の特徴である。このため、(43)a の「勉強する」は継続を表すと判断され、(43)a、b はアスペクティックには同じ意味を表すことになる。(43)a、b の事態を図示すると次のようになる。

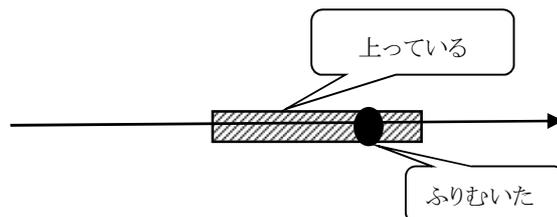
(43)a. 音楽を聞きナガラ勉強する。

b. 音楽を聞きナガラ勉強している。



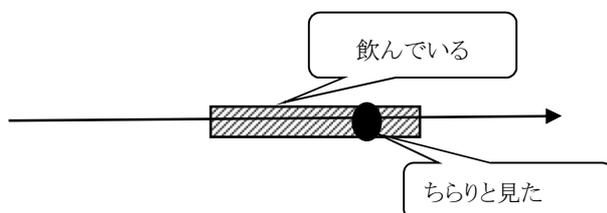
このことから、付帯状況ナガラは主節動詞がスル形であっても、時間的に幅のある運動を表すという文脈をもたらすことがわかる。しかし、主節動詞が語彙的に運動の幅を持たない(44)「ふりむく」のような動詞の場合、継続を表すことはない。

(44) 相原は、ホームの階段を上りナガラ、ふりむいた。(B)



また(45)のように主節の動詞に、動作が瞬間的に終わる文脈を付加すると、動作動詞でも継続を表すことはない。

(45) ビールを飲みながら、ちらりとこちらを見た。



「ちらりと」が修飾する動詞は常に完成性のみを表す。(45)では、主節動詞「見る」はアスペクトを限定する機能をもつ副詞、「ちらりと」があるため、幅を持たない、完成性というアスペクト的特徴を表している。付帯状況ナガラは、主節動詞が語彙的に継続の局面を持つ場合は、継続の局面を引き出す文脈をもたらすが、この文脈の設定は主節の表しうるアスペクト的特徴と関連しており、(44)のように主節の構成要素が完成性のみを規定する場合、継続の局面を引き出す文脈は表れない。

アスペクトを限定する語句には、「ちらりと」のように、直接動詞に作用する副詞もあれば、付帯状況ナガラのように、継続を文脈的に誘うタイプのものもある。このようなさまざまな語句と共起することで、動詞が語彙的に持っているアスペクト的特徴が引き出されると考えられる。

### 3.3.3 付帯状況ナガラの用法

#### 3.3.3.1 並立用法と付帯用法

付帯状況ナガラの用法について松田(2000)は「並立用法」と「付帯用法」をあげている。さらに「並立用法」の下位分類として「並列用法」と「対比用法」を、「付帯用法」の下位分類として、「方法(限定)」、「様態(限定)」、「様態(付加)」、「並列(付加)」をあげている。まず、付帯用法と並立用法について考察する。

松田(2000 p.38)

- 並立用法
- ├── 並列用法: 習慣的行為の共存。
  - └── 対比用法: 矛盾、対立する二つの行為が共存。

並立用法の並列用法と対比用法は(46)(47)のような文である。

[並列用法]

- (46) a. 彼は英語学を研究しナガラ、心理学も勉強している。(松田 2000 p.38)  
 b. 多くの留学生は夜のアルバイトをしナガラ、大学に通っている。(松田 2000 p.38)

[対比用法]

(47) a. 「素敵なお洋服ですね」と上司の服装をほめながら、心の中ではばかりにする。

(松田 2000 p.38)

b. チョコレートを食ベながらやせたいとこぼす。(堀川 1994 p.38)

並列用法について松田(2000)は、「習慣的行為」の共存を意味し、「研究する、つきあう、働く、通う」など、多回性を語彙的意味自身の中に備えている動詞によって構成されていると規定している。「並立用法」の中の「並列用法」については、松田(2000)が指摘するとおり、この用法に使われる動詞は長期活動を語彙的意味としてもっている動詞に限られ、このため、「時間的抽象化(松田 2000)」によって行為が共存している。(46) b 「多くの留学生は夜のアルバイトをしながら、大学に通っている」のように、「アルバイトをする」場所と、「通う」場所は異なるが、「時」は一致しているという理由で、付帯状況文として成り立っている。

一方、対比用法は、矛盾、対立する二つの行為(特に心理動詞)が同一の主語内に共存しており、逆接性が強く感じられると規定されている。堀川(1994)で指摘された、(47) b もこの用法に当たるとされている。松田(2000)は(47) a, b について、「逆接性だけでなく、付帯性も保たれている」としているが、これは、表 3-4 の松田(2000)の分析とは、次のように矛盾する。

並立用法は逆接の用法と付帯用法の間に位置するものとし、その関係を松田(2000 p.38)は表 3-4 のように示している。

表 3-4 付帯・並立・逆接の各用法の異なり(松田 2000)

	付帯用法	並立用法	逆接用法
主節と従属節の 入れ替え	不可能／可能	可能	不可能
時、場所の一致	時、場所の一致	場所の不一致が可能	時、場所の不一致が可能
サエによる焦点化	可能	可能	不可能
主語の異同	同一主語	同一主語	非同一主語も可能

本研究では(47) b については、ナガラ節のアスペクト的特徴によって逆接か、付帯状況か分類され、構文的特徴も異なると、すでに指摘した。(47) a, b が「構文的逆接」であれば、サエによる焦点化<sup>16</sup>は不可能であるが、表 3-4 では並立用法(対比用法の上位分類)はサエによる焦点化は可能とされている。このことから、松田(2000)では、(47) a, b は「文脈的逆接」と捉えられていることがわかる。「文脈的逆接」の読みでは、(47) b は「時、場所の一致」が可能となり、「付帯用法」と区別する必要がなくなる。

<sup>16</sup> サエによる焦点化については 4.2.4 で述べた。

このことから、本研究では、松田(2000)で「対比用法」とされているものを「付帯用法」に組み入れ、並立用法は並列用法のみとすることが妥当だと考える。

### 3.3.3.2 付帯用法の下位分類

松田(2000)は付帯用法をさらに、表 3-5 のように下位分類し、それぞれに当てはまる文例を(48)のように示している。

松田(2000 p.41)

- (48) a. 氷水につけナガラ冷ます。(方法:限定)  
 b. 彼女は目をきらきらさせナガラ僕を見つめた。(様態:限定)  
 c. 祖父は笑いナガラ死んだ。(様態:付加)  
 d. タバコをくわえナガラ歩いた。(様態:付加)  
 e. 太郎はバナナを食べナガラ、来年のことを考えた。(並列:付加)

表 3-5 付帯用法の下位分類と状態修飾性(松田 2000 p.41:部分)

用法	方法(限定)	様態(限定)	様態(付加)	並列(付加)
主節・従属節の 逆転の可否	不可		可(入れ替えると内 容が異なる場合が多 い)一部不可	可(どちらが主節に選ば れるかは文脈や話者の 判断による)
従属節の動作 と主節の動作 は包含関係が	成立		非成立	
モによる逆接化	不可(部分的に可)	不可	可	
特徴	従属節の動作が主 節の動作の方法、 手段、プロセスを限 定的に表す。	従属節の動作が 主節の動作の具 体的動作内容を 表す。	従属節の動作が主 節の動作の様態を 付加的に表す。	一回的な動作の並列的 組み合わせ。

松田(2000)で示された、この分類では、(48)a、b のようにナガラ節と主節の行為が、「全く一致しないまでも、包含関係にある(p.42)」という特徴をもつものは「限定」、(48)c、d のようにナガラ節と主節の行為は直接関係ない場合は「付加」と名づけられている。「様態(限定)的付帯用法」と「様態(付加)的付帯用法」は、同じ「様態」の用法であるが、以下のように異なる。

松田(2000 p.42)

[様態(限定)的付帯用法]

主節の動作に具備されている内容をより詳しく、限定的に示す動作がナガラ節に来る。

[様態(付加)的付帯用法]

(主節とナガラ節の行為には)直接の相関関係はなく、動作主体が主節の行為を行う際、同時に行っていたという理由で結び付けられている。従って、この用法におけるナガラ節内の行為は主節の動作に具備されない。

表 3-5 で、主節とナガラ節の入れかえについて、様態(付加)的付帯用法では、「可能だが、入れ替えると内容が異なる場合が多い」、並列(付加)的付帯用法では、「どちらが主節に選ばれるかは文脈や話者の判断による」とされている。確かに(48)eのような並列(付加)的付帯用法では、(48)e'のように入れ換えることが可能だが、(48)d'のような様態(付加)的付帯用法の場合、入れかえた文ともとの文では、表す事態が大きく異なってしまう。

(48)d' 歩きナガラ、タバコをくわえた。

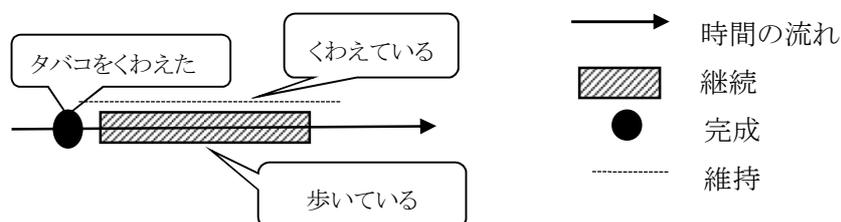
(48)e' 太郎は来年のことを考えナガラ、バナナを食べた。

(48)e'で表されている事態は、もとの文と同じであるため、主節とナガラ節が置き換えられると判断されるが、(48)d'のように、もとの文と表される事態が異なる場合、置き換えが可能であるとはいえない。(48)d と(48)d'、(48)e と(48)e'の、ナガラ節のアスペクト的特徴について確認してみよう。

(48)d. タバコをくわえナガラ歩いた。

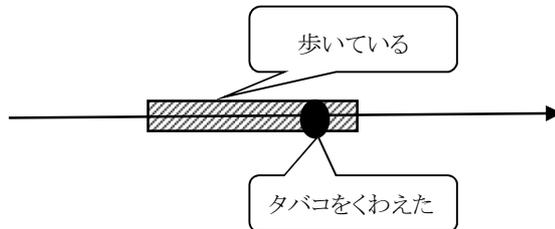
ナガラ節:変化結果の維持 主節:動作の継続<sup>17</sup>

(タバコをくわえた状態で歩いている)

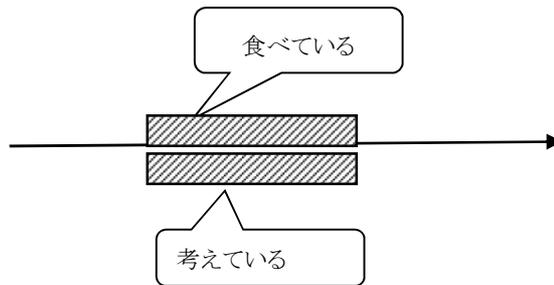


<sup>17</sup> 主節動詞のアスペクトの意味については3.3.2で述べた。

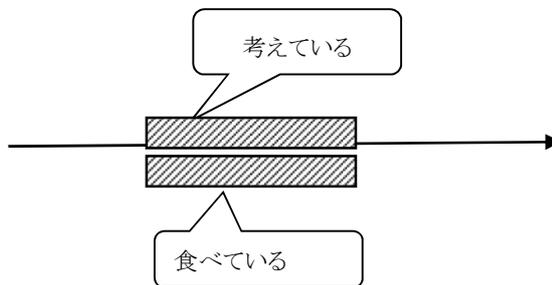
- (48)d' 歩きながら、タバコをくわえた。  
 ナガラ節:動作の継続 主節:完成  
 (歩くという運動が継続中に、タバコをくわえるという動作が始まり、終わった)



- (48)e 太郎はバナナを食べながら、来年のことを考えた。  
 ナガラ節:動作の継続 主節:動作の継続  
 (バナナを食べるという動作の継続中に、考えるという動作も継続している)



- (48)e' 太郎は来年のことを考えながら、バナナを食べた。  
 ナガラ節:動作の継続 主節:動作の継続  
 (考えるという動作の継続中に、バナナを食べるという動作も継続している)



(48)eとe'が、主節とナガラ節を入れ替えても同じアスペクト的特徴を表しているのに対し、(48)dとd'は主節とナガラ節を入れ替えることで、それぞれが持つアスペクト的特徴が変化している。

主節とナガラ節を入れ替えることで、表す事態が異なるのは、このためである。

主節とナガラ節の入れ替えが可能になるためには、入れ替えの前後でそれぞれのアスペクト的特徴が変化しないという条件が求められることがわかったが、このような条件を満たすのは、付帯状況ナガラ節のアスペクト的特徴である、「非限界動詞の動作継続」「反復」「変化結果の維持」が、主節に表れる場合である。このうち、非限界動詞の主体動作動詞は主節で、スル形式でもシテイル形式でも継続を表すが、変化結果の維持を表す動詞(主体変化動詞の一部)は、主節では、テイル形式でのみ維持を表す。

(49)に文例を示す。

- (49) a. 音楽を聞きナガラ、勉強する／勉強している。(主節:非限界動詞の継続)
- b. 問題を解きナガラ、何度も時計を見た。(主節:反復)
- c. 決勝戦を見ナガラ、十字架を握りしめている。(主節:変化結果の維持)

(49) a, b, c はいずれも、主節と従属節を入れかえても、表す事態は同じである。松田(2000)は様態(付加的付帯用法として、(50)のような文例も挙げている。

松田(2000 p.42, 43)

- (50) a. 「すごくいい匂いするわねえ」と彼女が鼻をくくんさせナガラ言った。
- b. 父が煙草をくゆらせナガラ部屋に入ってきた。

(50) a は「言いナガラ鼻をくくんさせた」と、主節とナガラ節を入れかえることができるが、(50) b は「部屋に入ってきたナガラ煙草をくゆらせた」となり、入れかえることができない。「入る」は短い時間に完結する動作だが、スローモーションのように引き伸ばすという文脈を与えれば、動作継続の部分を取り出すことができる。(50) c は「入る」という動作を文脈によって引き伸ばした例である。

- (50) c. 先生はゆっくりと教室に入りナガラ、威圧的に生徒のほうを見た。

(50) b で、主節とナガラ節の入れ替えができないのは、「ナガラ節の時間幅は主節より長い」という制限によるものである。三宅(1999)はナガラに限らず、タママ、テ節のアスペクトについて分析しており、主節と従属節が表す時間の幅の関係について次のように述べている。

三宅(1999 p.76)

これらの節<sup>18</sup>を持つ文が、付帯状況文として成立するためには、その節中の述語動詞が

---

<sup>18</sup> 下線部:「これらの節」とはナガラ、タママ、テ節をさす。

主節の述語動詞よりも時間幅のある、アスペクト的に持続的なものでなければならない、という一般化が得られた。この一般化は、付帯状況を表す構文について、ナガラ、タママ、テといった形式の違いを超えて成り立つものである。

三宅(1999)も言及するように、これは早瀬(1992)の、英語で付帯状況を表す「X-ing,Y」「Y,X-ing」の文では分詞構文 X の時間的幅の範囲内に Y が生起するという主張<sup>19</sup>と共通するものである。つまり、ナガラ節は、主節より時間的に長い幅をもったものでなければならず、(50)b の主節とナガラ節を入れ替えた「\*父が部屋に入ってきナガラ煙草をくゆらせた」は、これに反する。(50)b で、主節とナガラ節の入れ替えができないのは、このためである。

以上見たように、主節とナガラ節の入れ替えの可否には、「ナガラ節は主節より時間的に長い幅を持つ必要がある」、「付帯状況ナガラ節のアスペクト的特徴は、非限界動詞の継続、変化結果の維持、反復」という制約が作用している。

松田(2000)は、並列(付加)的付帯用法と様態(付加)的付帯用法を分ける目安の一つに、主節とナガラ節の入れかえの可否を問い、入れかえができる場合、主節とナガラ節の動きは並列的であり、入れかえができない場合、ナガラ節の情報の重要度は低いとしている。しかし、入れかえの可否は、意味的な関係以上に、アスペクト的要因が強く関わっていることがわかった。

これらのことから、松田(2000)で分類されている、並列(付加)的付帯用法と様態(付加)的付帯用法は別のものとして分ける必要はなく、一つの分類に属するものとして取り扱うことができる。

一方、様態(限定)的付帯用法は、これらと区別して考える必要がある。松田(2000)は様態(限定)的付帯用法では、従属節の動作と主節の動作は包含関係が成立すると規定している。様態(限定)的付帯用法の文例として、(51)が例として挙げられている。

- (51) a. 黒人兵は彼の前に立ちどまって息をつく僕を、どんよりした太い眼球をゆっくり動かしナガラ見あげた。(松田 2000 p.42)  
b. 川原で子供たちがおにごっこをしナガラ遊んでいるよ。(松田 2000 p.42)

(51) a「眼球を動かす」は「見上げる」という動作、(51) b「おにごっこをする」は「遊ぶ」という動作

---

<sup>19</sup> 早瀬(1992 p15,p.16)

a. Looking back, she threw a kiss to me.

b. \* Looking back, she went away.

c. Looking back many times, she went away.

Look back は瞬間的動作である。その時間内に a のように「投げキス」をすることは自然に想定できるが、b の「でてゆく」という動作はその時間幅におさまらず、不自然である。それに対して c の many time に示されるように、瞬間的動作を反復して幅を持たせてやれば容認できる。(中略)このように X の時間幅内に Y が生起することが分詞構文を容認するために必要である。

に「具備されている内容をより詳しく(松田 2000 p.42)」示していると考えられる。(51)bの「おにごっこをする」と「遊ぶ」については、「遊ぶ」は「おにごっこをする」の上位概念としてとらえることができる。「遊ぶ」が「類」であるとするれば「おにごっこをする」は「かくれんぼをする」「なわとびをする」などと同列で「種」を表す。このような特徴を持つ様態(限定)的付帯用法では、ナガラ節の主節に対する従属度は高い。

また、方法的付帯用法には(52)のような文があり、これも、主節動作とナガラ節動作は包含関係にあり、ナガラ節の主節に対する従属度は高いとされている。方法的付帯用法は、ナガラ節が主節の動作を行うための手段や方法をあらわしている<sup>20</sup>。

(52)a. パン生地を手のひらで転がしナガラ丸める。(松田 2000 p.41)

b. 銀行でお金を借りナガラ、なんとか生活した。(松田 2000 p.42)

(52)a では、主節の動作とナガラ節の動作が同じ時間、同じ場所で行われており、「転がす」は「丸める」に具備された動作と捉えられるのに対して、(52)b の「生活する」は長期活動動詞で、主節とナガラ節の長期間に設定された時間は同時であっても、場所の一致は必要ではない。これは表 3-4 に示された付帯用法の条件に合致しない。

松田(2000)は(52)b が「生活するために銀行でお金を借りる」と言いかえができるという、主節とナガラ節の意味関係を基準に分類しているが、「生活する」「通う」のような長期間にわたる、抽象化された活動を表す場合と、同一の時間・場所で行われる具体的な動作は区別して扱うべきだと考える。従って、本稿では、(52)b は、3.3.3.1 で取り扱った並立用法に相当すると考える。

以上、本節では松田(2000)の論を検証し、問題点を指摘すると共に、本稿の立場を述べた。

### 3.3.4 付帯状況ナガラの用法まとめ

本節では、付帯状況ナガラの用法についてまとめる。松田(2000)で分類された項目と比較し、本稿の考え方を図 3-3 に示す。

本稿では、付帯状況ナガラの用法として、まず①短時間の動作と②長期的活動に分ける。次に①短時間の動作を「方法・手段」「様態(限定)」「様態(付加)」に、②長期的活動を「並列」「方法・手段・様態」に分ける。

---

<sup>20</sup> 手段や方法を表す接続形式には「テ」があり、(52)は「手のひらで転がしテ」のように、テに置き換えることができる。ナガラとテの置き換えについては、5章で考察する。

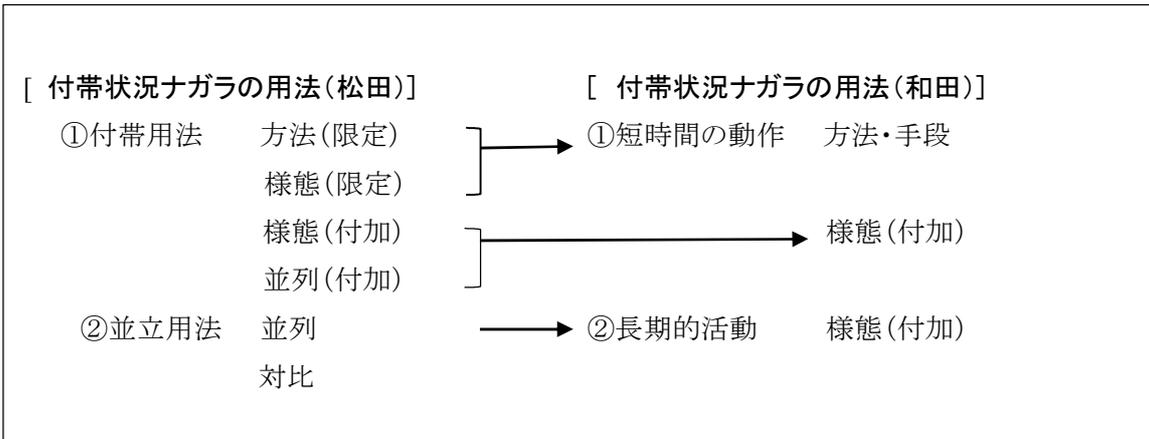


図 3-3 付帯状況ナガラの用法

まず、①短時間の動作にあてはまる文を(53)に示す。

(53)①短時間の動作

- a. 番人がこの男の背中を烈しく押しながら牢屋につれていくのが見えた。(新)  
(方法・手段)
- b. わきをしめて、手もとに引きよせナガラ使うと安定する。(B)(方法・手段)
- c. 早くすぎたかなと思いナガラ、商品は展示してあったのでそれをみていると、  
(B)(様態)
- d. おきくは「はい」といってうつむきナガラ、坐り直し、帯に描かれた牡丹の花を見て  
いると、(B)(様態)
- e. じつをいうと、ドイツ人も歩きナガラ食べるのが大好きで、それを「お行儀が悪い」  
という考えはありません。(B)(様態)

(53)a の「押す」は「連れていく」、(53)b「引きよせる」は「使う」の動作の一部をより詳細に述べた部分で、ナガラ節は主節の事態が成立するための「方法・手段」を表している。①短時間の動作の「方法・手段」には松田(2000)の「様態(限定)」も含まれており、この用法では、ナガラ節は主節に対して従属度が高い。

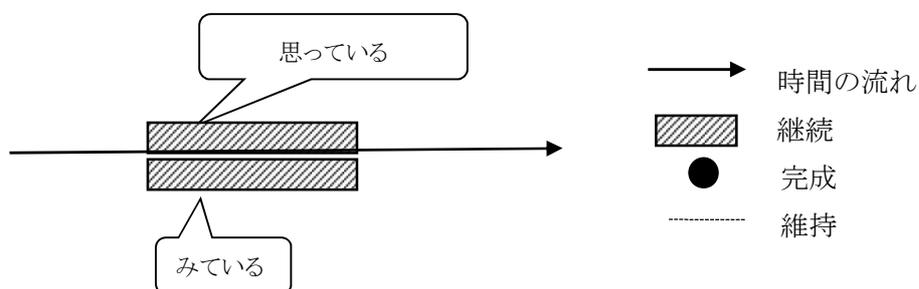
(53)c「思う」は「見る」という動作に含まれないため、①短時間の動作「様態」に分類される。ここで言う「様態」は松田(2000)の「様態(付加)」にあたる。(53)c、d のように心理や感情、姿勢を表すものは、ナガラ節では、主節に付随する動作としての意味合いが強くなり、この意味で従属度が高いとみなす。ナガラ節の従属度が高い場合、ナガラ節と主節のアスペクトが同じでも、入れかえると異なる表現意図が表出するなど、元の文と全く同じ内容とは言えなくなる。

本稿では、主節とナガラ節を入れても同じ事態を表す場合、入れかえが可能であると判断する。

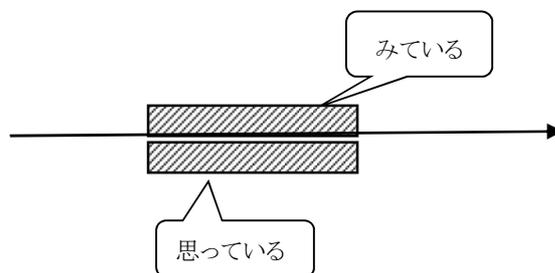
しかし、入れかえが可能な場合であっても、もとの文と、入れかえた文では、主節のほうがより中心的意味を担うため、ニュアンスや、話者の時発話意図は当然変わってくる。

①短時間の動作で、ナガラ節が様態(付加)を表す場合、従属度が低ければ、主節とナガラ節の入れかえが可能になる。しかし、従属度が低くても、ナガラ節がアスペクト的に「維持」という特徴をもつ場合、主節との入れ替えには制限がかかる。(53)cの「思う」は非限界動詞であるためナガラ節では継続を表し、(53)c'のように入れかえることができるが、(53)dの「うつむく」は限界動詞で、ナガラ節では維持を表す。このため、主節と入れかえた場合、(53)d'のようにもとの文と表す事態が異なってくる。

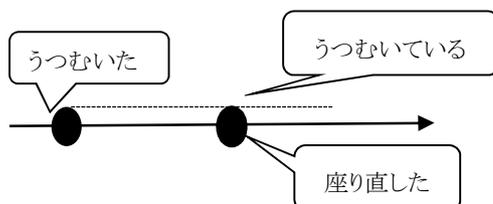
(53)c. 早くすぎたかなと思いながら、商品は展示してあったのでそれをみていると、



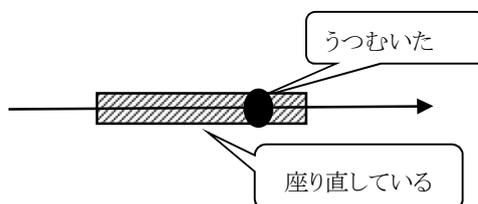
(53)c' 商品は展示してあったのでそれをみながら、早くすぎたかなと思っていると、



(53)d. おきくは「はい」といってうつむきながら、坐り直し、帯に描かれた牡丹の花を見て  
いると、(B) (様態)



(53)d' おきくは「はい」といって坐り直しナガラ、うつむいて、帯に描かれた牡丹の花を見ていると、



(53)d'では、「坐り直す」という動作をしている中に「うつむく」という動作がおこる。このような入れかえの可否は、「心理」や「姿勢」といった動詞の意味に由来するものではなく、それらの動詞が語彙的に持つアスペクト的特徴によるものである。

(53)e「歩く」「食べる」のような主体動作動詞の組み合わせは、並立性が高い。当然、主節の優位性は保たれるが、主節とナガラ節を入れかえても大きな意味の変化はない。

次に②長期的活動を表す文を(54)に示す。

#### (54)②長期的活動一様態

- a. 子供を育てながら働くあなたへ。
- b. 渥美さんは、ガンと共生しナガラ、俳句を楽しんでいたことになる。(B)
- c. ウーマン・リブの風に励まされナガラ、身近な性差別と向き合う日々。(B)
- d. 経済拡大をつづけナガラ、どうやって赤字をなくすことができるのか。(B)
- e. 銀行でお金を借りナガラ、なんとか生活した。(松田 2000)

(54)a~eは、主節とナガラ節の意味的な関係から「方法・手段」を表す場合もあるが、基本的には、ナガラ節は、主節の事態が成立しているときに同時並行的に成立している、同じ主体の状態・状況を表す。この用法では①短時間の動作と異なり、「時、場所の一致」がなくとも、共存しているとみなされる。(54)a、bは入れ替えが可能で並立的だが、(54)c、dではナガラ節が主節の状況を設定している。(54)eは手段とも、状況とも解釈できる。

以上、付帯状況ナガラの用法について述べたが、まとめると表3-6のようになる。

表 3-6 付帯状況ナガラの用法

用法	①短時間の動作		②長期的活動
	方法・手段	様態(付加)	様態
特徴	ナガラ節は主節の事態が成立するための方法・手段を表す。ナガラ節は主節の動作の一部を、より詳しく述べる。	ナガラ節は、主節の事態が成立しているときに同時並行的に成立している、同じ主体の状態・状況を表す。	同じ主体の長期間にわたる状況、活動を表し、ナガラ節は、主節の事態が成立しているときに同時並行的に成立している、同じ主体の状態・状況を表す。
従属度	高い	低い～高い	低い～高い
包含関係	○	—	—
時・場所の一致	○	○	—

### 3.4 逆接のナガラ

#### 3.4.1 逆接ナガラ節のアスペクト的特徴

3.2 ではナガラ節のアスペクト的特徴によってナガラを、付帯状況ナガラと、逆接ナガラに分類した。付帯状況ナガラのナガラ節は「動作継続」または「維持」というアスペクト的特徴を持ち、逆接ナガラのナガラ節のアスペクト的特徴は「パーフェクト」である。ナガラ節がパーフェクトを表すための条件は次の2点である。

ナガラ節がパーフェクトを表すための条件

- ①ナガラ節の事態が主節に先行して起こり、終了する。
- ②完了したナガラ節の動作の効力が主節の動作がおこる時点まで続いている。

パーフェクトには状態パーフェクトと、動作パーフェクトがあり、次のような特徴を持つ。

- ① 状態パーフェクト : 限界動詞の変化結果継続
- ② 動作パーフェクト : 動詞の種類は問わない

テイル形式の状態パーフェクトと動作パーフェクトについては2.1.2.2で述べたが、ナガラ節でパーフェクトを表す動詞にはテイル形式とは異なる制約がある。テイル形式では限界動詞+テイルの形で状態パーフェクトを表したが、ナガラ節で状態パーフェクトとなる限界動詞の典型は、「知る」

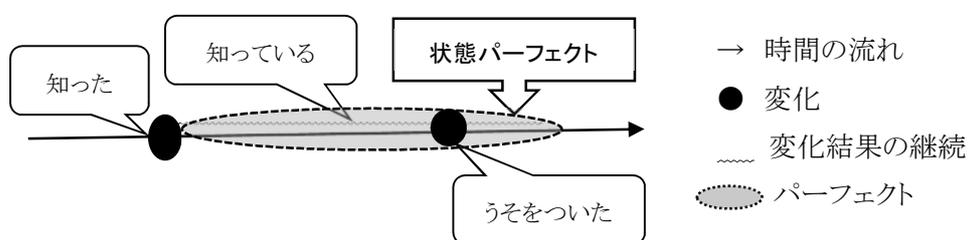
「気づく」など、動作を伴わず、瞬間的に動詞の意味が実現する知覚動詞である。

(55)a. 悪いこととは知りながら、ついうそをついてしまった。

b. 山田さんは私がつうそをついていることに気づきながら黙ってしてくれた。

ナガラ節で状態パーフェクトを表すこれらの動詞は「動作の継続」を表すことのできない動詞である。このためこれらの動詞にナガラが接続すると、必ず逆接の意味になる。(55)a のナガラ節の事態は次のように表すことができる。

(55)a. 悪いこととは知りながら、ついうそをついてしまった。



限界動詞でも、変化結果の維持を語彙的に持つ動詞の場合、ナガラ節では状態パーフェクトではなく、変化結果維持を表すため、逆接にならないことは 3.3.1 で述べた。

「落ちる」のようにテイル形式で結果継続を表し、時間的には短い時間で運動が完了する動詞は、文脈的条件によって、ナガラ節で「動作の進行」を表したり、「動作パーフェクト」を表したりする。

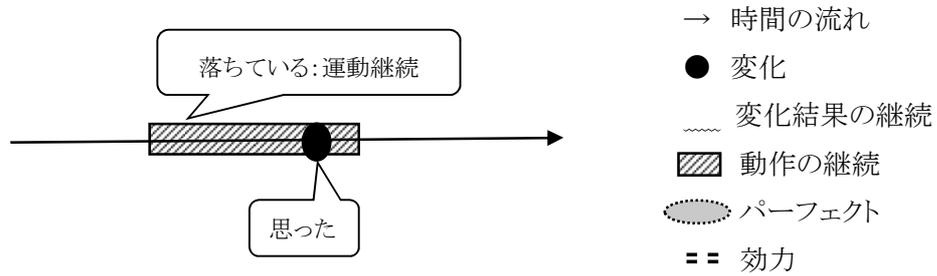
(56)a. 太郎は崖から落ちナガラ「死ぬかもしれない」と思った。

b. ビルの3階から落ちナガラ平気な顔をしている。

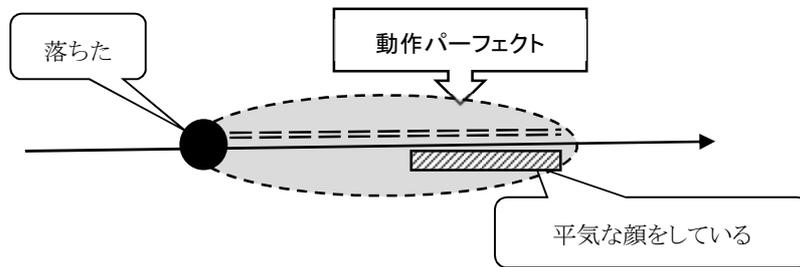
(56)a は「落ちる」運動が継続している時に「思った」という意味で、付帯状況を表している。「落ちる」という時間は非常に短い時間であるが、それをスローモーションのように引き伸ばし、時間に幅を持たせるという操作の結果、ナガラ節は「動作の継続」を表し、ナガラ節は付帯状況の意味を持つ。(55)a、b が常に逆接になる理由は、「知る」や「気づく」という運動は、どのような文脈を与えても引き伸ばすことができないからである。

(56)b は「落ちた後の状態」だけではなく「落ちた」という運動も視野に入れているため、動作パーフェクトとなる。(56)a、b の事態は次のように図示することができる。

(56)a. 太郎は崖から落ちながら「死ぬかもしれない」と思った。



(56)b. ビルの3階から落ちながら平気な顔をしている。



(56)b は「落ちた」という運動が完了し、その効力が続いている中、「平気な顔をしている」という、予想とは異なる事態がおこっていることを表している。

限界動詞・非限界動詞の区別なく、動作パーフェクトは現れる。動作パーフェクトを表すのは次のような文である。

(57) 「一緒に行こうよ」と言いながら当日彼は現れなかった。

(58) 20分以上も電話で話しながら、間違い電話だと気づかなかった。

(57) (58) のナガラ節は主節に先行しておこったひとまとまりの動作で、その作用は主節がおこる時点まで続いているという、逆接ナガラの特徴を持っている。(57) (58) が次のように言い換えることができることから、ナガラ節は主節に先行して完了していることがわかる。

(57)' 「一緒に行こうよ」と言ッタノニ当日彼は現れなかった。

(58)' 20分以上も電話で話シタノニ、間違い電話だと気づかなかった。

また、ナガラ節がパーフェクトを表すか否かは、文脈によって決定されることが多い。

- (59) a. ヘッセ自身自殺未遂にまで追い込まれながら母の愛によってからくも立ちなおった。(新)
- b. 彼は徐々に追い込まれながら精神をおかされていった。

(59) a は「自殺未遂にまで」という終結点を示されることでひとまとまり性をもち、「その後」立ちなおったことを表す。これは動作パーフェクトで、逆接の文である。しかし、(59) b は「徐々に」という文脈から「追い込まれる過程」を表しており、「追い込まれること」と「精神をおかされる」ことが同時におこったという意味になる。この場合、ナガラ節は継続を表すため、(59) b は付帯状況を表す文となる。

このようにナガラ節のパーフェクトが文脈に左右される理由として「パーフェクトは固有の形式を持っていない」ことがあげられる。ナガラ節だけでなくテイル形式においてもパーフェクトは文脈に左右される。このことは 2.1.2.2 で指摘したように、パーフェクトがアスペクトの基本的な意味ではなく派生的な意味にとどまる理由でもあった。

ところで、逆接ナガラには「知りナガラ」のような、「スル形式＋ナガラ」のほかに、「知っていナガラ」のような「テイル形＋ナガラ」がある。「テイル形＋ナガラ」の場合、動詞の種類に関係なく、ナガラ節のアスペクトはパーフェクトで、常に逆接となる。

- (60) a. チョコレートを食べていナガラ、やせたいとこぼす。(堀川 1994 p.38)
- b. 20 分以上も電話で話していナガラ、間違い電話に気づかなかった。
- c. \*ネクタイをしめていナガラ、会社に行った。
- d. \*TV を見ていナガラ勉強する。
- e. \*太郎は崖から落ちていナガラ「死ぬかもしれない」と思った。

(60) a について、「チョコレートを食べナガラ」には、付帯状況の読みと逆接の読みが想定されるが、「チョコレート食べていナガラ」には逆接の読みしかない。「食べる」同様、テイル形式で「動作継続」を表す非限界動詞の「話す、見る」も「テイル形＋ナガラ」は常に逆接を表す。一方、(60) c、d、e は非文法的な文となる。非文法的な文となる理由を、ナガラ節のアスペクト的特徴と、主節の接続関係の両面から見てみよう。

(60) c、d、e を「スル形式＋ナガラ」に置き換えてみると、「ネクタイをしめナガラ会社へ行く」「TV を見ナガラ勉強する」「崖から落ちナガラ「死ぬかもしれない」と思った」は付帯状況を表す。しかし、このような付帯状況の文脈にもかかわらず、(60) c、d、e が容認されないということは、「テイル形式＋ナガラ」は「動作進行」を表さず、したがって、付帯状況の用法もないということになる。

(60) c、d、e に付帯状況の用法がないということであれば、ナガラ節はパーフェクトとなり、主節との接続関係は逆接となるはずである。しかし、(60) c、d、e のナガラ節と主節は矛盾するものではないため、逆接の読みはできない。(60) c、d、e が非文法的な文となるのは、このためである。

「テイル形式＋ナガラ」のAspectについて見ると、いずれも、「ナガラ節が主節に先行して起こり、終了する」「完了したナガラ節の動作の効力が主節の動作がおこる時点まで続いている」というパーフェクトの条件を満たしており、逆接ナガラの用法に矛盾しない。

ナガラ節動詞の形態的特徴からナガラの用法を分類すると、次のようになる。

表 3-7 ナガラ節動詞の形態的特徴とナガラの用法

ナガラ節動詞の形態	ナガラの用法	ナガラ節のAspect的特徴
スル形式＋ナガラ	付帯状況	動作継続、変化結果の維持、反復
テイル形式＋ナガラ	逆接	パーフェクト

表 3-7 から、「スル形式＋ナガラ」はナガラ節のAspect的特徴によって付帯状況か逆接の用法が現れるが、「テイル形式＋ナガラ」には逆接の用法しかないことがわかる。形態と用法が 1 対 1 で対応している「テイル形式＋ナガラ」は、どのような文脈でもナガラ節はパーフェクトで、逆接の用法となるが、形式と用法が 1 対 1 で対応していない「スル形式＋ナガラ」は、文脈によってAspect的特徴をとらえ、用法を特定する必要がある。

### 3.4.2 逆接ナガラ文を構成する非限界動詞

2.2.2 で述べたように、本来限界性を持たない動詞が述語となる文に、付加詞をつけることで、動作の限界点を設定することを、三原 (2004) ではAspect限定と呼んでいる。(61)は非限界動詞が、限界性を持つ例である。

三原 (2004 p.27)

(61) a. 太郎は (20 分ほどで) 向こう岸まで泳いだ。

b. 太郎は (3 時間かけて) 故障車を修理工場まで運んだ。

非限界動詞は、ナガラ節で動作の継続を表し、付帯状況の文として成立するが、前節でも見たように、文脈によって限界性がもたらされ、ひとまとまり性を表すようになれば、逆接のナガラ文にもなる<sup>21</sup>。

(62) a. 太郎は昨日走りながら、ジュースを飲んだ。

a'. ???太郎は昨日走りながら、また今日も走っている。

<sup>21</sup> 3.2.3 で見たように、堀川 (1994) は、非限界動詞であっても終結点が明示されれば、全体としてのひとまとまり性・完結性が出ると指摘している。

- b. 太郎は昨日マラソン大会で 30 キロ走りながら、また今日も走っている。  
 b'??太郎は昨日マラソン大会で 30 キロ走りながら、ジュースを飲んだ。

非限界動詞「走る」は、(62) a ではナガラ節は継続を表し、(62) b ではパーフェクトを表す。(62) a'は「同時性」が確保されていないため付帯状況文としては不適合である。(62) a'を逆接としてとらえた場合も、「昨日走った」には限界点が設定されていないため、不自然な文となる。一方、(62) b は「30 キロ」という限界点が設定され、使用条件である、ナガラ節の先行性が保たれているため、逆接ナガラ文として成立する。

(62) b'は、30 キロという限界点が設定されているため、パーフェクトの読みが可能である。ナガラ節がパーフェクトだと、「30 キロ走った後ジュースを飲んだ」という事態をあらわすことになるが、(62) b'は主節とナガラ節が逆接関係にならないため、不自然な文となる。

ところで、(62) b'ではナガラ節を継続と捉え、付帯状況ナガラとしても読み取れる。しかし、この場合も「30 キロ走る」間ずっと、「ジュースを飲む」動作が続いたという意味になり、やや不自然である。これを解消するために(62) b''のように、主節に「時々」を入れると、付帯状況文として自然になり、ナガラ節は継続を表すことになる。

(62) b'' 太郎は太郎はマラソン大会で 30 キロ走りながら、時々ジュースを飲んだ。

非限界動詞が逆接ナガラ節を構成するには、「ナガラ節がパーフェクトである」という逆接ナガラ節の使用条件を満たす必要がある。限界動詞は語彙的に動詞が示す運動が終了する限界点を持つが、非限界動詞は限界点をもたないため、非限界動詞がパーフェクトをあらわすには、次のような条件が必要となる。

非限界動詞が逆接ナガラ節を構成するための条件

- ①ナガラ節動詞が、限界点を持ち、ひとまとまり性を有している。
- ②ナガラ節の事態が主節に先行しておこる。
- ③完了したナガラ節の動作の効力が主節の動作がおこる時点まで続いている。

非限界動詞＋ナガラが継続を表すか、パーフェクトを表すかは、上記の条件が満たされるか、否かによってきまる。この条件を満たせば、ナガラ節はパーフェクトとなり、主節ではナガラ節とは相反する事態が述べられる。

本節では、非限界動詞が逆接ナガラ文を構成する場合、どのような条件が必要であるか考察した。逆接ナガラ節のアスペクトはパーフェクトであり、動作パーフェクトは限界動詞・非限界動詞の区別なく表れることから、非限界動詞も、逆接ナガラ節を構成することが可能になるのである。

### 3.4.3 逆接ナガラ節の共通性

「ない+ナガラ」「アスペクト対立をもたない動詞+ナガラ」「名詞、形容詞+ナガラ」は常に逆接を表す。

- (63) a. つまり、信玄は、戦場が近江になるか、京都近くになるかわからないナガラ、来年五月、すなわち、天正元年(千五百七十三)五月に、信長との間に雌雄を決する戦いのあることを想定していたのである。(B)
- b. (公園は)都心にありナガラ、台風の目のように喧噪の中の忘れられた真空地帯であった。(B)
- c. カタログなどに美術史関係の文章を書くこともあれば、小さいナガラ企画展などをおこなうこともある。(B)

これらの共通点はどれも時間的限界性を持たないということである。スルーシテイル形式で、アスペクト対立を持たない動詞として、次のような動詞が金田一(1950)、奥田(1977)、工藤(1995)などによって指摘されている。

ある、いる、そびえる、異なる、あてはまる、似る、似合う…

これらの動詞はスルーシテイル形式でアスペクトの対立を持たないという点で名詞や形容詞の性質に近いといわれている。これらの動詞には運動の始まりと終わりの概念は含まれておらず、この意味で時間的限界を持たないと言うことができる。「ない」は運動が行われなことを表すため、ここにも時間的限界性はない。

次に、これらとナガラ節に現れるパーフェクトとの共通点について考える。パーフェクトに含まれる概念は「運動のひとまとまり性(=完結性)」と「効力の継続」である。「運動のひとまとまり性」には当然時間的限界が含まれているが「効力の継続」には時間的限界性はない。

また、2.1.2 で述べたように「完成相」には時間的限界性があるが、「継続相」には時間的限界性がない。したがって、付帯状況のナガラ節を表す「動作の継続」にも時間的限界性はなく、時間的限界性の有無は、逆接ナガラと付帯状況ナガラを区別する指標にはならない。

変化結果は「変化結果の継続」と「変化結果の維持」に分けられるが、3.3.1 で見たようにエネルギーの供給を伴わない「変化結果の継続」は付帯状況ナガラ要素となることができなかつた。エネルギーの供給の有無はその場面が動的であるか否かを決定する指標であったが、このことを手がかりに、ナガラ節の性質について表 3-8 のようにまとめる。

表 3-8 ナガラ節の性質

	付帯状況ナガラ	逆接ナガラ
アスペクト的特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動作の継続</li> <li>・変化結果の維持</li> <li>・反復</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パーフェクト</li> </ul>
ナガラ節の動詞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非限界動詞</li> <li>・変化結果の維持を語彙的に持つ動詞</li> <li>・反復:動詞に制限はない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動作パーフェクト:全ての動詞</li> <li>・状態パーフェクト:変化結果の維持を語彙的に持たない動詞</li> <li>・スルーシテイルの形式でアスペクト対立を持たない動詞</li> </ul>
エネルギーの供給	必要	不要
場面	動場面	非動場面

表 3-8 から、付帯状況ナガラ節が表す場面は、動場面であり、逆接ナガラ節が現す場面は動場面ではないということがわかる。

アスペクト対立をもたない動詞や名詞、形容詞が表す場面は動場面ではなく、ナガラが接続すれば必ず逆接の意味になる。このことから逆接ナガラ節の性質は「非動場面を表す」という点において共通しているといえよう。

### 3.5 第 3 章のまとめ

第 3 章ではまず、ナガラ節のアスペクト的特徴に基づき、ナガラ節の用法を「逆接」と「付帯状況」に分類した。「付帯状況」の用法では、ナガラ節のアスペクト的特徴は「継続(動作継続)」「変化結果の維持」で、主節との時間的關係は「同時」を表す。「逆接」の用法では、ナガラ節のアスペクトの意味はパーフェクトで、ナガラ節は主節に先行して動作・変化が終わり、その効力が主節時まで続いている。

ナガラ節のアスペクト的特徴はナガラ節を構成する動詞の語彙アスペクトによって異なる。「継続(動作継続)」を表す動詞は、非限界動詞、または、限界動詞で、スローモーションの画像として捉えるなどの、心的操作によって運動の局面を取り出すことのできる動詞である。「維持」を表す動詞は、限界動詞で、変化結果の維持というアスペクト的特徴を語彙的に持っている動詞である。「反復」はすべての動詞で、文脈の条件が整えば、表すことができる。「パーフェクト」には動作パーフェクトと、状態パーフェクトがあり、動作パーフェクトは全ての動詞で、文脈の条件が整えば、表すことができる。状態パーフェクトは、限界動詞で、変化結果の維持というアスペクト的特徴を語彙的に持っていない動詞によって表される。ナガラ節を構成する動詞と、アスペクト的特徴、用法についてまとめると次のようになる。

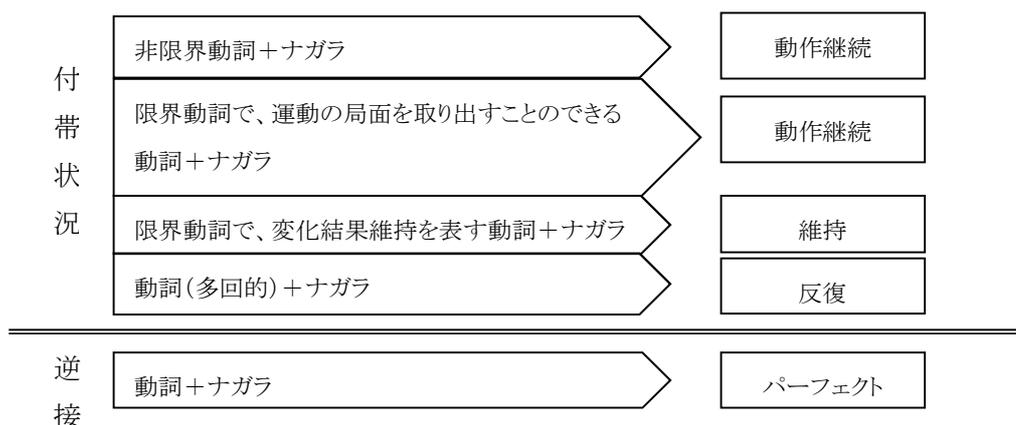


図 3-4 ナガラ節を構成する動詞とそのアスペクト的特徴

また、付帯状況のナガラ節はとりたて詞「サエ」や「ハ」によって焦点化され、動詞句内に生起するが、逆接ナガラ節は、動詞句内には生起しないという構文的特徴を持つことを見た。

「付帯状況」ナガラの中には、文脈によっては、主節との接続関係が逆接となるものもあるが、このような逆接は「文脈的逆接」とし、ナガラ節がパーフェクトであるというアスペクト的特徴をもつ「構文的逆接」のナガラと区別する。

「構文的逆接」と「文脈的逆接」の違いは、逆接ナガラと付帯状況ナガラの違いと一致する。(64)「チョコレートを食べながらやせたいとこぼす」のような、付帯状況にも、逆接にも解釈できる文でも、「構文的逆接」と「文脈的逆接」の表す事態は異なっており、これをまとめると、次のようになる。

(64) チョコレートを食べながらやせたいとこぼす。

[付帯状況ナガラ(文脈的逆接)]とする解釈

- ・ナガラ節のアスペクトは継続を表す。
- ・「チョコレートを食べる」という動作を行っている最中に、「やせたい」とこぼす。
- ・ナガラ節と主節の出来事は、同じ場所、同じ時間に成立する。

[逆接ナガラ(構文的逆接)]とする解釈

- ・ナガラ節のアスペクトはパーフェクトを表す。
- ・ある時、「チョコレートを食べる」という動作を行っていた者が、その動作が完了した後、その効力が残っていると思われる間に、「やせたい」とこぼした。
- ・ナガラ節の事態は、主節に先行して起こり、場所が同じでなくとも、文は成立する。

さらに、文脈的逆接(付帯状況)ナガラ節は、とりたて詞「サエ」や、否定表現で否定部分を焦点化する「ハ」によって焦点化され、動詞句内に生起するが、構文的逆接ナガラ節は焦点化されない。このことは、文脈的逆接(付帯状況)ナガラ文と、構文的逆接(逆接)ナガラ文は構造的に異なる。

ることを意味する。

本研究はナガラ用法を、主節と従属節の間で表される意味関係によって付帯状況と逆接とに分類するのではなく、異なる構文的特徴を持つものとして定義するものである。そして、この構文的特徴が、ナガラ節のアスペクト的特徴と相関していることを指摘した。

次に、3.3 では、付帯状況ナガラ節について述べた。付帯状況ナガラ節のアスペクト的特徴は、「動作の継続」か「変化結果の維持」である。ナガラ節のアスペクト的特徴は、動詞が語彙的にどのようなアスペクト的特徴を持っているかによって異なる。また、「継続」「維持」の局面を表すには「時間的な幅」が必要となる。

「変化結果の継続」を語彙的に持つ動詞にナガラが接続しても、付帯状況の文としては不適格であるが、「変化結果の維持」を語彙的に持つ動詞にナガラが接続すれば、付帯状況のナガラ文を作ることができる。変化結果を維持するためにはエネルギーの注入が必要で、このことから「変化結果の維持」は、動的な場面であるといえることができる。

さらに、付帯状況ナガラは「短時間の動作」か「長期的活動」かに分類することができ、「短時間の動作」には、ナガラ節動作と主節動作との関係性が強い「方法・手段」の用法と、関係性が弱い「様態」の用法があることを述べた。

一方、逆接ナガラの特徴は、次のようにまとめることができる。逆接ナガラ節のアスペクトは、スルーシテイル形式でアスペクト対立のある動詞の場合はパーフェクトを表す。ナガラ節のアスペクト的特徴がパーフェクトである場合、ナガラ節の事態は主節の事態に先行して実現する。限界動詞も非限界動詞も逆接ナガラ節を構成することができるが、非限界動詞がパーフェクトを表すには、限界点を付加し、ひとまとまりの動きとして捉えられるような文脈が必要となる。

また、逆接ナガラ節が表す場面に共通する特徴として、非動的場面であるということを指摘した。ナガラ節の動詞が「動作動詞であっても[動的]場面を表さない」のはアスペクトがパーフェクトである場合に限られる。パーフェクトはすでに完了した運動の効力が続いていることを表すため、その場面は非動的な場面であり、付帯状況ナガラとはこの点においても異なる。

## 第4章 西日本方言話者と東京方言話者の付帯状況ナガラ節のAspect認識

### 4.1 Aspect認識に見られる方言の影響

第3章では、ナガラ節のAspect的特徴とナガラ文の用法が相関していることを見た。Aspectをどのように捉えるかは、ナガラ節の意味の認識に大きく関わるものであるが、日本語母語話者は、ナガラ節のAspect的特徴を同じように捉えているのだろうか。そこで、第4章では日本語母語話者のAspect認識について論じる。

日本語のバリエーションには、性差、世代差、地域差などがあり、Aspectに関しては共通語と西日本方言とでAspect体系が異なることが知られている。しかし、このような異なるAspect体系をもつ西日本方言話者の共通語使用が、東京方言話者と違いがあるのかといった点については、まだ研究されていない。

個々の動詞が語彙的にもつAspect的特徴を、共起する副詞成分を含む動詞句のAspect的な意味として整理したものに森山(1988)の時定項分析がある。森山(1988)は、持続的な動きの局面を「動きが運動として展開している期間＝過程」と「動きの結果が持続的である場合＝結果持続」、「動きの結果の保存が主体的に行われ、過程と結果持続の中間的なもの＝維持」と定義し、〈維持〉の局面を持つ動詞では、次のような「タママ・ナガラ」交替が可能であると述べている。

- (1) もたれながら話をする＝もたれたまま話をする (森山 1988 p.156)

また畠山(2007)は維持の局面を持つ動詞を結果維持動詞と呼び、結果維持動詞を判別するテストの一つとして「タママ・ナガラ」テストを用いている<sup>22</sup>。(1)のような結果維持動詞では「タママ・ナガラ」を交替しても同じ事態を表すことができるが、次のような結果維持を表さない動詞では置き換えが不可能となる。

- (2) {走りナガラ／??走ったママ}食べる。(畠山 2007 p.75)  
(3) ドアが{開きナガラ／\*開いたママ}音をたてた。(畠山 2007 p.75)

---

<sup>22</sup> 畠山(2007)は結果維持動詞は「瞬間テスト」「いつテスト」「ナガラ・タママテスト」にパスするとしている。「瞬間テスト」とは「～した瞬間」が「～しハジメタ瞬間」と言い換えられるかどうかを判断するテストである。これにパスする動詞は動作動詞のように開始限界が語彙的に指定されており、かつ終了限界が無指定の、非限界動詞である。「いつテスト」とは「～したのはいつ？」という文に「発話時に～している」を前提とする読みがあるかどうかを判断するテストである。このテストにパスする動詞は限界動詞である。

ところで、森山(1988)は、「着る」を維持の局面を持つ動詞と捉え、「タママ・ナガラ」の置き換えが可能であるとしている。下の(4)で「着ナガラ＝着たママ」になるにはナガラ節が結果維持を表すことが要求される。

(4) 花子は服を{着ナガラ／着たママ}3時間接客した。

(4)で東京方言話者はタママ、ナガラを置き換えることができると判断するが、熊本・高知方言話者置き換えることができないと判断する。熊本・高知方言話者はこの「着ナガラ」を動作進行の局面と捉えるためである。

付帯状況ナガラ文に関しては、日本語学習者の作文添削などの際に日本語教師の間で文法性判断が分かれることがあるが、(5)のような日本語母語話者が使用する付帯状況のナガラ文に関しても同じように文法性判断がゆれる場合がある。

(5) 道ばたで座りながらお菓子を食べる。

(5)は「座って」といった意味合いで使われているようだが、この文を許容するか否かは日本語母語話者でも文法性判断が分かれる。森山(1988)では「タママ・ナガラ」が置き換え可能な動詞として「座る」をあげているが、日本語教育の教師用参考資料として書かれた岡本他(2009)では「座りながら話す」「立ちながらしゃべる」は不自然で、それぞれ「座って話す」「立ってしゃべる」が正しいと述べている(p.145)。

「座りナガラ」を結果継続の局面と認識できる人は(5)を正用と捉え、これを動作継続の局面と認識する人は非用と捉える。このことから、ナガラ節の動詞のアスペクトをどう捉えるかは、これらの文の文法性判断に大きく関わっていると考えられる。

第4章ではこのような文法性判断のゆれについて、方言によって異なるアスペクト認識が共通語形式であるナガラ節のアスペクト判定に影響を及ぼしているのではないかという仮説を立てる。仮説を検証する方法として、熊本方言の「ヨル・トル」、高知方言の「ユウ・チュウ」共通語の「テルトコ」、付帯状況の「ナガラ」が接続した場合の動詞のアスペクトについて調査を行い、西日本方言である熊本方言、高知方言と、東京方言とを比較し、考察する。

以下、4.2節では共通語と西日本方言のアスペクトについて概観し、さらに熊本方言と高知方言の相違点について述べる。4.3節では9つの動詞について行った調査結果を踏まえ、各方言話者のナガラ節のアスペクト認識について考察する。

## 4.2 アスペクト体系にみられる地域差

### 4.2.1 共通語のアスペクト体系と西日本方言のアスペクト体系

共通語のアスペクトは形式的にはスル(完了)ーシテイル(継続)で対立する。共通語シテイルは動作継続と変化結果継続を同じ形式で表現するが、西日本方言では動作・変化過程の継続をシヨル、パーフェクトをシトルと、それぞれ異なる形式で表現する。工藤(2004)は宇和島方言のシヨル・シトルについて「シヨルが時間の中に成立・展開・消滅する(限界達成前の段階)を分割的にとらえ、シトルが(限界達成後の段階)を先行する運動と関連づけて複合的にとらえる」と述べ、西日本方言のアスペクト・テンス体系を表4-1のようにまとめている。この表から共通語が2項対立であるのに対して、西日本諸方言は3項対立であることがわかる。

表4-1 共通語と西日本諸方言のアスペクト体系(工藤 2004 p.51)

共通語			西日本諸方言			
アスペクト テンス	完成	不完成	アスペクト テンス	完成	不完成	パーフェクト
非過去	スル	シテイル	非過去	スル	シヨル	シトル
過去	シタ	シテイタ	過去	シタ	シヨッタ	シトッタ

ヨル・トルという特定の形式を持つことで西日本方言では限界動詞の運動の側面と結果の側面をそれぞれ表現することができる。「あく」「あける」という動詞を例にとりて考えてみると、共通語では他動詞の「あけテイル」は動作の継続を表し、これに対応する自動詞「あいテイル」は結果を表す。一方、西日本方言では「あけヨル」は動作の継続を、「あきヨル」は変化の途中にあることを表し、不完成性という共通のアスペクト的意味を持つ。そして「あけトル」「あイトル」は動作あるいは変化結果の継続を表す。これをまとめると以下ようになる。

- (6)a. あけヨル: 終了限界達成前の段階、動作過程の進行・継続性
- b. あきヨル: 終了限界達成前の段階、変化過程の進行・継続性
- c. あけトル: 終了限界達成後の段階、結果状態
- d. あイトル: 終了限界達成後の段階、結果状態

共通語では「着る、履く、かぶる」といった再帰動詞はテイル形式で動作の局面と結果の局面を表すことができるが、ヨル・トルの形式を持つ方言では他の変化動詞においても運動の局面をシヨル、結果の局面をシトルの形式で言い表すことができる。

#### 4.2.2 3項対立の方言にみられる地域差－熊本方言と高知方言の相違点

4.2.1 では西日本方言の аспек트가スル・シヨル・シトルの3項で対立していることを述べたが、本節では3項対立の方言も一様ではないという点に注目して論を進める。

西日本方言のAspectに関する先行研究として工藤(1995)(1999)(2001)(2004)、畠山(2007)がある。工藤(1995)は愛媛県宇和島方言のスル・シヨル・シトルのAspect対立の観点から動詞の分類を行っている。工藤(1995)は愛媛県宇和島方言では運動動詞にはスル・シヨル・シトルの対立があり、状態性動詞ではシヨルとシトルの対立が中和すると述べている。中和とは「見える」などの動詞のヨル形、トル形、つまり「見えヨル／見えトル」がどちらも同じ意味を表すという現象である。さらに運動動詞の中でも非限界動詞においては、(7)のようにヨルとトルが中和する場合があることを指摘している。

- (7) (猫が魚を食べている場面を見て)
- a 猫が魚を食べヨル。(終了限界前の段階)
  - b 猫が魚を食べトル。(開始限界後の段階)

これを図に表すと、図4-1のようになる。

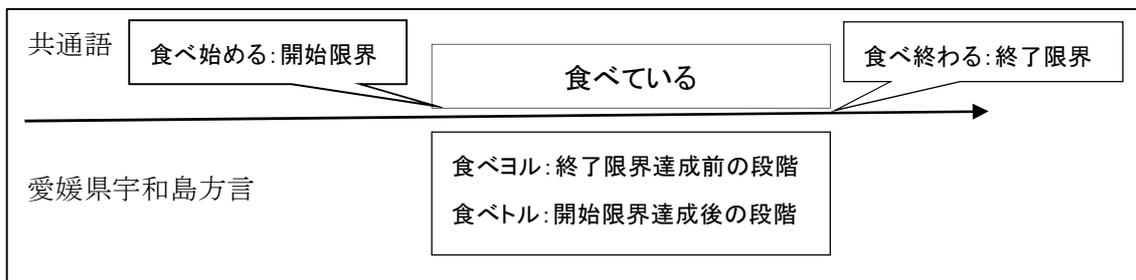


図4-1 ヨル・トルの表すAspect的的局面

中和が起こる理由について工藤(1995)は、トルが開始限界達成を表すことで、動作の継続を表すヨルと同じ状況を表すことができるからであると説明している。

また工藤(2004)は西日本方言の動態として、シトル形式が動作継続(進行)や反復習慣を表す形でシヨル形式と同じAspect的意味をもち、この結果シトル形式への一本化が進んでいると指摘している。工藤(2004)の調査では、調査したすべての西日本方言で主体動作動詞ではシヨル形式もシトル形式も動作進行の意味で使用され、一部の方言では主体動作・客体変化動詞でもシトル形式が進行を表すことが報告されている。

工藤(1995)は限界動詞ではヨル・トルの中和は起こらないとしているが、畠山(2007)は高知方言のAspect形式であるユウ形式(ヨルに相当)とチュウ形式(トルに相当)が限界動詞で対立する場合と中和する場合があることを指摘している。畠山(2007)は、高知方言ではヨルが結果維持

の局面を表すことで、トルとの中和が起こると説明している。高知方言でユウ・チュウが中和する動詞は、「座る、握る、映る、疑う、見える、住む」など変化結果維持を表現する動詞(以下、結果維持動詞)である。結果維持動詞について畠山(2007)は次のように定義している。

畠山(2007 p74)

結果維持動詞とは、主体変化動詞と主体動作動詞の間に位置する動詞であり、主語が表現する対象の変化、変化の結果状態、その変化結果を維持するという3つが語彙的に指定されている動詞である。

高知方言では中和を見せる結果維持動詞の中には、熊本方言では中和しないものがある。同じ四国の愛媛県宇和島方言も高知方言と、完全には一致しないことから、アスペク的に3項対立をする西日本方言の中でも違いがあることがわかる。以下、高知方言と熊本方言の中和現象について具体的にみていく。(議論をわかりやすくするために高知方言のユウはヨル、チュウはトルに読み替えて話を進める。)

はじめに、熊本方言と高知方言で中和現象が同じように起こる動詞群についてみていきたい。結果維持動詞の中で、「映る、光る、照る」などの現象動詞ではヨル・トルの対立は中和する。

(8) (暗闇の中で LED ライトが) 光つトル／光りヨル。(光っている)

(9) (写真を撮ろうとした) カメラマンが鏡に映りヨル／映つトル。(映っている)

また、心理動詞の中の「疑う、思う、信じる、望む、呆れる、安心する」などの動詞、知覚動詞の中の「見える」は中和する。これらは工藤(1995)で状態動詞と呼ばれている動詞群である。

次に高知方言では中和するが、熊本方言では中和しない動詞について見ていく。畠山(2007)は(10)(11)の動詞をヨル・トルが中和する動詞として挙げている。しかし、熊本方言ではこれらの動詞はヨル形では動作・変化の進行を表し、トル形では変化の結果状態を表すため、中和しない。

(10) 座る、立つ、よりかかる、乗る(姿勢変化動詞)

(11) つかまる、握る、かつぐ、独占する(保持を意味する再帰動詞)

このように、同じ3項対立のアスペクト体系を持つ方言の間でも、アスペクト認識には違いが観察される。続いて次節では、付帯状況ナガラ節のアスペクト認識の地域差について行った調査について報告し考察する。

### 4.3 ヨル・トル・テルトコ・ナガラ節のAspect調査

#### 4.3.1 調査の概要

「ヨル・トル」「テルトコ(テイルトコロ)」「ナガラ(付帯状況)」に動詞が接続した場合、動きの、どの局面を指しているのかを調べるため、熊本方言話者と高知方言話者を対象に調査を行った。さらに東京方言話者に対しては「テルトコ」、付帯状況の「ナガラ」について調査した。

「テイルトコロダ」は「今、警察が現場に向かっテイルトコロダ」「僕は椅子に座っテイルトコロダ」のように〈過程〉と〈維持〉の二通りの局面を表すことができるAspect形式である(森山 1988 p.147)。また、寺村(1984)は「トコロの中心的意味は、ある全体を視野に入れながら、その一部にスポットライトを当てるときのそのスポットライトの当たる部分」(p.290)としているように、動詞の動きのどの部分を取り出すのかを知るためのテストとして使うことができる。

調査では「テイルトコロダ」ではなく「テルトコ」という縮約形を使用した。テイルトコロダは書き言葉やフォーマルな場面で使われるなど、使用場面が限られている。テルトコは会話で使われ、様々な場面を想定できることから、無意識の使用を引き出すことができると考え、テルトコを使用した。「テルトコ」も「ナガラ」も方言形式ではないが、共通語形式の文のAspect認識に、方言の影響が見られるか、検証するという観点から、調査項目に共通語形式を用いた。

調査対象者は20代から50代の熊本方言話者106名(男性54名、女性52名)、東京方言話者104名(男性53名、女性51名)、高知方言話者100名(男性49名、女性51名)、年齢構成は20代、30~49歳、50代の3つの世代に分け、比率はほぼ均等である。調査は以下の9つの主体動作・客体変化動詞について行った。

(12) 着る、片付ける、汚す:高知方言で中和しない動詞

座る、立つ、握る 乗る、よりかかる、ぶらさがる

:高知方言でヨル・トルの中和が起こるとされる動詞

調査は以下のような質問に○、×、△で答えてもらった<sup>23</sup>。

(13) I 下の例文を読んで、それが、どんな状況なのか、教えてください。

○は、いくつ付けてもかまいません。迷ったときは△を書いてください。

(例) 雨の降りヨル。 (○)雨が降っている最中。(×)雨が降り終わったあと。

雨の降ットル。 (×)雨が降っている最中。(○)雨が降り終わったあと。

II 電話で「今何してる?」と聞かれた時の答え、または、イラストなどを見て何が書

<sup>23</sup> 巻末に質問紙を提示している。調査はインターネット調査会社に依頼し、被験者の出身地、年齢、性別について、なりすましなどの不正が起こらないよう配慮した。

いてあるか、誰かに説明する場面を想定してください。「今～してるとこ」という文を言ったとき、どんな状況をさしていますか。○は、いくつ付けてもかまいません。迷ったときは△を書いてください。

(例) 今、雨が降ってるとこ。 (○) 今、雨が降っている最中。

(×) 雨が降り終わったあと。

III 「次の「～ながら」を使った文を読んでください。「～ながら」の部分は、どのような状況をさしていますか。○は、いくつ付けてもかまいません。迷ったときは△を書いてください。例文がおかしいと思ったら、全部×をつけてください。(この場合の「ながら」は二つの動作を同時に行なうという意味です。「～のに」に言い換えられるような逆接の意味ではありません。)

(例) ご飯をゆっくり食べながら、友達と話した。

(○) 食べるという動作をしている最中。まだ食べ終わっていない。

(×) 食べたあと。

第4章ではこの調査の「動作の進行、または変化過程の進行」の局面と「結果維持」の局面について分析を行う。選択肢で「～最中、途中」の文言が入るものを「動作の進行、または変化過程の進行」、「～たあと」の文言が入るものを「結果維持」として取り扱う。

判定に使った文は「ヨル・トル」「テルトコ」は「座りヨル・座っトル・今、座っテルトコ」という短いものだが、付帯状況ナガラについては、(14)(15)のように文脈的に動作進行ととれるものと、結果維持にとれるものの2種類を使用した。

(14) 花子はゆっくり座りながら隣のテーブルを見た。:動作進行の文脈

(15) 花子は座りながら30分太郎を待った。:結果維持の文脈

調査では(14)(15)それぞれについて「～最中」「～たあと」を表しているかどうかを判定してもらった。回答の中で動作進行の文脈で「～最中」につけられた○を「進行」、結果維持の文脈で「～たあと」につけられた○を「結果」として数えたものを集計し、その割合を表4-2、4-3、4-4にまとめた。表では「動作の進行、または変化過程の進行」の局面を進行、「結果維持」の局面を結果と記している。

ここでは○を選んだ人が80%以上のものを、各方言のヨル・トル・テルトコ・ナガラが表す局面であると考えことにする。また、70%～80%のものは「傾向がある」として取り扱う。表では回答者の80%以上が○と答えたところには網掛けをしている。たとえば東京方言話者のテルトコ形を見ると、表4-2の「着る、片付ける、汚す」は動作の局面を表しているが、表4-4の「握る、よりかかる、ぶらさがる」は結果維持の局面を表していることがわかる。このことから「着る、片付ける、汚す」のテ

ルトコ形は動作の局面を表し、「握る、よりかかる、ぶらさがる」のテルトコ形は結果維持の局面を表すと考える。

表 4-2、4-3、4-4 のヨル・トル形式の調査結果を見ると、熊本方言、高知方言共に、ヨルは動作・変化の進行を、トルは結果維持を表していることがわかる。これは工藤(1999)の調査結果と一致している。

以下、調査した動詞を 3 つのグループに分け、グループごとに論を進める。一つ目のグループは「着る、片付ける、汚す」で、テルトコ形、ナガラ節がどの方言でも動作進行の局面を表す、あるいは表す傾向がある。二つ目のグループは「座る、立つ、乗る」で、テルトコ形を見ると、東京方言話者では結果維持を表す傾向があるのに対し、熊本方言話者では進行の局面を表す傾向がある。このグループではナガラ節が動作進行と結果維持の両方を表す傾向がある。三つ目は「握る、よりかかる、ぶらさがる」で、これらの動詞はどの方言でもナガラ節が結果維持を表す。以下、それぞれの動詞群を見ていく。

#### 4.3.2 ナガラ節が動作の進行を表す動詞群「着る、片付ける、汚す」

80%以上が○をつけたものを、その方言で認識されるアスペクトであると考え、どの方言話者にも「着ナガラ、片付けナガラ、汚しナガラ」は進行中であると認識されている。

表 4-2 ナガラ節が動作の進行を表す動詞の判定 (%)

網掛けは○を選んだ人が 80%以上のもの

	ヨル		トル		テルトコ			ナガラ		
	熊本	高知	熊本	高知	熊本	高知	東京	熊本	高知	東京
[着る] 進行	100	98.0	16.0	2.0	100	99.0	95.2	98.1	99.0	89.4
[着る] 維持	4.7	4.0	96.2	98.0	4.7	4.0	2.9	39.6	44.0	67.3
[片付ける] 進行	100	99.0	45.3	7.0	100	100	95.2	97.2	97.0	86.5
[片付ける] 維持	9.0	0.0	70.8	91.0	0.9	1.0	1.9	27.4	20.0	30.8
[汚す] 進行	96.2	94.0	23.6	5.0	97.2	96.0	82.7	89.6	94.0	76.9
[汚す] 維持	9.4	4.0	96.2	97.0	1.9	2.0	10.6	39.6	38.0	61.5

「片付ける、汚す」は主体動作・客体変化動詞で、シテイル形式は動作の進行のみを表すが、「着る」は主体変化動詞の再帰動詞で、シテイル形式で動作進行と結果維持の両方を表す。表 4-2 のテルトコ形を見ると、どの方言でも進行の局面を表している。「着る」のようにシテイル形式で、動作進行と結果維持の両方を表す動詞の場合、テルトコ形は動作の進行という運動の局面に焦点をあてるといことがわかる。

ナガラ節の結果維持の読みについては、熊本・高知方言話者と、東京方言話者とではやや異

なる傾向が見られた「着ナガラ」を結果維持と認識する割合は、熊本:39.6%、高知:44%に対し東京:67.3%だった。

(16) 花子は服を着ながら姉と話した。

(17) 花子は服を着ながら3時間接客した。

(16)は動作進行の文脈、(17)は結果維持の文脈である。表4-2の「進行」の数値は(16)の例文を見て「服を着るという動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。」と答えた人の割合、「維持」の数値は(17)を「服を着たあと、身につけている状態」と答えた人の割合である。(17)は熊本、高知方言話者では動作進行の読みも結果維持の読みも「×」と答える人が「○」と答える人を上回っており、(17)の文そのものを許容できない人が多かった。

(4)に示した、「花子は服を{着ナガラ/着たママ}3時間接客した。」の文で、熊本・高知方言話者がタママ・ナガラの置き換えができないのはこのためである。一方、東京方言話者は67.3%が結果維持と捉えているため、タママ・ナガラの置き換えが可能となる可能性が高い。つまり、「着る」は東京方言では維持の局面を持つ傾向があるが、熊本・高知方言では維持の局面を持たないということになる。

#### 4.3.3 ナガラ節が動作進行と結果維持を表す動詞群「座る、立つ、乗る」

「座る、立つ、乗る」は主体変化動詞(限界動詞)で、位置・姿勢変化を表す動詞である。このグループの動詞では、ナガラ節が動作進行と結果維持の両方の局面を表す傾向がある。

表4-3 テルトコが進行と結果を表す動詞の判定(%)

網掛けは○を選んだ人が80%以上のもの

	ヨル		トル		テルトコ			ナガラ		
	熊本	高知	熊本	高知	熊本	高知	東京	熊本	高知	東京
[座る] 進行	93.4	91.0	8.5	2.0	80.2	73.0	32.7	90.6	93.0	75.0
[座る] 維持	11.3	40.0	100	99.0	47.2	59.0	77.9	75.5	84.0	86.5
[立つ] 進行	95.3	95.0	5.7	0.0	77.4	75.0	28.8	77.4	71.0	64.4
[立つ] 維持	10.4	17.0	99.1	99.0	49.1	66.0	82.7	75.5	80.0	89.4
[(バスに)乗る] 進行	99.1	94.0	7.5	2.0	73.6	78.0	27.9	95.3	97.0	74.0
[(バスに)乗る] 維持	11.3	24.0	100	98.0	67.0	76.0	85.6	82.1	84.0	87.5
[(自転車に)乗る] 進行	90.6	79.0	24.5	16.0	70.8	75.0	31.7	86.8	80.0	64.4
[(自転車に)乗る] 維持	33.0	71.0	95.3	94.0	67.0	77.0	78.8	80.2	87.0	85.6

ナガラ節を見る前に、まず、テルトコ形のアスペクト領域を見ると「今、座っテルトコ／立っテルトコ／乗っテルトコ」は東京方言では動作・変化の進行と捉える割合が 30%前後と低いのに対し、熊本・高知方言では 70～80%の人が動作の進行と捉えている。さらに高知方言では進行に加え、「乗っテルトコ」が結果維持として認識される傾向がある。

この動詞グループのテルトコで取り出される局面は、東京方言話者では動作の結果維持の局面であるのに対して、熊本方言話者では動作継続の局面を、高知方言話者では動作継続と結果維持の両方を表す傾向があるという点は興味深い。

テルトコ形のアスペクト的特徴が熊本・高知方言話者と、東京方言話者とでは異なるという結果は、ヨル形式とテイル形式の取り出す動詞の局面が異なることと関連している。つまり、東京方言では「座っテイル、立っテイル、乗っテイル」を結果維持の局面として捉えており、テルトコ形式の表す局面もこれと同じである。一方、西日本方言には共通語のテイルのような不完成相を表す形式としてヨルがあり、テルトコで取り出される局面はヨルの影響を受けている。「着る」のような、テイル形式で動作進行と結果維持の両方を表す動詞の場合、テルトコ形は動作進行の局面を捉えるという現象は、すでに観察した。これと同様に、熊本・高知方言ではヨルが運動の局面を取り出すことができるため、テルトコ形はその影響から変化進行という局面を表すのではないだろうか。

熊本・高知方言で、テルトコ形式が表す局面を結果維持と捉える割合が、ヨル形式を結果維持と認識する割合より高いのは、テイル形式が共通語形式であることの影響であると考えられる。熊本・高知方言話者が共通語形式を使用するとき、テイル形式のアスペクト的的局面を共通語と同じように捉えようとしているはずである。しかし、「今、～テルトコ」のような、文脈の助けのないフレーズでは、ヨル形式のアスペクト的的局面の影響も受ける。つまり、熊本・高知方言話者のテルトコ形はヨル形式と、共通語のテイル形式双方の影響を受けているため、ヨル形式とも、東京方言話者のテルトコ形とも、異なる結果となっていると考えられる。

次にナガラ節について見る。例えば、「座る」について次のような文を提示した。

(18) 花子はゆっくり座りナガラ、隣のテーブルを見た。

(19) 花子は座りながら、30分太郎を待った。

(18)は動作進行の文脈、(19)は結果維持の文脈である。(18)を「座るという動作をしている最中。まだ座り終わっていない」と答えた人はナガラ節を進行と捉えており(19)を「腰かけた後、座ったままの状態。」と答えた人はナガラ節を結果と捉えているとして数えた。このグループの動詞＋ナガラについて、東京方言話者は結果維持と捉え、熊本・高知方言話者は文脈の支持があれば動作進行と結果維持の両方の局面と捉える。

(18)について、熊本・高知方言話者の 90%以上が動作進行と認識するのに対し、東京方言話者でこれを動作進行と捉えるのは 75%である。また、(19)を結果維持と捉える割合は熊本方言では 75%だが、高知方言で 84%、東京方言で 86.5%となっている。このことから、「座りナガラ」につ

いて、東京方言話者は結果維持と捉え、熊本方言話者は動作進行と捉え、高知方言話者は動作進行と結果維持の両方を捉えるといえる。とはいえ、75%という割合は決して低いものではなく、熊本方言話者にも維持と捉える傾向があり、東京方言話者にも動作進行と捉える傾向があることを指摘しておきたい。

表 4-3 を見ると、東京方言話者の「立つ」「(自転車に)乗る」の進行の読みの 64.4%を除けば、いずれも 70%を超えていることから、「座る、立つ、乗る」以外の他の動詞グループに比べ、進行と維持の割合の差が小さいことがわかる。このため、熊本・高知方言では、「座る、立つ、乗る」+ナガラは、動作進行と結果維持の局面を捉え、東京方言では「座る、(バスに)乗る」+ナガラは動作進行と結果維持の局面、「立つ」「(自転車に)乗る」は結果維持の局面のみを捉える傾向があるといえる。

このグループの動詞は、「ゆっくりと」といった副詞の共起があれば動作進行、「30分」のような文脈があれば結果維持の局面を表すことができることがわかった。4.1 で日本語教育ではこのグループの動詞は「座り／立ちナガラ食べる」ではなく「座って／立って食べる」と教えると述べたが、日本語母語話者には「座り／立ちナガラ待つ」のような使い方が広く許容されていることがうかがえる。

今回の調査で「乗る」は「バスに乗る」と「自転車に乗る」の 2 種類の判定文を用意した。「バスに乗る」は位置変化だが、「自転車に乗る」は動作要素が加わる。表 4-3 を見ると熊本・高知方言で「自転車に乗りナガラ」「バスに乗りナガラ」は進行と結果維持を表している。

東京方言話者と熊本方言話者の違いとしては、熊本方言話者は進行読みの方が結果読みよりパーセンテージが高く、東京方言話者は逆に結果読みの方が高い数値を示しているという点が指摘される。東京方言話者の結果読みが優勢なのは共通語の「座っテイル、立っテイル、乗っテイル」が結果維持を表すためであり、熊本方言話者の進行読みが優位なのは、ヨル、テルトコで取り出される局面が動作進行の局面であることと関連していると考えられる。

同様に高知方言話者でも、テルトコ形で進行の局面を表す動詞についてはナガラ節でも進行読みが優勢で、テルトコ形で結果維持の局面を表す動詞についてはナガラ節でも結果維持の読み優勢であることがわかる。

ナガラ節の特徴として、ナガラ節のアスペクト認識は文脈の影響を受け、文脈からもたらされるアスペクト的意味を読み取ることで実現する。(18)「花子はゆっくりと座りナガラ、隣のテーブルを見た」では、後件の出来事が短い時間に起こるため「座るという動作をしている最中」という進行読みが可能だが、(19)「花子は座りナガラ、30分太郎を待った」は、後件の成立には 30分という時間幅が必要となるため、「座るという動作をしている最中」という進行読みができず、結果維持の局面を読み取ることになる。熊本・高知方言で「座っテルトコ」は結果の局面を表さないのに、「座りナガラ」が結果の局面を表すのは、文脈情報から事態を読み取ろうとする作用の結果である。しかし、どのような動詞でも文脈さえあれば文脈が指定する局面を読み取れるかという、そうではなく、前述のように(17)「花子は服を着ながら 3 時間接客した」という文を熊本・高知方言話者は非用だと判断する。つまり、テルトコが表さないアスペクト局面を、ナガラ節で捉えることがあるが、動詞によ

っては、文脈の助けがあっても表すことのできない局面があり、それは方言によって異なるということが明らかになった。

#### 4.3.4 ナガラ節が結果維持を表す動詞群「握る、よりかかる、ぶらさがる」

このグループの動詞は、東京方言話者ではナガラ節とテルトコ形が表すアスペクトは一致しているが、熊本・高知方言では違いが見られる。

表 4-4 を見ると「握っテルトコ、よりかかっテルトコ、ぶらさがっテルトコ」について東京方言話者は、80%以上の高い割合で結果維持のみを表し、高知方言話者は進行も結果維持も表す傾向がある。熊本方言話者は「ぶらさがっテルトコ」の結果維持のみが 70%を超えているが、ほかの動詞の、進行・結果維持のどの値も 66%~69%で、低くはないが高くもない。まさに、判断が“ゆれ”している状態である。

「握る」は工藤(1995)の分類では「着る」と同じ主体変化・主体動作動詞の中の再帰動詞である。しかし、東京方言話者の判定では着テルトコは進行を表し、握っテルトコは結果維持を表す。これは次のような理由によるものと思われる。森山(1988)は共起する副詞的成分を手掛かりに動詞のアスペクトの類型をまとめているが、そこでは「着る」は「過程」によって変化が生じ、その結果が維持されるという特徴を持つ動詞群に分類されている。一方「握る」は維持の局面はあるが、過程の局面はない動詞群に分類されている。このような過程の局面のない「握る」のテルトコ形は、東京方言話者では結果維持の局面のみを表す。

表 4-4 ナガラ節が結果継続を表す動詞 (%)

網掛けは○を選んだ人が 80%以上のもの

	ヨル		トル		テルトコ			ナガラ		
	熊本	高知	熊本	高知	熊本	高知	東京	熊本	高知	東京
[握る] 進行	87.7	88.0	10.4	6.0	67.9	76.0	27.9	84.9	79.0	59.6
[握る] 維持	20.8	40.0	100	98.0	66.0	76.0	79.8	80.2	86.0	90.4
[よりかかる] 進行	91.5	91.0	14.2	4.0	69.8	76.0	15.4	64.2	64.0	48.1
[よりかかる] 維持	18.9	36.0	97.2	99.0	67.0	77.0	87.5	85.8	89.0	87.5
[ぶらさがる] 進行	86.8	88.0	16.0	4.0	67.9	72.0	16.3	58.5	57.0	36.5
[ぶらさがる] 維持	23.6	52.0	96.2	99.0	70.8	81.0	87.5	82.1	93.0	90.4

「着る、片付ける、汚す」「座る、立つ、乗る」のテルトコ形では、高知方言は動作・変化の進行の局面を表す傾向があったが、「握る、よりかかる、ぶらさがる」では進行と結果維持の両方を表す。テルトコ形が進行の局面を表すのは、高知方言はヨル形式を持つため、東京方言話者とは異なり「握る、よりかかる、ぶらさがる」の過程の局面も、とりだすことができるからである。しかし、同じヨル

形式を持つ熊本方言では、どの形式も決定的な数値を示さない。この理由については、今後の課題としたい。

ナガラ節については、どの方言も付帯状況ナガラ節が結果維持を表し、熊本方言・高知方言では「握りナガラ」が動作の進行も表す。このグループの動詞は次のような文のナガラ節について判定してもらった。

- (20) 太郎はドアノブをゆっくりと握りながら、「夢かもしれない」と思った。
- (21) 太郎はお母さんの手を握りながらおにぎりを食べた。
- (22) 太郎は壁にゆっくりとよりかかりながら、外を見た。
- (23) 太郎は壁によりかかりながら、しばらく外を見た。
- (24) 太郎は大きい木の枝に急いでぶらさがりながら、下を見た。
- (25) 太郎は校庭の鉄棒にぶらさがりながら、静かに夕日を眺めた。

(20) (22) (24)は動作進行の文脈、(21) (23) (25)は結果維持の文脈である。(20)を「5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。」、(22) (24)を「よりかかる／ぶらさがるとい動作をしている途中。まだ、よりかかり／ぶらさがり終わっていない。」と答えた人はナガラ節を「進行」と捉えており、(21) (23) (25)を「握った／よりかかった／ぶらさがった後の状態。」と答えた人はナガラ節を「結果」と捉えているとして数えた。

「握りナガラ、よりかかりナガラ、ぶらさがりナガラ」は東京方言話者には結果維持の局面として捉えられる。熊本・高知方言話者は(20)のナガラ節を、「5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。」といった、動作進行の局面と捉えており、(22) (24)についても動作進行の局面と捉えている人が東京方言より多い。

熊本・高知方言話者の「よりかかっテルトコ、ぶらさがっテルトコ」の進行読みと、結果維持読みがほぼ同じ数値で、どちらが優勢ともいえないのに対し、ナガラ節では結果読みが80%以上と、きわめて高いのはなぜだろう。理由のひとつとして次のようなことが考えられる。判定文作成にあたって、「よりかかる、ぶらさがる」の進行読みの文脈を作るのにかなり苦労をしたことから言えるが、ナガラ節で「よりかかる、ぶらさがる」が動作継続となるような文脈はきわめて特殊である。その特殊な文脈でも約57%～64%が動作進行の局面と認識しているという点は、東京方言話者との明らかな違いとして指摘できるだろう。

「握る、よりかかる、ぶらさがる」は変化の結果が維持される局面が動詞の意味が実現する局面と捉えられる。「走る」のような主体動作動詞の意味が実現する局面は動作進行の局面である。「倒れる」のような変化動詞の場合、倒れるという変化の始まりから終わりまでを人まとまりと捉えて想起されるのに対し、「握る、よりかかる、ぶらさがる」では、結果維持の局面が想起される。これはこの動詞群の大きな特徴である。

ところで、畠山(2007)は高知方言では「座る、立つ、乗る、握る、よりかかる、ぶらさがる」のヨル

形式とトル形式は中和し、どちらも変化結果維持を表現すると指摘している。しかし、本調査の結果からはヨル形式とトル形式が中和しているというデータは示せない。

しかし、表 4-3 で高知方言話者が「座る、立つ、乗る」のヨル形式を結果維持と捉える割合は、熊本方言話者に比べて高い。また、表 4-4 のヨル形式を見ると、ヨル形式が結果を表すと捉える人の割合が他の動詞群に比べて高く、逆に動作の進行と捉える人の割合が他の動詞に比べ、比較的低いことが観察される。これらのことから、「座る、立つ、乗る、握る、よりかかる、ぶらさがる」について、高知方言のヨル形式は熊本方言のヨル形式より、結果を表す割合が高く、このことが、中和をもたらす要因ではないかと考える。ヨル・トル形式の中和については、今後の課題としたい。

#### 4.4 第 4 章のまとめ

方言によって共通語形式であるナガラ節、テルトコ形のアスペクト認識が異なるのではないか、という仮説を立て調査を行った結果、熊本・高知方言話者と東京方言話者では、共通語使用場で、アスペクト認識に違いが見られた。4-3 節の調査結果をまとめると次のようになる。

「片付ける、汚す、着る」

3 方言による差は見られず、すべての方言で、非内的限界動詞である主体動作動詞同様、ナガラ節、テルトコ形のアスペクトは動作進行の局面を表す。

「座る、立つ、乗る」

テルトコ形：東京方言では結果維持の局面、熊本方言では進行の局面を表す傾向がある。

高知方言では「座る、立つ」は進行の局面、「乗る」は進行と、結果継続の局面を表す傾向がある。

ナガラ節：すべての方言で進行、結果維持の両方を表す傾向がある。

東京方言話者では「立つ、(自転車に)乗る」の動作進行の読みが弱い。

東京方言話者は結果維持が、熊本方言話者は動作進行の読みが優位である。

「握る、よりかかる、ぶらさがる」

テルトコ形：東京方言では結果維持の局面を表す。

高知方言では変化進行と結果維持の局面を表す傾向がある。

ナガラ節：東京方言では結果維持の局面を表す。

熊本、高知方言話者は「握る」で進行と結果維持を表し、よりかかる、ぶらさがる」では結果維持のみを表す。

2 項対立のアスペクト体系をもつ東京方言と 3 項対立の熊本・高知方言との間に見られた相違

は、熊本・高知方言のヨル形式が、限界動詞の運動の局面を捉えることの影響によるものであると考えられる。東京方言では維持動詞のテルトコ形は結果維持の局面を捉えるが、熊本・高知方言では維持動詞であっても動作・変化の進行という動的局面を捉えることが可能な動詞の場合、テルトコ形は進行の局面を表すことができるのである。

ナガラ節のアスペクト認識については、文脈の影響を強く受けることから、テルトコ形では表されない局面もナガラ節で表されることを見た。「太郎はバスに乗りナガラ、「じゃあ、また」と言った。」のような文脈では動作継続を、「太郎はバスに乗りナガラ、英単語を覚えた」のような文脈では結果維持の局面が捉えられる。熊本・高知方言話者のナガラ節が表す局面が東京方言話者のものより幅広いのは、テルトコ同様、限界動詞でも動作継続の局面を捉えることができるヨルの影響だろう。

また、3 項対立のアスペクト体系を持つ西日本方言の間でアスペクトの捉え方は同じであるのかという問いに対しては、動詞によって差が見られた。テルトコとナガラはともに共通語形式であるが、その使用にあたっては東京・熊本・高知の各方言によって違いが見られた。このことがナガラ文の文法性判断にも作用し、日本語母語話者の間に文法性判断の違いが生じていると思われる。

付帯状況ナガラは森山(1988)で動詞の性質を規定したり、動詞を分類するためのテストとして用いられており、シツヅケル、シハジメルなどと同様アスペクト形式として捉えられている。しかし、今回観察されたようなアスペクト認識の相違は動詞分類のためのテストにも影響を及ぼすと考えられる。ナガラ節のアスペクトは誰もが同じように捉える典型的なものから、判定に迷うもの、母方言によっては認識の異なるものまで段階的に分類されると思われる。

今回の調査で明らかになったアスペクト認識の相違が日本語母語話者の中にあることはまだあまり報告されていない。今回の調査は熊本、高知、東京の 3 地域の方言話者を対象にしたが、今後調査地域を広げ、分析を進めていきたい。

## 第 5 章 コーパスを利用したナガラ文の使用分析—テとナガラの置き換えの可否—

### 5.1 付帯状況テとナガラの置き換え

第 5 章では、コーパスを利用して、ナガラ文の使用分析を行い、さらに、付帯状況という用法をもつテ節との置き換えの可否を通して、ナガラ節、テ節のアスペクト的特徴について論じる。また、日本語学習者の誤用分析に見られる、付帯状況ナガラの使用条件について分析する。

日本語教育で使われている初級の教科書は、単文から複文へ、段階的に学習が進むよう配置されており、付帯状況ナガラは初級の中盤から後半にかけて提示される学習項目である。ナガラには逆接の用法もあるが、これは初級では提示されず、中級以降の学習項目と位置づけられている。

庵他(2000 p.193)は(1)(2)のような文を付帯状況のナガラとしている。

- (1) 彼はいつもテレビを見ながらごはんを食べる。
- (2) 辞書を引きながら英語を読むのは疲れます。

庵他(2000)の付帯状況ナガラに関する記述をまとめると次のようになる。

P ながら Q について

- ① ある主体が動作 Q を行うときに、同時に別の動作 P を行うことを表す。
- ② P は時間的な幅のある動作であることが必要。
- ③ 二つの動作のうち主な動作は普通 Q で、P は付帯的な動作である。
- ④ 「P ながら Q」を意味を変えずに「P て Q」に置き換えることはできない

④について庵他(2000 p.194)は(3)(4)の文を例としてあげている。

- (3)a. テレビを見ながらごはんを食べました。
  - b. テレビを見てごはんを食べました。
- (4)a. 資料を使いながら勉強した。
  - b. 資料を使って勉強した。

(3)a は付帯状況で、「見る」と「食べる」が同時に行われているが、(3)b は「見た」そして「食べた」のように、動作が継起的に行われたことを意味する。(4)について、b は手段であり、a と b は同じ意味にならないという(庵他 2000)。

一方、川越(2002)はテに置き換えられるナガラと置き換えられないナガラがあると述べている<sup>24</sup>。

(川越 2002 p.52)

(5) ラジオで音楽を聞きながら、日本語の勉強をした。

≠(5)'ラジオで音楽を聞いて、日本語の勉強をした。

(6) 発音のテープを聞きながら、日本語の勉強をした。

= (6)'発音のテープを聞いて、日本語の勉強をした。

(5)は「聞きながら」と「勉強をした」が同じ時間に行われているが、(5)'は「聞いたあと勉強した」という事態を表しており、二つの動作は継起的に行われたことになる。一方(6)と(6)'では、二つの動作は同じ時間に行われていると解釈でき、置き換えが可能だとしている。川越(2002)では(6)に手段の意味が含意されているか否かについては言及していない。

また、ナガラとテの置き換えについては、吉永(2008)が(7)のような例文をあげ、置き換えることができないと指摘している。

(7) {歩いテ／\*歩きナガラ}うちへ帰る。

(4)a, b は「手段」か否かといった違いはあっても、それぞれが正用として認識されるのに対して、(7)の「歩きナガラ」は許容度が低い。

このようにナガラとテを置き換えた場合、「主節と従属節の時間関係が変わるものと、変わらないもの」、「時間関係は同じでも、意味に違いが現れるもの」、そして「置き換えられないもの」があることがわかる。これにはナガラ節の動詞の種類や、文脈などの条件が関わっていると考えられる。

第5章ではこのような付帯状況ナガラとテの置き換えについて考察する。5.2 ではテ節に関する先行研究を概観し、5.3 では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に見られるナガラの使用例と、テへの置き換えの可否について検証する。そして、5.4 では『日本語学習者作文コーパス』に見られる、日本語学習者の誤用例と、それに対する日本語教師の添削を中心に分析を進める。

---

<sup>24</sup> 川越(2002)はテに置き換えられないナガラを「付帯状況」の用法、置き換えられるナガラを「様態」の用法とさらに細かく分類しているが、本稿は、非逆接のナガラはすべて付帯状況と捉えている。付帯用法の下位分類については3.3.3.2で述べた。

## 5.2 先行研究:仁田(1995)

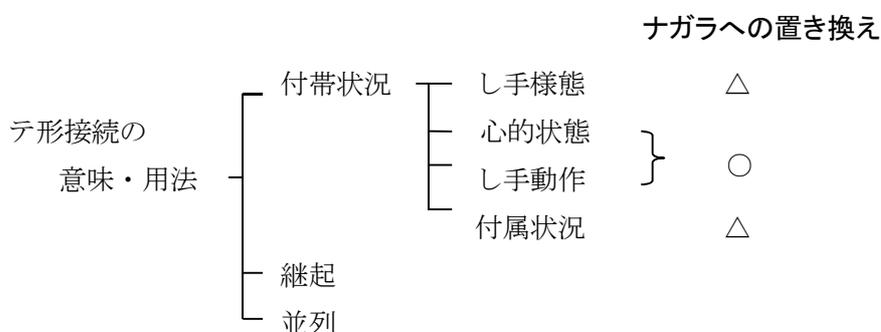
仁田(1995)はテ形接続の意味用法として、付帯状況、継起、並列の3つの類型を抽出している。この中で、ナガラに置き換えが可能なのは、付帯状況のテ節である。付帯状況のテ節の特徴について、仁田(1995)は次のように述べている<sup>25</sup>。

仁田(1995 p.89、90)

- ・ <付帯状況>とはシテ節で表されている事象が、主節として表される事象の実現のされ方を限定・修飾するといったあり方で、主節と結びついている。
- ・ シテ節と主節の事象の主体は同一でなければならない。
- ・ シテ節の事象と主節の事象は、同じ時間の中に存していなければならない。

主節と従属節の意味関係や、同一主体、同時性という付帯状況テ節の特徴は付帯状況ナガラ節の特徴と共通している。

仁田(1995)は付帯状況テを、さらに「し手様態」「心的状態」「し手動作」「付属状況」に下位分類している。この中でナガラに置き換えることができるのは「興奮して、呆然として、あわてて」など、心理作用を表す動詞によって構成される「心的状態」と、主体運動の動詞がテ節で反復的事象を表す「し手動作」の用法である。仁田(1995)のテ形接続の意味用法と、ナガラへの置き換えの可否についてまとめると次のようになる。



以下、(9)～(20)の文例は仁田(1995)によるテ節例文に筆者がナガラを加えたものである<sup>26</sup>。特に断りのないかぎり、文法性の判断は筆者による。

<sup>25</sup> 仁田(1995)では本稿でテ、テ形、テ節としているものを、シテ形、シテ節と表記している。ここでは「シテ→テ」として、論を進める。

<sup>26</sup> 例文中の「～」という表記は、「省略」という意味で使われているようである。本稿では、仁田(1995)の例文については、仁田(1995)の表記を踏襲している。

- (9) 小関さん、花村、月川の二人も、みな{呆然としテ／ナガラ}神津さんの顔を見つめているばかり～ : 心的状態
- (10) 1122 番の伝票を{ひらひらさせテ／ナガラ}、蒼ざめた技術員が言う。 : し手動作
- (11) 家鴨は～忙しく足を{動かして／ナガラ}、上流のほうへ泳いでいった。 : し手動作

仁田(1995)は「びくびくして、げげんな顔をしテ」のような心の動きを表す外的態度動作や、表情動作を「し手動作」と「心的状態」との中間に位置するものとして扱っており、これらはナガラとテの置き換えが可能である。

姿勢や着脱、携帯を表す動詞によって構成される「し手様態」の中には、「首をかしげる、目を伏せる」のように、ナガラに置き換えることができるものと、「着る、履く」のようにナガラに置き換えることのできないものがある。

- (12) 「だって『～』と言って、首を{かしげテ／ナガラ}、私の顔をのぞきこむでしょう。いやだったわ」
- (13) 私は汗で湿った服をそのまま{着テ／\*ナガラ}、また《寮》に出かけていった。
- (14) だがそのスリッパには、確かに私も見覚えがあった。～たしか昨夜も、彼女は、それを{はいテ／\*はきナガラ}、部屋におったに違いない。

また、「首をかしげる」と同じ姿勢変化動詞でも「しゃがむ、立つ」は、置き換えることはできない。このような現象は、テ節、ナガラ節動詞のアスペクト的特徴に起因する。「し手様態」のテ節は、「首をかしげて＝かしげた状態で」「湿った服をそのまま着て＝着た状態で」「スリッパをはいて＝はいた状態で」といい表すことができ、テ節は結果状態が続いていることを表す。一方、ナガラ節が結果状態を表すのは、ナガラ節が結果状態の維持という要素を持つ動詞の場合に限られる。

森山(1988)は維持の局面を持つ動詞は「タママ・ナガラ」交替が可能であるとしているが、「首をかしげタママ＝首をかしげナガラ」のようにタママとナガラの交代が可能で、つまり維持の局面を持つ動詞はテとナガラの置き換えが可能であり、「着タママ≠着ナガラ」のように交替が不可能な動詞、つまり維持の局面を持たない動詞はテとナガラの置き換えも不可能になる。

「座る」については、森山(1988)では維持の局面を持ち、「タママ・ナガラ」交替が可能であるとされているが、これについては、日本語母語話者の間でも認識にずれがある。第4章で指摘したように、「座りナガラ」について、東京方言話者は「座った後」と捉えるのに対し、熊本方言話者、高知方言話者は「座った後」と「動作の最中」の両方の局面を捉えるという調査結果がある。これは維持の局面をもつかどうかの判断は地域によって差があるということを示している。

また、「座る」は文脈の影響も強く受ける。仁田(1995 p.96)は「座る」については(15)のような形では容認度が低い、(16)のように、「ゆったり」のような副詞を付加すれば、変化後の姿勢維持に焦点が当てられ、容認度が上がるとしている。

(文法性判断は仁田による)

- (15) 太郎は{??座りナガラ/座ッテ}弘と話していた。
- (16) 太郎はゆったり座りナガラ弘と話していた。

このように維持の局面を持つ動詞の中には、どのような場面でも安定して維持の局面を取り出せるものと、文脈や地域語の影響をうけるものがある。いずれにせよ、ここでは「し手様態」を表すテ節では、テ節の動詞が結果維持の局面をもつ動詞の場合にかぎり、ナガラに置き換えることができるということを指摘したい。

仁田(1995 p.100、101)は「付属状況」の用法として(17)～(20)のような例をあげている。

(文法性判断は仁田による)

- (17) (死んだ蜂は)～、たぶん泥に{まみれテ/ナガラ}どこかでじっとしていることだろう。
- (18) 月光を{浴びテ/ナガラ}家へと帰ってくる、この二人の、～乙女らの姿には～
- (19) ズボンと靴をびしょびしょに{しテ/\*ナガラ}彼は立ちあがった。
- (20) 次の部屋に弱い電灯を{つけテ/\*ナガラ}、息子が眠っていた。

仁田(1995)は(17)(18)のテ節が主体の様態的あり方を表しているのに対し、(19)(20)は「主体の様態的あり方」の度合いが低くなっていると述べている。(17)(18)は主体の全身が「泥にまみれ」「月光をあび」ている状況を述べているのに対し、(19)(20)は「ズボンと靴」「電灯」といった、ヲ格名詞の変化結果が継続しているという状況を表す。このような点から(19)(20)は「主体の様態的あり方」の度合いが低いとみなされている。

ナガラへの置き換えという観点から見ると、(17)(18)では置き換えができるが(19)(20)は置き換えができない。「びしょびしょにする」「(電灯を)つける」は、主体動作・客体変化動詞であるが、客体の変化結果を主体的に保持し、そのためにエネルギーを注入するといった維持の局面を持たない。付帯状況ナガラのナガラ節は、非限界動詞なら「動作継続」、限界動詞なら「変化結果の維持」というアスペクト的特徴を表すが、(19)(20)のナガラ節の動詞「びしょびしょにする」「(電灯を)つける」は維持の局面をもたないためナガラに置き換えることができないのである。

では、客体状態維持の局面を持つ動詞の場合は、ナガラに置き換えることができるのだろうか。森山(1988)は客体状態の維持を表す動詞として「預ける、貸す、借りる」などをあげている。(21)(22)は、「荷物を預けた状態で」「土地を借りた状態で」といった意味になるが、テをナガラに置き換えることはできない。

- (21) 荷物をクロークに{預けテ/\*ナガラ}食事する。
- (22) 親戚から土地を{借りテ/\*ナガラ}米を作る。

(21) (22)の「預ける、借りる」は維持の局面を持つ動詞であるにもかかわらず、ナガラに置き換えることはできない。これは、(21) (22)は(19) (20)同様主体の様態的あり方をあらかず度合いが低いと考えられ、このため、ナガラを使うことができないのである。これらのことから、付帯状況ナガラ節が表す維持の局面は、「主体状態維持」であり、「客体状態維持」ではないことがわかる。

以上、5.2 では付帯状況テ節の下位分類を確認し、さらにナガラとテの置き換えの可否について、ナガラ節、テ節のアスペクト的特徴といった観点から概観した。また主節とナガラ節、テ節の意味関係、つまり主体の様態的あり方の度合いといった要素についても確認した。

次節では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ)にみられるナガラの使用状況と、テへの置き換えについて考察する。

### 5.3 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に見られるナガラの使用状況

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)は、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスで、書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルからサンプルを抽出している。第5章ではBCCWJの中のサブコーパスである「図書館書籍」に使用されているナガラを抽出し、テに置き換えられるかどうかについて調べた。「図書館書籍」は1986～2005年に発行され、都内13自治体以上の図書館で共通に収蔵されている書籍から無作為抽出されたデータである。

BCCWJ:「図書館書籍」に使われていたナガラの全使用例は1152例だった。うち、「ながらも」が69例、「名詞、形容詞+ナガラ」が69例だった。また、ナガラ節のアスペクト的特徴がパーフェクトである、逆接のナガラは98例だった。ここでは、これらは分析の対象から除外し、「動詞+ナガラ」で付帯状況を表すナガラ節、916例について考察を進める。

付帯状況を表す916例のナガラのうち、テに置き換えても、表す事態が同じであると判断できる例は205例あった。もっとも多いのは主体の表情を表す用法で、45例あった。これは仁田(1995)が置き換え可能としている「心的状態」にあたる用法である。この用法が多いのは、用例を採取したコーパスに小説が多く含まれていることが要因であると考えられるが、違和感なく置き換えができる用法の典型例と考えてよいだろう。(以下、BCCWJから取り出した例文の末尾には(B)を付す)

(23) 柳沢はジャストに現れて、にこにこしナガラ片手をあげ、親指をフロントに向けて曲げて見せた。(B)

(24) 学生たちは、目をまるくしナガラ、いっしょうけんめいノートをとりました。(B)

(25) そうしたら、やっと息子は泣きナガラ話してくれました。(B)

中でも「泣きナガラ」「笑いナガラ」は特に使用例が多い。他に表情を表すものには「にやにやする、微笑する、冷笑を浮かべる、目をギラギラさせる」などがあつた。

次に使用例が多いのは「うつむく、(首を)かしげる、もたれる、見下ろす、(身を)よせる、(顔を)

向ける」など、姿勢を表す動詞＋ナガラで、28例あった。これは仁田(1995)では「し手様態」と呼ばれるもので、次のような姿勢を表すナガラはテに置き換えることができる。

(26)しばらく俊市は窓枠に頬づえをつきナガラ戦闘をぼんやりとながめていたが、～(B)

(27)馬方ふうの男は首をかしげナガラ出ていった。(B)

(28)「～」男の子は、細い声で、うつむきナガラいった。(B)

「見上げる」のように、ナガラ節が主体変化を表す動詞は、主節の動詞によっては違和感なくテに置き換えられる場合と、そうでない場合とがある。

(29)通りすぎてゆく夏の夜空を見上げナガラ、俺はふと考えた。(B)

(30)マーイヤは、オオタカの巣を見上げナガラ、ふッと思った。(B)

(29)の「見上げナガラ」は「見上げテ」に置き換えることができる。「ふと」がなければ、さらに違和感なく置き換えることができる。「見上げテ」に置き換えた場合も、「夜空を見上げた」状態で「考えている」と解釈され、ナガラの場合と、同じ事態をあらわす。一方、(30)の「見上げナガラ」を「見上げテ」に置き換えると、「見上げて、そして、ふッと思った」のような継起読みが可能になる。これは「ふッと思った」が非常に短い時間で成立する事柄であることが理由だろう。(29)「考えた」より(30)「ふッと思った」のほうが、時間幅が短いと捉えられやすいため、解釈にこのような差が生じるのである。

ナガラ節が反復動作を表す次のような文もテに置き換えることができる。これは仁田(1995)では「し手動作」に区分される用法である。

(31)自然を一つ一つ味わいナガラ、毎日を、一刻を楽しく過ごせ。(B)

(32)スリップ・リング(slip ring)スリップ・リングはブラシと接触しナガラ、フィールド(ロータ)の励磁電流の授受を行なう部分で、ロータ・シャフトに絶縁材を介して嵌入されている。(B)

(33)後水尾院はいろいろの人を招きナガラ、さらに山荘の充実につとめた。(B)

反復は限界動詞にも、非限界動詞にも現れ、動作継続と同じ特徴を持ったものとしてとらえられる。ところで、テに置き換えられるナガラには次のようなものもある。

(34)ともに食卓を囲み、目を見ナガラ話す習慣があれば、親ならば子どものちょっとした変化に気づくでしょう。(B)

(35)ここで泣いたら私の負けだ、次にはもっと苦しい目に遭わされる。そう思って、相手の目を見ナガラ死に物狂いで笑ってやりました。(B)

「見る」はテ節では、継起を表すこともできるが、(34) (35)のナガラをテに置き換えると、継起ではなく付帯状況を表す。(34)「目を見テ話す」(35)「目を見テ笑う」の他、「顔を見テ話す」「窓の外を見テ話す／言う」などでは、「視覚によって物の形・色・様子などを知覚する(三省堂『大辞林』)」という「見る」動作をとりあげているというより、「話す・笑う・言う」という主節動作が行われる際に、「顔を合わせる」「目をそらさない」、あるいは、「目を合わせない」といった姿勢や態度を表しているにとらえられる。

反例として(36)を見てみよう。(36)でナガラは付帯状況として自然だが、テはこの場合、継起となり、付帯状況の意味にはなりにくい。

(36) 家族の顔を{見ナガラ／??見て}食事する。

(36)は、(37)のような反復の文脈があれば、やや、許容度が上がる。この場合、姿勢や態度といった意味合いではなくとも、「見る」という具体的な動作が反復されることで、継続の局面となり、付帯状況の意味となる。

(37) 家族の顔をチラチラ{見ナガラ／見て}食事する。

「見テ」のような、「主体動作動詞＋テ」のテ節は動きをひとまとまりのものと捉える完成相で、通常、継起を表すが、「(人に対して)話す／言う／笑う」のような「動作を行う際、どこを向いているのか」といった姿勢を表す表現の一つであると考えれば、「見テ」は継起ではなく、付帯状況と解釈される。

以上、BCCWJに見られた、テに置き換え可能なナガラの使用例を見た。ナガラが「笑いナガラ」「泣きナガラ」のような主体の表情を表す場合、「頬杖を突きナガラ」「うつむきナガラ」のような姿勢を表す場合、ナガラ節が反復動作を表す場合、テとの置き換えが可能になる。これは4.2節の考察結果を裏付けるものである。

さらに次節では学習者の作文コーパスに見られるナガラの使用例と、誤用について分析し、日本語母語話者のナガラ使用例からは見えてこない、ナガラの使用条件について分析する。

## 5.4 『日本語学習者作文コーパス』に見られるナガラの使用例

### 5.4.1 『日本語学習者作文コーパス』の概要とナガラ使用数

『日本語学習者作文コーパス』(以後、「作文コーパス」とする)とは日本語学習者が書いた作文をコーパス化したものである。これは日本語学習者 304 名(初級～上級、中国語母語話者 144 人、韓国語母語話者 160 人)が書いた作文と、その作文に加えられた添削例がデータ化されており、ウェブブラウザで検索できる。検索は、形態素単位あるいは文字列で行うことができ、誤用のタイプは文字、文法、文体に分けられている。このコーパスを利用して、日本語学習者のナガラの使

用例と、それがどう添削されたかを分析する。

この「作文コーパス」に収められた作文のテーマは、「外国語が上手になる方法について」と「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」で、ナガラの使用例は 156 例あり、誤用例は 32 例だった。表 5-1 はナガラの使用数と、正用、誤用の割合をまとめたものである。( )内の%は使用例に対する割合である。

母語別に見ると、ナガラの使用例は韓国語母語話者に多く、誤用の割合も韓国語母語話者に多い。坂口、鄭(2006)では中国語・韓国語を母語とする日本語学習者のナガラ使用について分析しており、「作文コーパス」同様、使用数、誤用の割合ともに、韓国語母語話者が中国語母語話者より多かったと報告している<sup>27</sup>。

ところで、「作文コーパス」には誤用に対してどのように修正されたかといった修正例も含まれているが、指摘されている誤用例以外にも誤用と思われるナガラが散見される。誤用は、学習者のレベルや発話意図などを考慮して修正されるため、教師によって修正の内容が異なることもある。ここでは、誤用として修正を加えられたもの以外でも、問題があると思われる使用については分析の対象とする。

表5-1 『日本語学習者作文コーパス』に見られる“ナガラ”の使用数

	母語別	中国語	韓国語	合計
初級	使用例	5	14	19
	正用	4 (80%)	10 (71%)	14 (74%)
	誤用	1 (20%)	4 (29%)	5 (26%)
中級	使用例	27	52	79
	正用	23 (85%)	38 (73%)	61 (77%)
	誤用	4 (15%)	14 (27%)	18 (23%)
上級	使用例	9	49	58
	正用	7 (78%)	42 (86%)	49 (84%)
	誤用	2 (22%)	7 (14%)	9 (16%)
合計	使用例	41	115	156
	正用	34 (83%)	90 (78%)	124 (79%)
	誤用	7 (17%)	25 (22%)	32 (21%)

<sup>27</sup> 韓国語母語話者にナガラの誤用が多い理由として、坂口、鄭(2006)は、日本語のナガラと似ているが、使用範囲の異なる韓国語の「<sup>ㅅ</sup>면서」の影響だと指摘している。

ナガラとテの置き換えの可否について仁田(1995)は、テ節、ナガラ節動詞のアスペクト的特徴を中心に分析しているが、本節ではこれに加え、語用論的視点からの分析も試みる。

#### 5.4.2 ナガラの誤用例:ウチニへの修正

「作文コーパス」には次のような誤用例があった。(→)は「作文コーパス」の修正例である。ナガラ以外の誤用の部分は、修正されたものを記す。

- (38) 私も日本の映画やドラマを見ナガラ(→ているウチニ)日本の文化や生活が気になってこれをきっかけに、今までこつこつと勉強することができました。(韓国:上級)
- (39) 大学の日本研究を行うサークルにはいって、日本のたくさんの大学生と交流しナガラ(→ているウチニ)自然に日本、あるいは日本に関する物に興味を持つようになりました。(韓国:中級)
- (40) そして大学1年の冬休みに東京に行ったこともあります、テキストで見たことを実際に見て体験しナガラ(→ているウチニ)日本という国について沢山の興味がわきました。(韓国:中級)

(38) (39) (40)はいずれもナガラがウチニに修正されている。これらの文でナガラ節と同時に起こる動きは「気になる」「興味を持つ」「興味がわく」である。ナガラの付帯用法は、「主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況を表す」というものであったが、(38) (39) (40)のナガラ節は「同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況」とは言えない。文脈的にウチニの「従属節の表す期間に主節の変化が生じたことを表す」(日本語記述文法研究会 2008 p.189)という用法がふさわしいと判断され、修正されたと考えられる。

一方、(41)はナガラがウチニに修正されているが、これはナガラでも間違いとはいえないのではないだろうか。

- (41) 好きこそ物の上手なれという言葉のとおり、好きな物を見たり、聞いたりしナガラ(→しているウチニ)、より高い段階へ進むことができる。(中国:中級)

(41)のナガラ節では「見たり聞いたり」といった反復動作が継続しており、主節の「進む」と同時に成立していると捉えることができる。ウチニの場合、主節は「高い段階に進む」がひとまとまりの変化として認識されるが、ナガラの場合、徐々に「進む」といった漸進性が際だつ。このような意図で使われていれば、(41)のナガラは誤用だとは言えない。

### 5.4.3 ナガラの誤用例:テへの修正

#### 5.4.3.1 「維持」の局面を持たない動詞+ナガラ

「作文コーパス」に見られるナガラの誤用例 32 例のうち、半数に当たる 16 例がテに修正されている。この修正された誤用例のうち、本節では維持の局面を持たない動詞+ナガラの使用例、次節では、手段を表すテに修正されたナガラについて考察する。

(42) つぎはテレビを見る時常に電子辞書を持ちナガラ(→手元においテ)、わからない言葉があつたらすぐにしらべる事です。

まず、(42)はナガラ節の動詞に問題がある。「持ちナガラ」の用例を BCCWJ で探すと(43) (44)のような付帯用法もあるが、(45) (46) (47)のような逆接の用法のほうが多い。

(43) この豊後の介が、お隣の幕の近くに寄って来て、召上り物に違いないが、それを載せた角盆を自分で持ちナガラ、豊後介「これは御前にお差上げ下さい。お膳などが揃わなくて、いかにも不体裁ですなあ」というのを右近が聞いて、～(B)

(44) わたしは不吉な予感を持ちナガラ、妻をつれて病院にかけつけた。(B)

(45) 欠けるところのない美貌と教養を持ちナガラ、明石の君は源氏との身分の差を思い煩悶する。(B)

(46) 歯医者という高度な技術を持ちナガラ、どうしてここまで追い込まれなくてはならなかったのか。(B)

(47) スタウローギンは、あり余る知力と精力を持ちナガラ、これを人間侮蔑の為にしか使わなかった。(B)

「持つ」を森山(1988)は「維持」の局面を持つ動詞であるとしている。ナガラ節の動詞が結果維持の局面をもつ動詞の場合、ナガラ節は結果維持を表すことができ、ナガラとテは置き換えることができる。このため、「持つ」はナガラでもテでも使うことができることになる。しかし、「辞書を持つ」という表現は「辞書を手元に置く」と言ったほうが自然である。この場合、「置く」は「維持」の局面を持たないため、ナガラ節で結果維持を表すことができない。(42)は「電子辞書を手元に置いた状態で」という意味で使われているため、ナガラはテに修正される。

#### 5.4.3.2 手段を表す用法

ナガラからテに修正された例の中で、「手段」の用法とでも呼ぶべき用法がある。「作文コーパス」に収められている作文のテーマが「日本語が上手になる方法」ということもあり、どのような手段で勉強すればよいのかといった文脈でナガラが使われている。

通常、動作動詞は、「食事をして、出かける」のようにテ節は継起性を表すが、「辞書を使つて意

味を調べた」のような「手段」を表す場合、テ節の動作は時間の幅を持った動きで、「使う」と「調べる」は同時に起こっている。付帯状況のナガラ節も主節との同時性を表すため、ナガラと「手段」のテは同じように使うことができるが、「手段」のテの中にはナガラに置き換えられないものがある。(48)～(51)はテに修正されたナガラの例文である。

(48) 朝、起きて顔を洗う時、外国人と出会ったと想像して、こえに出しナガラ(→テ)会話すること。(韓国:中級)

(49) 本をたくさん読みナガラ(→読んデ)練習したらだんだん上手になると思います。(韓国:中級)

(50) 主に大学で専攻している日本語の授業を受けナガラ、家では自分が好きな小説を読みナガラ(→読んデ)しらなかった表現や漢字を覚えた。(韓国:上級)

(51) 外国語が上手くなるためには、その国の人とよく話しナガラ(→テ)、聞き取りの能力と話す能力を高くすることが第一の方法だと思います。(韓国:初級)

この修正された例を見ると(48)(49)はナガラではなくテの方が自然だが、(50)(51)はナガラを使用してもいいように思われる。また、次のようなナガラは修正されていない。

(52) 私は日本のドラマを見ナガラ日本語を自分で勉強したので、聴き取りは別に問題なかったが、話すこと、書くことは自信もなくダメだった。(韓国:上級)

(53) 自分が関心や興味がある外国の映画とかドラマをよく見ナガラ、聞き取りをするのも大切なことだと思います。(韓国:初級)

筆者の語感では(52)のナガラは許容できるが、(53)のナガラは不自然である。このような学習者のナガラ使用を添削する場面に見られる、日本語母語話者の語感の違いはどのように起こるのだろうか。

まず、修正されたものとされなかったものの違いを見るために、手段を表すテについて見てみよう。

(54) 自転車に{乗っテ/\*乗りナガラ}、学校へ行く。

(55) 何度も{たたいテ/\*たたきナガラ}壊した。

(56) 難しい漢字を何度も{書いテ/?書きナガラ}覚える。

(57) ハリウッド映画を{見テ/見ナガラ}楽しく英語を学ぶ。

(54)(55)のテはナガラに置き換えることができないが、(56)(57)は人によっては許容される。

吉永(2008)は「歩いテ帰る」は「歩く」と「帰る」は切り離すことのできない動きであり、テ節が動詞として、主動詞に完全に一体化しているとする。このため「歩いテ帰る」のテはナガラに置き換えら

れないという。このことをナガラノ用法として考えた場合、ナガラ節の動作は主動詞から独立した動きを保持していなければならないということになる。

この観点から改めて(54)～(57)を見ると、(54)(55)は「乗る・行く」「たたく・壊す」が一体化しているが、(56)(57)の「書く・覚える」「見る・学ぶ」はナガラ節の動作の独立性が残っている。(56)のナガラについては、手段の意味ではなく、何度も書くことと、覚えることが漸進的に進行すると捉えられるため、まったく同じ意味での書き換えはできないという意味解釈の問題も出てくる。

ここでもう一度(48)～(51)を見ると、(48)「声に出す・会話する」「読む・練習する」は一体化しているが、(50)「読む・覚える」「(51)「話す・能力を高める」は一体化した動きとは捉えられず、独立性が残っていると考えられる。このため、(50)(51)はナガラノ使用が可能だという判断が生じるのではない。

ところで、従属節の動作と主節の動作が一体化しているかどうかの判断は文脈に負うところが大きい。(57)は「映画を見る」ことが、楽しみであり、勉強にもなるといった文脈で捉えられるため、見ナガラは独立した動きと捉えられ、許容される。一方(58)は(57)に比べ、ナガラノ許容度が低い。

(58)その VTR を{見テ/??見ナガラ}、犯人が映っていないか、必死に探した。

(58)は、「見る」ことと「探す」ことが、一体化した一つの動作と捉えられるため、ナガラノ許容度が下がる。では、(53)の「見ナガラ」についてはどうだろう。「ドラマを見る」と「聞き取りをする」が一体化した動きなのか、独立した動きなのか、判断が難しい。

ドラマや映画を「映像＋音声＋物語」という要素で構成されるものであり、これを受信することを「見る」という動詞で代用していると考えれば、「ドラマを見ながら聞き取りをする」は「音声」の受信が焦点化されていると考えられる。「音声」の受信は「聞き取りをする」といった動作と一体化しているため、ナガラノ使用が難しくなる。

「音声の受信」をさらに際立たせるために、(53)を次のように書き換えてみる。

(53)' 外国の映画とかドラマを{見テ/\*見ナガラ}、一言一句正確に聞き取る。

(53)'ではテは使えるが、ナガラは使えない。その理由は、(53)'では「ドラマを見る」に含まれる「映像＋音声＋物語」という要素の中の「聞く」が際立ち、主節動詞「聞き取る」と、同じ動作になってしまうからである。ナガラ節と主節の動作が一体化する度合いは、表 5-2 のように段階的に高くなり、一体化の度合いが高くなれば、ナガラノ許容度は下がる。(53)は(57)と(53)'の中間に位置しており、文脈をどう判断するかによって、人によっては許容し、人によっては許容できないという現象がおこるのではないだろうか。

表5-2 主節と従属節の動きの一体化の度合い

低い	↑ ↓	(57) ハリウッド映画を {見テ/見ナガラ} 楽しく英語を学ぶ。
		(53) 自分が関心や興味がある外国の映画とかドラマを見ナガラ、聞き取りをするのも大切なことだと思います。
高い		(53)' 外国の映画とかドラマを {見テ/*見ナガラ}、一言一句正確に聞き取る。

以上、ナガラとテの置き換えの可否について、ナガラ・テ節の動詞の種類という観点と、主節とナガラ・テ節の動作の一体化の度合いという観点から分析を試みた。

## 5.5 第5章のまとめ

第5章では、従属節のアスペクトについて分析するという観点から、ナガラ節とテ節を分析した。ナガラとテの置き換えの可否を検証するという方法で、ナガラの用法について分析したが、まとめると、次のようになる。

- ①ナガラ・テ節が心理作用を表す動詞によって構成される「心的状態」を表す場合、ナガラ・テ節は、置き換えることが可能で(仁田 1995)、ともに主体の状態・状況を表す。
- ②主体運動の動詞がナガラ・テ節で繰り返しの事象を表す場合、ナガラとテは置き換えられる(仁田 1995)。この場合、ナガラ・テ節は反復の局面を表す。
- ③従属節の動詞が維持の局面をもつ主体変化動詞の場合、ナガラとテは置き換えることができる。この場合、ナガラ・テ節は結果維持の局面を表す。
- ④「主体動作動詞+テ」のテ節は動きをひとまとまりのものと捉える完成性を表し、通常継起性を表す。この場合、テとナガラは置き換えられない。
- ⑤従属節の動詞が維持の局面をもつ客体変化動詞の場合、テは使えるが、ナガラは使うことができない。テ節は「主体の様態的あり方」の度合いが低くても使用可能だが、ナガラは使えないことが、その理由である。
- ⑥主節の動作とナガラ・テ節の動作の一体化の度合いが高くなるにしたがい、テは使えても、ナガラは使えなくなる。

①～④は、付帯状況ナガラ節は、動作継続の局面か、結果継続を維持する局面を表すという条件に見合うものである。ナガラ節、テ節が反復あるいは結果継続を表す場合、置き換えることができるが、ナガラ節が動作継続を表す場合は、置き換えることができない。

ナガラ節同様、テ節のアスペクト的特徴と、テ節の用法は相関している。テ節が完成性を表せばテ節は継起の意味となり、反復、結果継続、内的状態動詞の継続を表せば、付帯状況となる。同じ付帯状況の用法でも、ナガラ節とは異なる使用条件がある。ナガラ節が動作継続の局面を表

す場合、ナガラ節は付帯状況の意味を表すが、付帯状況テ節に主体動作動詞の動作継続の局面は現れない。

このように、従属節のアスペクト的特徴は、表現形式の意味、用法と相関しているが、表現形式ごとに「アスペクト的特徴」と「意味・用法」の組み合わせは異なる。また、表現形式ごとに、共起する動詞のどのような動きの局面を取り出すのかも異なる。例えば、「食べる」のような主体動作動詞の場合、「食べテ」はひとまとまりと捉えられ、意味・用法は継起となる。一方「食べナガラ」は動作継続の局面が捉えられ、付帯状況を表す。

⑤⑥はナガラ・テ節のアスペクト的性質に起因するものではなく、語用論的な条件であり、付帯状況ナガラの用法を定義する上で、重要な要素である。⑤⑥から、付帯状況ナガラ節が表す事態は、主体全体に関わる状況であること、加えて、主節の事態とナガラ節の事態は時間的同時性を有するが、一体化したものではなく、独立性を保っていなければならないことが、確認された。「一体化」については、想定される文脈によって、その度合いが高くなったり低くなったりすることがあり、「一体化」の度合いが高いと判断された場合、ナガラの許容度は低くなる。

従属節の研究には、このような語用論的使用条件の分析というアプローチとアスペクト的特徴からの分析といった、二つのアプローチが必要であると考えられる。

第5章では「日本語学習者作文コーパス」を利用してナガラの文法的ふるまいについて分析を試みたが、学習者の母語の干渉といった観点からの分析はできなかった。今後は、中国語、韓国語といった、学習者の母語との対照研究もふまえ、さらに考察を深めていきたい。

## 第6章 限界動詞の運動局面の焦点化

動詞が表す運動を、通常われわれは抽象化し、頭の中の辞書に格納している。それを、現実世界を描写する際に取り出し、他の表現と組み合わせることにより、個別の具体的な事態として表現することができる。動きの特徴として限界性を持つ動詞でも、組み合わせられる表現によっては、運動の継続部分が取り出されることもある。

「傾く」という動詞を例に考えると、特別な文脈がなければ、「傾いている」は「傾いた後、その結果が継続している」という結果継続を表す。しかし、「徐々に」や「ゆっくりと」を付加すると「徐々に傾いた」のように、「傾く」という運動の継続局面をとらえ、「傾きはじめた」のように「～ハジメル」という補助動詞を付加すると、運動の局面でもなく、結果継続の局面でもなく、開始限界の局面が取り出される。これらは、すべて「傾く」という運動が展開する際に表れる局面である。

一方、「(電気が)つく」は「電気がついている」で結果継続を表す点では「傾く」と同じであるが、「徐々に電気がついた」は、停電に見舞われた大都市に電気が復旧するさまを、俯瞰的に表現するように、多回的な運動の連鎖を継続的にとらえる場合には自然だが、1回の運動として捉える場合、「体育館の水銀灯のように時間をかけて明るくなるタイプの電灯」という文脈を想定しても、不自然な文である<sup>28</sup>。「(電気が)つきハジメタ」も同様に、運動の連鎖が始まったことを表す。これは、「(電気が)つく」という動詞に、運動継続や、運動開始の局面がないからだ。

運動継続や、運動開始の局面がない動詞に、「徐々に・ゆっくり」や「～ハジメル」を付加すると、多回的な運動の連鎖という文脈が与えられ、そうすることで、「徐々に・ゆっくり」や「～ハジメル」の意味が実現する。言い換えれば、「徐々に・ゆっくり」や「～ハジメル」という意味が表れるには、運動継続や運動開始の局面を作り出す必要があり、これは、「徐々に・ゆっくり」「～ハジメル」が表す意味概念と、「(電気が)つく」が表す意味概念を矛盾なく結びつけるための操作である。

付帯状況ナガラでは、ナガラ節は「動的事態を表す」という性質を持ち、幅のある運動の局面を表すことが求められる。運動の局面を焦点化するためには、副詞を補ったり、時間を引きのばすような文脈を設定したりする必要がある。(1)の文を見てみよう。

- (1) a. その車は、崖から落ちながら炎上した。
- b. ??? 太郎は、崖から落ちながら、けがをした。
- c. ??太郎は、10メートルの崖から落ちながら、けがをした。
- d. 太郎は、10メートルの崖から落ちながら、あちこちけがをした。

(1) a は映画などで、見たことのある場面で、重い車が崖から落ちる場面はスローモーションのよ

---

<sup>28</sup> 「体育館の電灯が徐々に明るくなった」のように、別の動詞でしか、この事態は表すことができない。

うにも見え、「落ちる」は幅を持った運動の局面として捉えられる。

(1)bは、これだけでは不自然な文と捉えられるが、(1)cのように、「落ちる」という運動に時間的幅を持たせたり、(1)dのように、主節の「けがをする」がくりかえされるという文脈を挿入し、「落ちる」に過程性を持たせることで、運動継続の局面を想起することができる。

これらのことから、ナガラも「ゆっくり・徐々に」や「～ハジメル」と同様、テイル形式で通常取り出される運動の局面ではない部分を、焦点化することで付帯状況ナガラに必要な運動継続や運動開始の局面をとり出しているといえる。

このような操作は他の表現形式にも見られる。「動詞＋ヤスイ／ニクイ」という表現形式を見てみよう。ヤスイ・ニクイは動詞に接続して、次のような意味を表す。

#### [行為遂行の難易]

- ①a. 字が小さくて読みニクイ。
- b. 魚は骨が多くて食べにくい。
- c. (茶室は)入り口が小さくて入りニクイ

#### [心理的な要因による行為遂行の難易]

- ②a. きょう授業に出なかったので、先生の研究室に行きニクイ。
- b. みんなが残業しているので、仕事が終わっていても定時には帰りニクイ。
- c. (昨日友達とけんかをしたので)今日は教室に入りニクイ。

#### [傾向性の大小]

- ③a. この季節、風邪をひきヤスイので、気をつけてください。
- b. 強化プラスチックなので、傷がつきニクイ。

ヤスイ・ニクイには三つの意味用法があるがこれらの意味の実現は、動詞の意志性の有無と共に、動詞のアスペクト的意味と相関している。

①a、b、cは動作の継続の局面における、行為の遂行の難易を述べる用法である。②a、b、cの動詞は継続性ではなく、完成性を表しており、「行く、帰る、入る」という動作は現実世界で実現していなくとも、概念化されており、それを行う場合に生じる心理的な要因によって、行為の成立が難しい、または易しいことを述べる文である。

③a、bの動詞は無意志動詞で、出来事をひとまとまりのものと捉える完成性を表している。③aは「風邪をひく人／回数が、多い」とも言い換えられ、多回性を含意している。「傾向性の大小」という用法は動詞の語彙アスペクトより、意志性が大きく作用する用法で、「風邪をひく」「傷がつく」のような限界動詞も、「雨が降る」のような非限界動詞も、運動継続の局面ではなく、ひとつひとつの運動をひとまとまりととらえ、その実現の回数が、多い(ヤスイ)か、少ない(ニクイ)かを表す。

語彙アスペクトより、動詞の意志性が意味用法に優先的に関わるといのが、「ヤスイ・ニクイ」の特徴であるが、それでも、各用法とアスペクトの特徴は常に相関している。西鶴(2003)では、「動

詞＋ヤスイ／ニクイ」の意味用法と、動詞の意志性、表されるアスペクト的特徴について、表 6-1 のようにまとめている。

表 6-1 「～ヤスイ」「～ニクイ」と「動詞の意志性」「アスペクト」の関係 西鶴(2003)

	動詞の意志性	アスペクト
1. 行為遂行の難易	意志動詞	継続相の動作継続
2. 心理的な要因による行為遂行の難易	意志動詞	完成相
3. 傾向性の大小	無意志動詞	完成相

表 6-1 から、表す事態が、動詞の動作継続の部分の実現のしかたなのか、運動をひとまとまりととらえ、運動全体の成立を問題としているかで、ヤスイ・ニクイの意味が規定されていることがわかる。「行為遂行の難易」という意味が実現するためには、行為遂行の過程が取り出されなければならないが、発生の頻度を問題にする表現に、継続の局面は不要で、完成性のみが求められる。つまり、動詞＋ヤスイ・ニクイの用法とアスペクト的特徴は完全に相関しており、そうでなければ、各用法の持つ意味は実現できない。

「行為遂行の難易」という用法が実現するためには、動作継続の局面が取り出されなければならないわけだが、テイル形式が変化結果の継続を表す限界動詞の場合、「徐々に・ゆっくり」で見られたような、動作継続の部分に焦点化するような操作が行われるだろうか。

ヤスイ・ニクイの「行為遂行の難易」を表す用法①c を見ると、限界動詞である「入る」では、「入る」という動詞の動作進行の局面が、時間的な幅を持ったものとして取り出されている。つまり「外から中に入る動作」という、運動の局面が焦点化されていると考えられる。

しかし「行く、帰る」のような動詞では、このような操作は見られない。「行きやすい」「帰りにくい」は「心理的な要因による行為遂行の難易」を意味し、常に完成性をあらわす。例えば学校から家まで、石がごろごろと転がっていて、道も寸断されているというような文脈を想定しても、「学校に行きにくい」「家に帰りにくい」とは言えず、「歩きにくい」「通りにくい」のように継続の局面を表すことのできる、非限界動詞が使われる。

このことから、「ヤスイ・ニクイ」では「入る」のような、動作継続の局面を持つ動詞の場合は、これを焦点化し「行為遂行の難易」の意味を実現することができるが、「行く、帰る」については動作継続の局面を取り出すことができず、行為遂行の難易を表すことができないということになる。

では、ナガラについてはどうだろう。「ヤスイ・ニクイ」で運動の局面が焦点化できなかった「行く、帰る」について見てみよう。

- (2)a. ??? 学校に行きながら、英単語を覚えた。
- b. 学校に行きながら、幼い弟の世話をした。
- c. ??? うちに帰りナガラ友達と話した。

(2)a, c は「学校に行く途中で」「うちに帰る途中で」という意味に解することが難しく、「ヤスイ・ニクイ」同様、動作継続の局面を取り出すことができない。しかし、(2)b は「行く」を何度もくりかえされる長期活動と捉えることで、付帯状況が成立する。これは、ナガラが取り出す運動の局面には反復という局面が含まれるためである。

一方、「ゆっくり行く」「ゆっくり帰る」が可能なことからわかるように、「ゆっくり」は「行く・帰る」の動作継続の局面を取り出すことができる。ナガラやヤスイ・ニクイは、「ゆっくり・徐々に」のように、強くアスペクトを規定するという性質はない。

しかし、ナガラ節や、「動詞＋ヤスイ・ニクイ」のアスペクト的特徴は、それぞれの用法と関連しており、文脈の情報によって、各用法に対応するナガラ節のアスペクト的特徴が規定される。ナガラでは、「文脈」が動作継続・変化結果維持・反復というアスペクト的特徴を要求すれば、運動の局面を焦点化するという操作が行われ、付帯状況の用法となる。そして、操作を行っても、継続・変化結果維持・反復という局面が取り出されない場合、その文は不適格な文として扱われる。複数の用法を持つ、ヤスイ・ニクイとナガラは、取り出すことのできる運動の局面は異なるが、それぞれの意味用法とアスペクト的特徴が関連しているという点では、共通している。

もちろん、限界動詞の語彙的意味、特徴を、最もよく表すのは、テイルが表す「結果継続の局面」であることを忘れてはならない<sup>29</sup>。動詞が表しうる動き全体の中から、最も特徴的な部分を取り出すのは容易だが、そうでない部分を取り出すには、先に述べたような、操作が必要である。「徐々に」のようなアスペクトを強く規定する副詞は直接動詞に働きかけることができるが、ナガラの場合、様々な状況を設定する必要があり、それでも、動詞の性質によっては、文として不適格であると判断されることもある。ナガラは「ゆっくり」のように、強い規定力はないため、人によって、世代によって、経験によって、方言によって捉え方が異なることが予測される。

第1章で指摘したように、文法カテゴリーの中で、テンスや肯定・否定に関しては、人によって捉え方が異なるという現象は見られないが、アスペクトに関しては、異なる捉え方をする場合がある。本研究の中で何度も出てきた「座りナガラ」は、「座ったママ」の状態なのか、「座る」という動作をしている途中なのかという問題は、「座る」に結果維持の局面を認めるかどうかという問題につながっていた。「座る」という、きわめて基本的な動詞に関して、アスペクトの捉え方が異なるのは、「文脈」の設定という方法でしか、アスペクト性を操作できないというナガラの性質によるものではないだろうか<sup>30</sup>。

第6章では、限界動詞の運動局面の焦点化という観点から「徐々に」「～はじめる」「ヤスイ・ニクイ」「ナガラ」について考察した。ヤスイ・ニクイとナガラは、動詞のどの局面を取り出すのかという点では違いが見られるが、それぞれの意味用法とアスペクト的特徴が関連しているという点で、共通

<sup>29</sup> 金水(2000 p.23)はテイルが表す局面は、その動詞が表す出来事を最も強く特徴づける局面であると指摘している。

<sup>30</sup> ナガラとよく似た用法を持つ表現形式に「～ツツ」があるが、「座りツツ」はつねに、動作継続の局面を表す。

している。

限界動詞の運動の局面を焦点化する機能そのものを、ナガラやヤスイ・ニクイは直接持ち合わせていないが、文脈によってアスペクト的特徴が規定され、その結果、限界動詞の運動の局面の焦点化がおこる。限界動詞の運動の局面の焦点化は「状況の設定」によって行われるため、アスペクト認識に個人差が生じるという現象が起こると考えられる。

## 第7章 結 論

### 7.1 ナガラ節のアスペクト的特徴と意味の関連

本研究では、従属節の持つアスペクト的特徴と、従属節の意味との関連性について分析を行い、ナガラ、テのように、複数の意味用法を持つ接続形式において、ナガラ節、テ節のアスペクト的特徴が、意味の成立と関連していることを主張した

アスペクトは「出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違」を表す文法的カテゴリーである。従来、日本語のアスペクト研究は、スルーシテイルといった形態論的な対立に基づくアスペクトの意味の対立を中心に研究が進められてきた。アスペクト研究のもう一つの流れは、共起する副詞成分、補助動詞などによって取り出される運動の局面に着目し、動詞が語彙的に持つ語彙アスペクトについて分析するというものである。幅をもった時間を表す副詞成分との共起の可否による動詞分類も行われている。

このようなアスペクト研究の流れの中で、本研究では、スルーシテイルの形態的対立を伴わない接続形式で構成される従属節の、アスペクトの意味を分析したという点に特徴がある。動詞が語彙的にもともと持っているアスペクト的特徴の中から、文脈の中で取り出される運動の局面について言及し、これと、従属節の意味との関連を明らかにしている。

具体的には、まず、「付帯状況」を表すナガラと「逆接」を表すナガラについて分析した。「付帯状況」ナガラ節は「動作継続・変化結果の維持・反復」というアスペクト的性質を持つ。「付帯状況」という用法は、「主節の事態が成立する時に、同時に付随的に成立する同じ主体の状態・状況」を表す。この要件を満たすために、ナガラ節と主節のタクシスは「同時」でなければならない。「同時性」というタクシスを表すのは、「継続性」である。そして、「継続性」を表すには「時間の幅」が必要となる。これらの条件を満たすのが、「動作継続・変化結果の維持・反復」というアスペクト性である。

ただし、「変化結果の継続」というアスペクト性は「付帯状況」ナガラ節には現れない。これは「付帯状況」ナガラの「動的場面を描く」という制限によるものである。変化結果の維持の局面では、「持続的な動きの中で「動きの結果の保存が主体的に行われる(森山 1988)」」。典型的な維持の局面は、変化結果を保持するためにエネルギーの注入が行われる、動的な場面であると解釈される。一方、「変化結果の継続」は非動的な場面で、このような非動的場面では、付帯状況ナガラは現れない。

一方、「逆接」ナガラ節は「パーフェクト」というアスペクト的特徴をもつ。パーフェクトの特徴は、「完成性+設定時点まで効力の持続」である。パーフェクトが成立するためには、ナガラ節は主節に先行して完了しており、その効力が、主節成立時点まで続いていなければならない。

パーフェクトには動作パーフェクトと状態パーフェクトがある。動作パーフェクトについては、限界動詞も非限界動詞も動作パーフェクトを表すことができる。ただし、非限界動詞が動作パーフェクトを表すには、動作の限界点を設定するなど完成性を有している必要がある。状態パーフェクトを表すのは限界動詞の中で「変化結果の継続」を表す動詞である。スルーシテイル形式でアスペ

ク対立をもたない動詞も逆接ナガラ節を構成することができる。

ナガラ節のAspectとタクシス、用法、特徴についてまとめると表 7-1 のようになる。

表 7-1 ナガラ節のAspectとタクシス

	付帯状況ナガラ	逆接ナガラ
Aspect的特徴	・動作の継続 ・変化結果の維持	・パーフェクト
ナガラ節の動詞	・非限界動詞 ・変化結果の維持を語彙的に持つ動詞	・パーフェクト: 全ての動詞 ・スルーシテイルの形式でAspect対立を持たない動詞
ナガラ節と主節の時間的前後関係 (タクシス)	同時	先行: (ナガラ節の動作/変化の終了は主節の出来事に先行して起こる。)
エネルギーの供給	必要	不要
場面	動的場面	非動的場面

ところで、ナガラ文には「チョコレートを食べナガラやせたいとこぼす」のように、「付帯状況」とも「逆接」とも解釈できると言われてきた文がある。これについて本研究では、ナガラ節のAspect的特徴からの分析を行った。

「付帯状況」ナガラが成立するためには、ナガラ節は動作の継続を表し、主節と「同じ場所」「同じ時間」という条件を満たす必要がある。「付帯状況」とは、「主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況」であるが、主節と従属節が順接の意味関係か、逆接の意味関係かを規定するものではない。このような「付帯状況」ナガラが、偶然、文脈的に逆接の意味を帯びてしまった文について、本研究は「文脈的逆接」と呼び、構文的に常に逆接の意味を要求する「構文的逆接」ナガラと区別する。

「チョコレートを食べナガラやせたいとこぼす」の「食べる」のAspect的特徴が継続であれば、「食べる」と「やせたいとこぼす」は同時に行われた動作で、この場合、ナガラは付帯状況を表す。ただし、主節とナガラ節が矛盾するため、逆接の意味を帯びており、このような逆接を「文脈的逆接」と呼ぶ。

一方、「逆接」ナガラの場合、ナガラ節の動作は完了し、その効力が持続しているため、「効力の持続」と主節の動作は共存しているが、場所は同じでなくともかまわない。「昨日、家でチョコレートを食べた。今日、会社でやせたいとこぼす」のような事態を表す場合、ナガラ節はパーフェクトであり、「構文的逆接」と解釈される。

文脈的逆接と構文的逆接についてまとめると、図 7-1 のようになる。

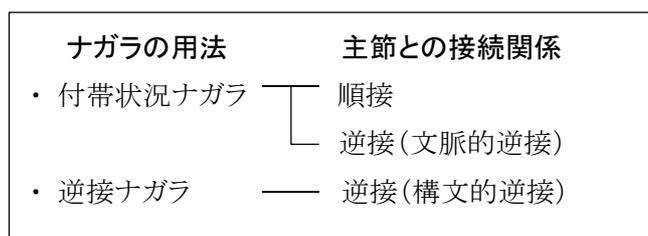


図 7-1 文脈的逆接と構文的逆接(図 3-1 再掲)

「付帯状況」ナガラと「逆接」ナガラは、南(1974)の従属節の階層性という観点からの分類で、「付帯状況」ナガラは A 類、「逆接」ナガラは B 類と、異なる階層に分類されているほか、「サエ」や「ハ」による焦点化のテストでは、「付帯状況」ナガラはサエによって焦点化されるが、「逆接」ナガラは焦点化されないなど、構造的に異なることが指摘されている。このことから、ナガラナガラの用法の違いが意味の面からの区別だけでは十分ではないことがわかる。

ナガラ文は、主節とナガラ節の時間的先後関係から、「付帯状況」か「逆接」かという用法が確定し、「付帯状況」であればナガラ節は「動作継続・結果維持・反復」性を表し、「逆接」であればナガラ節は「パーフェクト」性を表す。アスペクト的特徴と、表される意味は常に相関し互いが互いを規定していると考えられる。

## 7.2 アスペクト的特徴と意味の相関

従属節の意味とアスペクト的特徴の相関は、テ節にも見られる。「笑って答えた」のように、テ節の動詞が「動作継続・結果継続維持・反復」というアスペクト性を持つとき、テ節は「付帯状況」を表すが、「顔を洗って、ごはんを食べる」のような完成性を持つと、継起を表す。アスペクトと意味の関係は表裏一体で、テ節が完成というアスペクト的特徴を持っていない場合、継起の意味は成立しないし、継起の用法が成立するためにはテ節は完成でなければならない。

テ節のアスペクト的特徴は、テ節の動詞の種類と関係している。テ節動詞が内的情態動詞や、心の動きを表す外的態度動詞、表情を表す動作<sup>31</sup>の場合、また、主節が移動動詞の場合<sup>32</sup>、テ節は継続を表す。テ節動詞がこれ以外の主体動作動詞の場合、反復のような文脈の設定がないかぎり、「顔を洗って、ごはんを食べる」「問題を読んで、答えを書く」のように継起性が現れる。「付帯状況」を表すテ節において、「変化結果維持」というアスペクト的特徴を語彙的に持っている動詞は、「維持」の局面を表し、「立って飲んだ」のように「付帯状況」節を構成することができる。このような「変化結果維持」の局面を持つ動詞には、「握る、持つ」や「(顔を)向ける、もたれる」など姿勢

<sup>31</sup> 仁田(1995)は「びくびくする、おどおどする」を外的態度動詞、「げげんな顔をする、沈痛な表情を浮かべる」などを表情動作と呼んでいる。

<sup>32</sup> 吉永(2008 p.37)に、「主節が「行く、渡る、降りる」など移動動詞である場合、テ節動詞は中核的意味である移動の様態のみを表し、付帯状況になる。」とあるように、「歩いて行く」はテ節が主体動作動詞で継続を表す。

を表すものが多い。このように、動詞が語彙的に持っているアスペクト的特徴がテ節の意味の成立、把握に大きく関係していることがわかる。

ナガラとテはナガラ節、テ節が「心的状態」を表す場合や、維持の局面を持つ主体変化動詞の場合、置き換えることができるが、ナガラ節、テ節が主体動作動詞の場合、置き換えることがむずかしい。「主体動作動詞+テ」では特別な文脈がない限り、「洗って」「読んで」は完成性を表し、「洗って食べた」「読んで答えた」のような継起性を表すが、「洗いナガラ」「食べナガラ」は付帯状況文では継続をあらわすため、置き換えることができないのである。ナガラ節とテ節のアスペクト的特徴と、用法についてまとめたものが、表 7-2 である。

表 7-2 動詞の種類とテ節、ナガラ節のアスペクト的特徴

動詞の種類		テ節のアスペクト的特徴と用法	ナガラ節のアスペクト的特徴と用法
限界動詞	維持の局面を持たない動詞	完成:継起	パーフェクト:逆接
	維持の局面を持つ動詞	維持:付帯状況	維持:付帯状況 パーフェクト:逆接
非限界動詞	内的情態動詞		
	外的態度動詞 表情を表す動作	動作継続:付帯状況	動作継続:付帯状況
	上記以外の 主体動作動詞	完成:継起	動作継続:付帯状況 パーフェクト:逆接

このように、テとナガラでは動詞に接続した場合、取り出される動詞の局面は異なり、意味、用法も異なる。接続形式によって取り出されるアスペクト的特徴は、その形式ごとに異なるが、取り出される局面が、動詞の種類によって限定されていること、アスペクト的特徴と、意味、用法が関連しているという点については、共通しているといえる。

従属節ではないが、「行為遂行の難易」を表す「ヤスイ・ニクイ」という表現形式でも、アスペクト的特徴と意味用法が関連する。「ヤスイ・ニクイ」には 3 つの用法があるが、「行為遂行の難易」を表す場合、動作の継続が取り出され、「心理的な要因による行為遂行の難易」と「傾向性の大小」を表す場合、完成性が求められる。「ヤスイ・ニクイ」においても、その意味が実現するためには、特定のアスペクト的特徴が指定されているといえる。

表現形式の意味の実現のために必要なアスペクト的特徴を表すために、テイル形式では取り出されない運動の局面を取り出すための操作が行われることがある。例えば、運動の局面を取り

出す表現形式の中には、「ゆっくり落ちた」のように、テイル形式では取り出されることのない動詞継続の局面を、スローモーションを見るように、といった心的な操作を駆使して、取り出すことで、「ゆっくり」の意味の実現を図る。本稿ではこれを運動の局面の焦点化と呼んだ。

付帯状況ナガラでも、「電話を切りナガラため息を一つついた」のように、非常に短い時間で成立する運動であっても、その運動の継続の局面を取り出すことができる。「行為遂行の難易」を表す「ヤスイ・ニクイ」という表現形式でも、「(茶室は)入り口が小さくて入りニクイ」のような場合は、結果の局面ではなく、運動の局面に焦点が当てられる。このような運動の局面の焦点化が起こるのは、それぞれの表現形式の意味が成立するためには、運動の継続という要素が必要だからだ。

しかし、どのような文脈を設定しても、運動の局面を取り出せない「死ぬ」のような動詞では、運動の局面の焦点化はおこらず、その場合不自然な文となる。動詞が語彙的に運動の局面を持たない動詞については、運動の局面の焦点化は起こらないのである。

### 7.3 アスペクト性認識の違い

動詞のテイル形式で表されるアスペクト的特徴に関して、日本語母語話者は、ほぼ共通したアスペクト性を認識するが、動詞＋ナガラのアスペクト性に関しては異なる場合がある。例えば「座っテイル」は「座った後の状態」を指すと認識するが、「座りナガラ」は、「座ったまま」なのか「立った状態から座る状態に変わる途中」なのか、判断が分かれる場合がある。

「座る」を変化結果の維持を表す動詞であると捉える人は、「座りナガラ」を「座ったまま」と認識するが、「座る」の動作進行の局面を想起する人は「座りナガラ」は「立っている状態から、腰を下ろすまでの変化進行の局面」と捉えるため、「座りナガラ挨拶をした」なら自然だが「座りナガラ話をした」は不自然であると認識する。このように、日本語母語話者の間でも、ナガラ節のアスペクト認識について、異なる場合がある。その要因の一つに「方言」の影響が考えられるのではないかという仮説をたて、調査を行った。

共通語のアスペクト対立がスル(完成)ーシテイル(継続)の2項対立であるのに対し、西日本方言ではスル(完成)ーシヨル(不完全)ーシトル(パーフェクト)の項で対立している。共通語で「ドアがあいテイル」は結果継続の局面を表すが、西日本方言では「ドアがあきヨル」で、変化が進行中であることを表し、「ドアがあいトル」では変化結果の継続(状態パーフェクト)を表す。

調査の結果、このような、変化進行の局面を表すことのできる表現形式をもつ西日本方言話者は、「座る、立つ、乗る」のような主体変化動詞について、ナガラ節や「～テルトコ」形式で、動作進行の局面を捉える傾向が強いが、変化進行の局面を表すことのできる表現形式をもたない東京方言話者は、結果継続と捉える傾向が強かった。

これは、「進行」を専用に表す有標の形式をもつ西日本方言話者は、専用の形式を持たない東京方言話者に比べて「進行」の局面を想起しやすいため、ナガラ節の動詞が主体変化動詞の場合でも「変化進行」の局面をとらえやすいのだと考えられる。

また、変化結果の維持を表さない限界動詞＋ナガラ節が付帯状況を表すには、反復、あるいはス

ローモーションで捉えたような、動きに幅を持たせるといった操作が必要となる。この「反復」や「スローモーション」という特徴が文脈からうまく想起されれば、継続性が捉えられ、付帯状況文として適格であると判断される。そして、このようなものが想起されない場合、継続性は捉えられず、付帯状況としては不適格な文と見なされる。

方言の影響、文脈の影響で、ナガラ節のAspect性の認識が異なる可能性があり、このためナガラ文の適格性に関する判断が異なることを確認したが、このような相違は、文法カテゴリーの肯否、テンスには見られないものである。

#### 7.4 今後の課題

Aspectに関わる問題を、動詞が本来持っている語彙Aspectと、文を構成する要素によって引き出される従属節のAspectという視点で、分析を進めてきた。語彙Aspectは、副詞や接続形式の特性によって、引き出されるAspectの局面が異なる。本研究では、ナガラ、テを中心に考察を進めたが、さらに、範囲を広げ、さまざまな表現形式について、分析を進める必要がある。

第6章でとりあげた「ヤスイ・ニクイ」は、用法を分類する第一のフィルターが動詞の意志性であり、動詞の語彙Aspectは第二のフィルターであった。このように、動詞の意味用法が実現するための条件は表現形式ごとに異なる。その中で、Aspect的特徴はどのように意味の成立に関わっているのかについて分析する必要がある。

また、各表現形式と動詞の共起関係を詳細に調べることで、動詞自体の語彙Aspectが特定される。語彙Aspectが特定されると、より具体的な動詞の分類が可能になると考える。表現形式が取り出す、動詞のAspect的特徴と、動詞の語彙Aspectの照合については、今後の大きな研究課題である。

加えて、本稿はナガラ節について述べたが、まだ明らかにされていない問題がある。一つは日本語教育の観点から、第5章で日本語学習者の誤用分析を行ったが、学習者の母語である中国語、韓国語との比較を行うことで、学習者の誤用についても、ナガラの特長についても、さらに検証を進めることができると考える。

さらに、Aspect認識の相違についても、調査項目を精査し、さらに、大規模な調査の必要性を感じている。方言、性別、年齢など、その要因について検証を進めたい。そして、このAspect認識の相違については、他の表現形式にも見られるのかについても注視していく必要がある。

これらの点については、今後の課題としたい。

熊本方言では

- ・雨の降りヨル（今、降っている）
- ・雨の降ットル（雨が降った後。今降っていないが地面が濡れている。）

のように、ヨル、トルを使います。

しかし、状況によっては同じ場面で、ヨル、トルを使う人もいます。

この調査では、ヨル、トルを熊本方言話者がどのように使っているかを調べます。

また、共通語の「～ているところだ」「～ながら」の使い方についても質問します。

あまり深く考えずに、直感的に判断して答えてください。よろしくお願いします。

I 下の例文を読んで、それが、どんな状況なのか、答えてください。○は、いくつ付けてもかまいません。迷ったときは△を書いてください。

(例) 雨の降りヨル。 (○) 雨が降っている最中。 (×) 雨が降り終わったあと。

雨の降ットル。 (×) 雨が降っている最中。雨が降りそうなとき。

(○) 雨が降り終わったあと。

(1) 服ば着ヨル。 ( ) 服を着るとい動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。  
( ) 服を着たあと、身に着けている状態。

服ば着トル。 ( ) 服を着るとい動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。

( ) 服を着たあと、身に着けている状態。

(2) 片付けヨル。 ( ) 片付けるとい動作をしている最中。まだ片付け終わっていない。

( ) 片付けるとい動作が終わったあと。

片付けトル。 ( ) 片付けるとい動作をしている最中。まだ片付け終わっていない。

( ) 片付けるとい動作が終わったあと。

(3) (子供の泥遊びを想像してください)

あん子は服ば汚しヨル。 ( ) 汚すとい動作をしている最中。

( ) 汚すとい動作が終わり、汚れたままの状態。

あん子は服ば汚しトル。 ( ) 汚すとい動作をしている最中。

( ) 汚すとい動作が終わり、汚れたままの状態。

(4) 座りヨル。 ( ) 座るとい動作をしている最中。まだ座り終わっていない。

( ) 腰かけた後、座ったままの状態。

座ットル。 ( ) 座るとい動作をしている最中。まだ座り終わっていない。

( ) 腰かけた後、座ったままの状態。

- (5) 立ちヨル。 ( ) 立ちあがるという動作をしている最中。まだ立ちあがってはいない。  
\*例：膝の痛かけん、ゆっくり立ちヨル。
- 立ットル。 ( ) 立ちあがるという動作が終わり、立ったままの状態。
- (6) バスに乗りヨル。 ( ) 立ちあがるという動作をしている最中。まだ立ちあがってはいない。
- バスに乗ットル。 ( ) 立ちあがるという動作が終わり、立ったままの状態。
- (6) バスに乗りヨル。 ( ) 乗りこむという動作をしている最中。まだ乗り終わっていない。
- バスに乗ットル。 ( ) 乗りこむという動作が終わり、バスの中にいる状態。
- (7) 自転車に乗りヨル。 ( ) 乗りこむという動作をしている最中。まだ乗り終わっていない。
- 自転車に乗ットル。 ( ) 乗りこむという動作が終わり、バスの中にいる状態。
- (7) 自転車に乗りヨル。 ( ) 自転車にまたがる動作をしている最中。まだこぎだしていない。
- 自転車に乗ットル。 ( ) 自転車にまたがる動作をしている最中。まだこぎだしていない。
- (8) 木の枝ば握りヨル。 ( ) 自転車をこいでいる状態。
- 木の枝ば握ットル。 ( ) 自転車をこいでいる状態。
- (8) 木の枝ば握りヨル。 ( ) 5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。
- 木の枝ば握ットル。 ( ) 握った後の状態。枝を握ったままの状態。
- (9) よりかかりヨル。 ( ) 5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。
- よりかかットル。 ( ) 握った後の状態。枝を握ったままの状態。
- (9) よりかかりヨル。 ( ) よりかかる動作をしている途中。まだよりかかり終わっていない。
- よりかかットル。 ( ) よりかかるという動作が終わった後。よりかかったままの状態。
- (10) ぶらさがりヨル。 ( ) よりかかるという動作をしている最中。まだよりかかり終わっていない。
- ぶらさがットル。 ( ) よりかかるという動作が終わった後。よりかかったままの状態。
- (10) ぶらさがりヨル。 ( ) ぶらさがるとい動作をしている途中。まだぶらさがり終わっていない。
- ぶらさがットル。 ( ) ぶらさがるとい動作が終わった後の状態。ぶらさがったままの状態。
- ぶらさがットル。 ( ) ぶらさがるとい動作をしている途中。まだぶらさがり終わっていない。

( ) ぶらさがるとい動作が終わった後。  
ぶらさがったままの状態。

Ⅳ 電話で「今何してる？」と聞かれた時の答え、または、イラストなどを見て何が書いてあるか、誰かに説明する場面を想定してください。「今～してる」という文を言ったとき、どんな状況をさしていますか。

○は、いくつ付けてもかまいません。迷ったときは△を書いてください。

(例) 今、雨が降ってるとこ。 (○) 今、雨が降っている最中。

(×) 雨が降り終わったあと。

- (1) 今、服、着てるとこ。 ( ) 服を着るとい動作をしている最中。  
まだ服を着終わっていない。  
( ) 服を着たあと、身につけている状態。
- (2) 今、片付けてるとこ。 ( ) 片付けるとい動作をしている最中。  
まだ片付け終わっていない  
( ) 片付けるとい動作が終わったあとの状態。
- (3) 今、服、汚してるとこ。 ( ) 汚すとい動作をしている最中。  
( ) 汚すとい動作が終わり、汚れたままの状態。
- (4) 今、座ってるとこ。 ( ) 座るとい動作をしている最中。  
まだ座り終わっていない。  
( ) 腰かけた後、座ったままの状態。
- (5) 今、立ってるとこ。 ( ) 立ちあがるとい動作をしている最中。  
まだ立ちあがってはいない。  
( ) 立ちあがるとい動作が終わり、立ったままの状態。
- (6) 今、自転車に乗ってるとこ。 ( ) 自転車にまたがる動作をしている最中。  
まだこぎだしていない。  
( ) 自転車をこいでいる状態。
- (7) 今、バスに乗ってるとこ。 ( ) 乗りこむとい動作をしている最中。  
まだ乗り終わっていない。  
( ) 乗りこむとい動作が終わり、バスの中にいる状態。
- (8) 今、木の枝を握ってるとこ。 ( ) 5本の指を内側に徐々に動かしている最中。  
まだ握り終わっていない。  
( ) 握った後の状態。枝を握ったままの状態。
- (9) 今、よりかかるとこ。 ( ) よりかかる動作をしている途中。  
まだよりかかり終わっていない。  
( ) よりかるとい動作が終わった後。

よりかかったままの状態。

- (10) 今、ぶらさがってる。 ( ) ぶらさがるとい動作をしている途中。  
まだぶらさがり終わっていない。  
( ) ぶらさがるとい動作が終わった後。  
ぶらさがったままの状態。

#### Ⅳ

次の「～ながら」を使った文を読んでください。「～ながら」の部分は、どのような状況をさしていますか。○は、いくつ付けてもかまいません。迷ったときは△を書いてください。

例文がおかしいと思ったら、全部×をつけてください。

(この場合の「ながら」は二つの動作を同時に行なうという意味です。「～のに」に言い換えられるような逆接の意味ではありません。)

(例) ご飯をゆっくり食べながら、友達と話した。

- ( ○ ) 食べるという動作をしている最中。まだ食べ終わっていない。  
( × ) 食べたあと。

ドアを閉めながら、3時間部屋の中にいた。

- ( × ) 閉めるという動作をしている最中。まだ閉め終わっていない。  
( × ) 閉めたあと。

(1) 花子は服を着ながら、姉と話した。

- ( ) 服を着るとい動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。  
( ) 服を着たあと、身に着けている状態。

(2) 花子は服を着ながら、3時間接客をした。

- ( ) 服を着るとい動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。  
( ) 服を着たあと、身に着けている状態。

(3) 花子は急いで部屋を片付けながら、鼻歌を歌った。

- ( ) 片付けるという動作をしている最中。まだ片付け終わっていない  
( ) 片付けるという動作が終わったあと。

(4) 花子は片付けながら、そのきれいな部屋で横になった。

- ( ) 片付けるという動作をしている最中。まだ片付け終わっていない  
( ) 片付けるという動作が終わったあと。

(5) 太郎はシャツを汚しながら、チョコレートを食べた。

- ( ) 汚すという動作をしている最中。汚す動作は続いている。  
( ) 汚すという動作が終わり、汚れたままの状態。

(6) 太郎はシャツを汚しながら、東京行きの電車に乗った。

- ( ) 汚すという動作をしている最中。汚す動作は続いている。

- ( ) 汚すという動作が終わり、汚れたままの状態。
- (7) 花子はゆっくり座りながら、隣のテーブルを見た。
- ( ) 座るという動作をしている最中。まだ座り終わっていない。
- ( ) 腰かけた後、座ったままの状態。
- (8) 花子は座りながら、30分太郎を待った。
- ( ) 座るという動作をしている最中。まだ座り終わっていない。
- ( ) 腰かけた後、座ったままの状態。
- (9) 太郎はゆっくり立ちながら、隣のテーブルを見た。
- ( ) 立ちあがるという動作が終わり、立ったままの状態。
- ( ) 立つという動作が終わり、立ったままの状態。
- (10) 太郎は立ちながら、30分花子を待った。
- ( ) 立ちあがるという動作をしている最中。まだ立ちあがってはいない。
- ( ) 立つという動作が終わり、立ったままの状態。
- (11) 太郎はバスに乗りながら、「じゃあ、また」と言った。
- ( ) 乗りこむという動作をしている最中。まだ乗り終わっていない。
- ( ) 乗りこむという動作が終わり、バスの中にいる状態。
- (12) 太郎はバスに乗りながら、英単語を覚えた。
- ( ) 乗りこむという動作をしている最中。まだ乗り終わっていない。
- ( ) 乗りこむという動作が終わり、バスの中にいる状態。
- (13) 太郎は自転車に乗りながら、「じゃあ、また」と言った。
- ( ) 自転車にまたがる動作をしている最中。まだ、自転車をこいでいない。
- ( ) 自転車をこいでいる状態。
- (14) 太郎は自転車に乗りながら、英単語を覚えた。
- ( ) 自転車にまたがる動作をしている最中。まだ、自転車をこいでいない。
- ( ) 自転車をこいでいる状態。
- (15) 太郎はドアノブをゆっくりと握りながら、「夢かもしれない」と思った。
- ( ) 5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。
- ( ) 握った後の状態。ドアノブを握ったままの状態。
- (16) 太郎はお母さんの手を握りながらおにぎりを食べた。
- ( ) 5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。
- ( ) 握った後の状態。おにぎりを握ったままの状態。
- (17) 太郎は壁にゆっくりよりかかりながら、外を見た。
- ( ) よりかかる動作をしている途中。まだよりかかり終わっていない。
- ( ) よりかるとい動作が終わった後。よりかかったままの状態。

- (18) 太郎は壁によりかかりながら、しばらく外を見た。
- ( ) よりかかるという動作をしている途中。まだよりかかり終わっていない。
  - ( ) よりかかるという動作が終わった後。よりかかったままの状態。
- (19) 太郎は大きい木の枝に急いでぶらさがりながら、下を見た。
- ( ) ぶらさがるとい動作をしている途中。まだぶらさがり終わっていない。
  - ( ) ぶらさがるとい動作が終わった後。ぶらさがったままの状態。
- (20) 太郎は校庭の鉄棒にぶらさがりながら、静かに夕日を眺めた。
- ( ) ぶらさがるとい動作をしている途中。まだぶらさがり終わっていない。
  - ( ) ぶらさがるとい動作が終わった後の状態。ぶらさがったままの状態

ヨル・トル・テルトコ・ナガラ調査結果(熊本・高知・東京)														
Q1_1.1.1	服ば着ヨル。／服を着るという動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。						Q1_1.1.2	服ば着ヨル。／服を着たあと、身に着けている状態。						
	熊本		高知		東京			熊本		高知		東京		
		回答数	%	回答数	%			回答数	%	回答数	%			
	全体	90	100.0	90	100.0	-	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	
	1	○	90	100.0	88	97.8	1	○	4	4.4	4	4.4	-	-
	2	×	0	0.0	0	0.0	2	×	80	88.9	80	88.9	-	-
	3	△	0	0.0	2	2.2	3	△	6	6.7	6	6.7	-	-
Q1_1.2.1	服ば着トル。／服を着るという動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。						Q1_1.2.2	服ば着トル。／服を着たあと、身に着けている状態。						
	熊本		高知		東京			熊本		高知		東京		
		回答数	%	回答数	%			回答数	%	回答数	%			
	全体	90	100.0	90	100.0	-	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	
	1	○	14	15.6	2	2.2	1	○	86	95.6	88	97.8	-	-
	2	×	60	66.7	85	94.4	2	×	2	2.2	2	2.2	-	-
	3	△	16	17.8	3	3.3	3	△	2	2.2	0	0.0	-	-
Q1_2.1.1	片付けヨル。／片付けるという動作をしている最中。まだ片付け終わっていない。						Q1_2.1.2	片付けヨル。／片付けるという動作が終わったあと。						
	熊本		高知		東京			熊本		高知		東京		
		回答数	%	回答数	%			回答数	%	回答数	%			
	全体	90	100.0	90	100.0	-	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	
	1	○	90	100.0	89	98.9	1	○	0	0.0	0	0.0	-	-
	2	×	0	0.0	1	1.1	2	×	87	96.7	87	96.7	-	-
	3	△	0	0.0	0	0.0	3	△	3	3.3	3	3.3	-	-
Q1_2.2.1	片付けトル。／片付けるという動作をしている最中。まだ片付け終わっていない。						Q1_2.2.2	片付けトル。／片付けるという動作が終わったあと。						
	熊本		高知		東京			熊本		高知		東京		
		回答数	%	回答数	%			回答数	%	回答数	%			
	全体	90	100.0	90	100.0	-	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	
	1	○	40	44.4	7	7.8	1	○	62	68.9	81	90.0	-	-
	2	×	38	42.2	77	85.6	2	×	16	17.8	8	8.9	-	-
	3	△	12	13.3	6	6.7	3	△	12	13.3	1	1.1	-	-
Q1_3.1.1	(子供の泥遊びを想像してください)あん子は服ば汚しヨル。／汚すという動作をしている最中。						Q1_3.1.2	(子供の泥遊びを想像してください)あん子は服ば汚しヨル。／汚すという動作が終わり、汚れたままの状態。						
	熊本		高知		東京			熊本		高知		東京		
		回答数	%	回答数	%			回答数	%	回答数	%			
	全体	90	100.0	90	100.0	-	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	
	1	○	87	96.7	84	93.3	1	○	7	7.8	4	4.4	-	-
	2	×	1	1.1	2	2.2	2	×	74	82.2	79	87.8	-	-
	3	△	2	2.2	4	4.4	3	△	9	10.0	7	7.8	-	-
Q1_3.2.1	あん子は服ば汚しトル。／汚すという動作をしている最中。						Q1_3.2.2	あん子は服ば汚しトル。／汚すという動作が終わり、汚れたままの状態。						
	熊本		高知		東京			熊本		高知		東京		
		回答数	%	回答数	%			回答数	%	回答数	%			
	全体	90	100.0	90	100.0	-	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	
	1	○	19	21.1	4	4.4	1	○	86	95.6	87	96.7	-	-
	2	×	57	63.3	80	88.9	2	×	1	1.1	3	3.3	-	-
	3	△	14	15.6	6	6.7	3	△	3	3.3	0	0.0	-	-



Q1.7.1.1	自転車に乗りヨル。／自転車にまたがる動作をしている最中。まだこぎだしていない。	Q1.7.1.2	自転車に乗りヨル。／自転車をこいでいる状態。
	熊本	高知	東京
	回答数	回答数	回答数
	%	%	%
全体	90 100.0	90 100.0	- -
1 ○	83 92.2	69 76.7	- -
2 ×	2 2.2	9 10.0	- -
3 △	5 5.6	12 13.3	- -
Q1.7.2.1	自転車に乗トル。／自転車にまたがる動作をしている最中。まだこぎだしていない。	Q1.7.2.2	自転車に乗トル。／自転車をこいでいる状態。
	熊本	高知	東京
	回答数	回答数	回答数
	%	%	%
全体	90 100.0	90 100.0	- -
1 ○	20 22.2	14 15.6	- -
2 ×	56 62.2	68 75.6	- -
3 △	14 15.6	8 8.9	- -
Q1.8.1.1	木の枝ば握りヨル。／5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。	Q1.8.1.2	木の枝ば握りヨル。／握った後の状態。枝を握ったままの状態。
	熊本	高知	東京
	回答数	回答数	回答数
	%	%	%
全体	90 100.0	90 100.0	- -
1 ○	80 88.9	78 86.7	- -
2 ×	2 2.2	4 4.4	- -
3 △	8 8.9	8 8.9	- -
Q1.8.2.1	木の枝ば握トル。／5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。	Q1.8.2.2	木の枝ば握トル。／握った後の状態。枝を握ったままの状態。
	熊本	高知	東京
	回答数	回答数	回答数
	%	%	%
全体	90 100.0	90 100.0	- -
1 ○	8 8.9	5 5.6	- -
2 ×	71 78.9	83 92.2	- -
3 △	11 12.2	2 2.2	- -
Q1.9.1.1	よりかかりヨル。／よりかかる動作をしている途中。まだよりかかり終わっていない。	Q1.9.1.2	よりかかりヨル。／よりかかるという動作が終わった後。よりかかったままの状態。
	熊本	高知	東京
	回答数	回答数	回答数
	%	%	%
全体	90 100.0	90 100.0	- -
1 ○	81 90.0	81 90.0	- -
2 ×	1 1.1	2 2.2	- -
3 △	8 8.9	7 7.8	- -
Q1.9.2.1	よりかかトル。／よりかかる動作をしている途中。まだよりかかり終わっていない。	Q1.9.2.2	よりかかトル。／よりかかるという動作が終わった後。よりかかったままの状態。
	熊本	高知	東京
	回答数	回答数	回答数
	%	%	%
全体	90 100.0	90 100.0	- -
1 ○	11 12.2	4 4.4	- -
2 ×	69 76.7	84 93.3	- -
3 △	10 11.1	2 2.2	- -
	熊本	高知	東京
	回答数	回答数	回答数
	%	%	%
全体	90 100.0	90 100.0	- -
1 ○	88 97.8	89 98.9	- -
2 ×	1 1.1	1 1.1	- -
3 △	1 1.1	0 0.0	- -

Q1_10_1_1	ぶらさがりヨル。／ぶらさがるとい動作をしている途中。まだぶらさがり終わっていない。	Q1_10_1_2	ぶらさがりヨル。／ぶらさがるとい動作が終わった後の状態。ぶらさがったままの状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>77</td> <td>85.6</td> <td>78</td> <td>86.7</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>2</td> <td>2.2</td> <td>6</td> <td>6.7</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>11</td> <td>12.2</td> <td>6</td> <td>6.7</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	1 ○	77	85.6	78	86.7	-	-	2 ×	2	2.2	6	6.7	-	-	3 △	11	12.2	6	6.7	-	-	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>21</td> <td>23.3</td> <td>48</td> <td>53.3</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>51</td> <td>56.7</td> <td>36</td> <td>40.0</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>18</td> <td>20.0</td> <td>6</td> <td>6.7</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	1 ○	21	23.3	48	53.3	-	-	2 ×	51	56.7	36	40.0	-	-	3 △	18	20.0	6	6.7	-	-
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	-	-																																																																																
1 ○	77	85.6	78	86.7	-	-																																																																																
2 ×	2	2.2	6	6.7	-	-																																																																																
3 △	11	12.2	6	6.7	-	-																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	-	-																																																																																
1 ○	21	23.3	48	53.3	-	-																																																																																
2 ×	51	56.7	36	40.0	-	-																																																																																
3 △	18	20.0	6	6.7	-	-																																																																																
Q1_10_2_1	ぶらさがつトル。／ぶらさがるとい動作をしている途中。まだぶらさがり終わっていない。	Q1_10_2_2	ぶらさがつトル。／ぶらさがるとい動作が終わった後の状態。ぶらさがったままの状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>13</td> <td>14.4</td> <td>4</td> <td>4.4</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>68</td> <td>75.6</td> <td>85</td> <td>94.4</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>9</td> <td>10.0</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	1 ○	13	14.4	4	4.4	-	-	2 ×	68	75.6	85	94.4	-	-	3 △	9	10.0	1	1.1	-	-	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>87</td> <td>96.7</td> <td>89</td> <td>98.9</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>2</td> <td>2.2</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	-	-	1 ○	87	96.7	89	98.9	-	-	2 ×	2	2.2	1	1.1	-	-	3 △	1	1.1	0	0.0	-	-
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	-	-																																																																																
1 ○	13	14.4	4	4.4	-	-																																																																																
2 ×	68	75.6	85	94.4	-	-																																																																																
3 △	9	10.0	1	1.1	-	-																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	-	-																																																																																
1 ○	87	96.7	89	98.9	-	-																																																																																
2 ×	2	2.2	1	1.1	-	-																																																																																
3 △	1	1.1	0	0.0	-	-																																																																																
Q2_1_1	今、服、着てるとこ。／服を着るとい動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。	Q2_1_2	今、服、着てるとこ。／服を着たあと、身につけるけている状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>89</td> <td>98.9</td> <td>86</td> <td>95.6</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>3</td> <td>3.3</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>1</td> <td>1.1</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	90	100.0	89	98.9	86	95.6	2 ×	0	0.0	1	1.1	3	3.3	3 △	0	0.0	0	0.0	1	1.1	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>4</td> <td>4.4</td> <td>4</td> <td>4.4</td> <td>3</td> <td>3.3</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>83</td> <td>92.2</td> <td>83</td> <td>92.2</td> <td>80</td> <td>88.9</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>7</td> <td>7.8</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	4	4.4	4	4.4	3	3.3	2 ×	83	92.2	83	92.2	80	88.9	3 △	3	3.3	3	3.3	7	7.8
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	90	100.0	89	98.9	86	95.6																																																																																
2 ×	0	0.0	1	1.1	3	3.3																																																																																
3 △	0	0.0	0	0.0	1	1.1																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	4	4.4	4	4.4	3	3.3																																																																																
2 ×	83	92.2	83	92.2	80	88.9																																																																																
3 △	3	3.3	3	3.3	7	7.8																																																																																
Q2_2_1	今、片付けてるとこ。／片付けるとい動作をしている最中。まだ片付け終わっていない	Q2_2_2	今、片付けてるとこ。／片付けるとい動作が終わったあとの状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>86</td> <td>95.6</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>4</td> <td>4.4</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>0</td> <td>0.0</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	90	100.0	90	100.0	86	95.6	2 ×	0	0.0	0	0.0	4	4.4	3 △	0	0.0	0	0.0	0	0.0	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>2</td> <td>2.2</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>86</td> <td>95.6</td> <td>89</td> <td>98.9</td> <td>84</td> <td>93.3</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>4</td> <td>4.4</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	1	1.1	1	1.1	2	2.2	2 ×	86	95.6	89	98.9	84	93.3	3 △	3	3.3	0	0.0	4	4.4
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	90	100.0	90	100.0	86	95.6																																																																																
2 ×	0	0.0	0	0.0	4	4.4																																																																																
3 △	0	0.0	0	0.0	0	0.0																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	1	1.1	1	1.1	2	2.2																																																																																
2 ×	86	95.6	89	98.9	84	93.3																																																																																
3 △	3	3.3	0	0.0	4	4.4																																																																																
Q2_3_1	今、服、汚してるとこ。／汚すとい動作をしている最中。	Q2_3_2	今、服、汚してるとこ。／汚すとい動作が終わり、汚れたままの状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>87</td> <td>96.7</td> <td>86</td> <td>95.6</td> <td>74</td> <td>82.2</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>11</td> <td>12.2</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>5</td> <td>5.6</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	87	96.7	86	95.6	74	82.2	2 ×	0	0.0	3	3.3	11	12.2	3 △	3	3.3	1	1.1	5	5.6	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>2</td> <td>2.2</td> <td>2</td> <td>2.2</td> <td>9</td> <td>10.0</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>83</td> <td>92.2</td> <td>84</td> <td>93.3</td> <td>72</td> <td>80.0</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>5</td> <td>5.6</td> <td>4</td> <td>4.4</td> <td>9</td> <td>10.0</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	2	2.2	2	2.2	9	10.0	2 ×	83	92.2	84	93.3	72	80.0	3 △	5	5.6	4	4.4	9	10.0
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	87	96.7	86	95.6	74	82.2																																																																																
2 ×	0	0.0	3	3.3	11	12.2																																																																																
3 △	3	3.3	1	1.1	5	5.6																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	2	2.2	2	2.2	9	10.0																																																																																
2 ×	83	92.2	84	93.3	72	80.0																																																																																
3 △	5	5.6	4	4.4	9	10.0																																																																																
Q2_4_1	今、座ってるとこ。／座るとい動作をしている最中。まだ座り終わっていない。	Q2_4_2	今、座ってるとこ。／腰かけたあと、座ったままの状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>70</td> <td>77.8</td> <td>67</td> <td>74.4</td> <td>31</td> <td>34.4</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>10</td> <td>11.1</td> <td>18</td> <td>20.0</td> <td>43</td> <td>47.8</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>10</td> <td>11.1</td> <td>5</td> <td>5.6</td> <td>16</td> <td>17.8</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	70	77.8	67	74.4	31	34.4	2 ×	10	11.1	18	20.0	43	47.8	3 △	10	11.1	5	5.6	16	17.8	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>43</td> <td>47.8</td> <td>53</td> <td>58.9</td> <td>70</td> <td>77.8</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>40</td> <td>44.4</td> <td>32</td> <td>35.6</td> <td>14</td> <td>15.6</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>7</td> <td>7.8</td> <td>5</td> <td>5.6</td> <td>6</td> <td>6.7</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	43	47.8	53	58.9	70	77.8	2 ×	40	44.4	32	35.6	14	15.6	3 △	7	7.8	5	5.6	6	6.7
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	70	77.8	67	74.4	31	34.4																																																																																
2 ×	10	11.1	18	20.0	43	47.8																																																																																
3 △	10	11.1	5	5.6	16	17.8																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	43	47.8	53	58.9	70	77.8																																																																																
2 ×	40	44.4	32	35.6	14	15.6																																																																																
3 △	7	7.8	5	5.6	6	6.7																																																																																



Q3_1.1	花子は服を着ながら、姉と話した。／服を着るという動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。	Q3_1.2	花子は服を着ながら、姉と話した。／服を着たあと、身に着けている状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>88</td> <td>97.8</td> <td>89</td> <td>98.9</td> <td>80</td> <td>88.9</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>8</td> <td>8.9</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>2</td> <td>2.2</td> <td>0</td> <td>0.0</td> <td>2</td> <td>2.2</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	88	97.8	89	98.9	80	88.9	2 ×	0	0.0	1	1.1	8	8.9	3 △	2	2.2	0	0.0	2	2.2	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>11</td> <td>12.2</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>81</td> <td>90.0</td> <td>82</td> <td>91.1</td> <td>73</td> <td>81.1</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>6</td> <td>6.7</td> <td>5</td> <td>5.6</td> <td>6</td> <td>6.7</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	3	3.3	3	3.3	11	12.2	2 ×	81	90.0	82	91.1	73	81.1	3 △	6	6.7	5	5.6	6	6.7
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	88	97.8	89	98.9	80	88.9																																																																																
2 ×	0	0.0	1	1.1	8	8.9																																																																																
3 △	2	2.2	0	0.0	2	2.2																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	3	3.3	3	3.3	11	12.2																																																																																
2 ×	81	90.0	82	91.1	73	81.1																																																																																
3 △	6	6.7	5	5.6	6	6.7																																																																																
Q3_2.1	花子は服を着ながら、3時間接客をした。／服を着るという動作をしている最中。まだ服を着終わっていない。	Q3_2.2	花子は服を着ながら、3時間接客をした。／服を着たあと、身に着けている状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>34</td> <td>37.8</td> <td>38</td> <td>42.2</td> <td>18</td> <td>20.0</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>40</td> <td>44.4</td> <td>47</td> <td>52.2</td> <td>66</td> <td>73.3</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>16</td> <td>17.8</td> <td>5</td> <td>5.6</td> <td>6</td> <td>6.7</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	34	37.8	38	42.2	18	20.0	2 ×	40	44.4	47	52.2	66	73.3	3 △	16	17.8	5	5.6	6	6.7	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>33</td> <td>36.7</td> <td>41</td> <td>45.6</td> <td>60</td> <td>66.7</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>40</td> <td>44.4</td> <td>46</td> <td>51.1</td> <td>25</td> <td>27.8</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>17</td> <td>18.9</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>5</td> <td>5.6</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	33	36.7	41	45.6	60	66.7	2 ×	40	44.4	46	51.1	25	27.8	3 △	17	18.9	3	3.3	5	5.6
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	34	37.8	38	42.2	18	20.0																																																																																
2 ×	40	44.4	47	52.2	66	73.3																																																																																
3 △	16	17.8	5	5.6	6	6.7																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	33	36.7	41	45.6	60	66.7																																																																																
2 ×	40	44.4	46	51.1	25	27.8																																																																																
3 △	17	18.9	3	3.3	5	5.6																																																																																
Q3_3.1	花子は急いで部屋を片付けながら、鼻歌を歌った。／片付けるという動作をしている最中。まだ片付け終わっていない。	Q3_3.2	花子は急いで部屋を片付けながら、鼻歌を歌った。／片付けるという動作が終わったあと。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>87</td> <td>96.7</td> <td>87</td> <td>96.7</td> <td>77</td> <td>85.6</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>2</td> <td>2.2</td> <td>2</td> <td>2.2</td> <td>10</td> <td>11.1</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>3</td> <td>3.3</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	87	96.7	87	96.7	77	85.6	2 ×	2	2.2	2	2.2	10	11.1	3 △	1	1.1	1	1.1	3	3.3	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>2</td> <td>2.2</td> <td>8</td> <td>8.9</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>81</td> <td>90.0</td> <td>85</td> <td>94.4</td> <td>79</td> <td>87.8</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>6</td> <td>6.7</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>3</td> <td>3.3</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	3	3.3	2	2.2	8	8.9	2 ×	81	90.0	85	94.4	79	87.8	3 △	6	6.7	3	3.3	3	3.3
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	87	96.7	87	96.7	77	85.6																																																																																
2 ×	2	2.2	2	2.2	10	11.1																																																																																
3 △	1	1.1	1	1.1	3	3.3																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	3	3.3	2	2.2	8	8.9																																																																																
2 ×	81	90.0	85	94.4	79	87.8																																																																																
3 △	6	6.7	3	3.3	3	3.3																																																																																
Q3_4.1	花子は片付けながら、そのきれいな部屋で横になった。／片付けるという動作をしている最中。まだ片付け終わっていない。	Q3_4.2	花子は片付けながら、そのきれいな部屋で横になった。／片付けるという動作が終わったあと。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>42</td> <td>46.7</td> <td>54</td> <td>60.0</td> <td>42</td> <td>46.7</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>36</td> <td>40.0</td> <td>23</td> <td>25.6</td> <td>36</td> <td>40.0</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>12</td> <td>13.3</td> <td>13</td> <td>14.4</td> <td>12</td> <td>13.3</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	42	46.7	54	60.0	42	46.7	2 ×	36	40.0	23	25.6	36	40.0	3 △	12	13.3	13	14.4	12	13.3	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>22</td> <td>24.4</td> <td>17</td> <td>18.9</td> <td>27</td> <td>30.0</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>52</td> <td>57.8</td> <td>61</td> <td>67.8</td> <td>52</td> <td>57.8</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>16</td> <td>17.8</td> <td>12</td> <td>13.3</td> <td>11</td> <td>12.2</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	22	24.4	17	18.9	27	30.0	2 ×	52	57.8	61	67.8	52	57.8	3 △	16	17.8	12	13.3	11	12.2
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	42	46.7	54	60.0	42	46.7																																																																																
2 ×	36	40.0	23	25.6	36	40.0																																																																																
3 △	12	13.3	13	14.4	12	13.3																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	22	24.4	17	18.9	27	30.0																																																																																
2 ×	52	57.8	61	67.8	52	57.8																																																																																
3 △	16	17.8	12	13.3	11	12.2																																																																																
Q3_5.1	太郎はシャツを汚しながら、チョコレートを食べた。／汚すという動作をしている最中。汚す動作は続いている。	Q3_5.2	太郎はシャツを汚しながら、チョコレートを食べた。／汚すという動作が終わり、汚れたままの状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>82</td> <td>91.1</td> <td>85</td> <td>94.4</td> <td>70</td> <td>77.8</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>7</td> <td>7.8</td> <td>2</td> <td>2.2</td> <td>17</td> <td>18.9</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>1</td> <td>1.1</td> <td>3</td> <td>3.3</td> <td>3</td> <td>3.3</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	82	91.1	85	94.4	70	77.8	2 ×	7	7.8	2	2.2	17	18.9	3 △	1	1.1	3	3.3	3	3.3	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>13</td> <td>14.4</td> <td>17</td> <td>18.9</td> <td>24</td> <td>26.7</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>72</td> <td>80.0</td> <td>68</td> <td>75.6</td> <td>55</td> <td>61.1</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>5</td> <td>5.6</td> <td>5</td> <td>5.6</td> <td>11</td> <td>12.2</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	13	14.4	17	18.9	24	26.7	2 ×	72	80.0	68	75.6	55	61.1	3 △	5	5.6	5	5.6	11	12.2
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	82	91.1	85	94.4	70	77.8																																																																																
2 ×	7	7.8	2	2.2	17	18.9																																																																																
3 △	1	1.1	3	3.3	3	3.3																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	13	14.4	17	18.9	24	26.7																																																																																
2 ×	72	80.0	68	75.6	55	61.1																																																																																
3 △	5	5.6	5	5.6	11	12.2																																																																																
Q3_6.1	太郎はシャツを汚しながら、東京行きの電車に乗った。／汚すという動作をしている最中。汚す動作は続いている。	Q3_6.2	太郎はシャツを汚しながら、東京行きの電車に乗った。／汚すという動作が終わり、汚れたままの状態。																																																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>48</td> <td>53.3</td> <td>47</td> <td>52.2</td> <td>28</td> <td>31.1</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>32</td> <td>35.6</td> <td>33</td> <td>36.7</td> <td>51</td> <td>56.7</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>10</td> <td>11.1</td> <td>10</td> <td>11.1</td> <td>11</td> <td>12.2</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	48	53.3	47	52.2	28	31.1	2 ×	32	35.6	33	36.7	51	56.7	3 △	10	11.1	10	11.1	11	12.2	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">熊本</th> <th colspan="2">高知</th> <th colspan="2">東京</th> </tr> <tr> <th></th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> <th>回答数</th> <th>%</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> <td>90</td> <td>100.0</td> </tr> <tr> <td>1 ○</td> <td>32</td> <td>35.6</td> <td>34</td> <td>37.8</td> <td>52</td> <td>57.8</td> </tr> <tr> <td>2 ×</td> <td>44</td> <td>48.9</td> <td>45</td> <td>50.0</td> <td>29</td> <td>32.2</td> </tr> <tr> <td>3 △</td> <td>14</td> <td>15.6</td> <td>11</td> <td>12.2</td> <td>9</td> <td>10.0</td> </tr> </tbody> </table>		熊本		高知		東京			回答数	%	回答数	%	回答数	%	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	1 ○	32	35.6	34	37.8	52	57.8	2 ×	44	48.9	45	50.0	29	32.2	3 △	14	15.6	11	12.2	9	10.0
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	48	53.3	47	52.2	28	31.1																																																																																
2 ×	32	35.6	33	36.7	51	56.7																																																																																
3 △	10	11.1	10	11.1	11	12.2																																																																																
	熊本		高知		東京																																																																																	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%																																																																																
全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0																																																																																
1 ○	32	35.6	34	37.8	52	57.8																																																																																
2 ×	44	48.9	45	50.0	29	32.2																																																																																
3 △	14	15.6	11	12.2	9	10.0																																																																																



Q3_13_1	太郎は自転車に乗りながら、「じゃあ、また」と言った。／自転車がまたがる動作をしている最中。まだ、自転車をこいでいない。	Q3_13_2	太郎は自転車に乗りながら、「じゃあ、また」と言った。／自転車をこいでいる状態。									
	熊本	高知	東京	熊本	高知	東京						
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	全体	90	100.0	90	100.0
	1	○	78	86.7	73	81.1	59	65.6	1	○	38	42.2
	2	×	5	5.6	10	11.1	23	25.6	2	×	43	47.8
	3	△	7	7.8	7	7.8	8	8.9	3	△	9	10.0
Q3_14_1	太郎は自転車に乗りながら、英単語を覚えた。／自転車がまたがる動作をしている最中。まだ、自転車をこいでいない。	Q3_14_2	太郎は自転車に乗りながら、英単語を覚えた。／自転車をこいでいる状態。									
	熊本	高知	東京	熊本	高知	東京						
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	全体	90	100.0	90	100.0
	1	○	25	27.8	23	25.6	16	17.8	1	○	71	78.9
	2	×	53	58.9	59	65.6	68	75.6	2	×	14	15.6
	3	△	12	13.3	8	8.9	6	6.7	3	△	5	5.6
Q3_15_1	太郎はドアノブをゆっくりと握りながら、「夢かもしれない」と思った。／5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。	Q3_15_2	太郎はドアノブをゆっくりと握りながら、「夢かもしれない」と思った。／握った後の状態。ドアノブを握ったままの状態。									
	熊本	高知	東京	熊本	高知	東京						
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	全体	90	100.0	90	100.0
	1	○	78	86.7	71	78.9	54	60.0	1	○	45	50.0
	2	×	6	6.7	11	12.2	25	27.8	2	×	35	38.9
	3	△	6	6.7	8	8.9	11	12.2	3	△	10	11.1
Q3_16_1	太郎はお母さんの手を握りながらおにぎりを食べた。／5本の指を内側に徐々に動かしている最中。まだ握り終わっていない。	Q3_16_2	太郎はお母さんの手を握りながらおにぎりを食べた。／握った後の状態。母の手を握ったままの状態。									
	熊本	高知	東京	熊本	高知	東京						
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	全体	90	100.0	90	100.0
	1	○	31	34.4	32	35.6	15	16.7	1	○	72	80.0
	2	×	45	50.0	48	53.3	61	67.8	2	×	14	15.6
	3	△	14	15.6	10	11.1	14	15.6	3	△	4	4.4
Q3_17_1	太郎は壁にゆっくりよりかかりながら、外を見た。／よりかかる動作をしている途中。まだよりかかり終わっていない。	Q3_17_2	太郎は壁にゆっくりよりかかりながら、外を見た。／よりかかるという動作が終わった後。よりかかったままの状態。									
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	全体	90	100.0	90	100.0
	1	○	57	63.3	56	62.2	43	47.8	1	○	59	65.6
	2	×	24	26.7	25	27.8	40	44.4	2	×	27	30.0
	3	△	9	10.0	9	10.0	7	7.8	3	△	4	4.4
Q3_18_1	太郎は壁によりかかりながら、しばらく外を見た。／よりかかるという動作をしている途中。まだよりかかり終わっていない。	Q3_18_2	太郎は壁によりかかりながら、しばらく外を見た。／よりかかるという動作が終わった後。よりかかったままの状態。									
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0	全体	90	100.0	90	100.0
	1	○	24	26.7	26	28.9	15	16.7	1	○	77	85.6
	2	×	53	58.9	55	61.1	70	77.8	2	×	11	12.2
	3	△	13	14.4	9	10.0	5	5.6	3	△	2	2.2

Q3_19_1	太郎は大きい木の枝に急いでぶらさがりながら、下を見た。／ぶらさがるとい動作をしている途中。まだぶらさがり終わっていない。						Q3_19_2	太郎は大きい木の枝に急いでぶらさがりながら、下を見た。／ぶらさがるとい動作が終わった後。ぶらさがったままの状態。									
		回答数	%	回答数	%	回答数	%			回答数	%	回答数	%	回答数	%		
	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0		全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0		
	1	○	50	55.6	51	56.7	34	37.8		1	○	51	56.7	52	57.8	56	62.2
	2	×	23	25.6	31	34.4	48	53.3		2	×	32	35.6	33	36.7	28	31.1
	3	△	17	18.9	8	8.9	8	8.9		3	△	7	7.8	5	5.6	6	6.7
Q3_20_1	太郎は校庭の鉄棒にぶらさがりながら、静かに夕日を眺めた。／ぶらさがるとい動作をしている途中。まだぶらさがり終わっていない						Q3_20_2	太郎は校庭の鉄棒にぶらさがりながら、静かに夕日を眺めた。／ぶらさがるとい動作が終わった後の状態。ぶらさがったままの状									
		回答数	%	回答数	%	回答数	%			回答数	%	回答数	%	回答数	%		
	全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0		全体	90	100.0	90	100.0	90	100.0		
	1	○	28	31.1	18	20.0	10	11.1		1	○	74	82.2	83	92.2	81	90.0
	2	×	50	55.6	58	64.4	74	82.2		2	×	12	13.3	5	5.6	9	10.0
	3	△	12	13.3	14	15.6	6	6.7		3	△	4	4.4	2	2.2	0	0.0

## 参考文献

- Bernard Comrie(1976)“Aspect” Cambridge University Press
- Koizumi Masatishi (1993) Modal Phrase and Adjuncts “Japanese/Korean Linguistics”2, p.409-428
- Leonard Talmy (2000)“Toward a Cognitive Semantics Vol.1”The MIT Press.
- Naoko HAYASE(1993)「Figure-Ground Phenomenon in Free Adjuncts --From Aspectual Viewpoint--」  
『Proceeding of the seventeenth Annual Meeting of Kansai Linguistic Society』p.23-33 関西言語学会  
庵 功雄(2001)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』  
スリーエーネットワーク
- 池上素子(1997)「「のに」・「ながら」・「ものの」・「けれども」の使い分けについて」『北海道大学留学生センター紀要』1, p.18-37 北海道大学
- 石垣謙二(1955)「助詞「から」の通時的考察」『助詞の歴史的研究』 岩波書店 p.81-214
- 今尾ゆき子(1993)「「ノニ」の機能」『名古屋大学人文科学研究』22 名古屋大学 p.75-84
- 今尾ゆき子(1994)「「ケレド」と「ノニ」の談話機能」『世界の日本語教育』4 独立行政法人国際交流基金  
p.147-163
- 内丸裕佳子(2006)「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』第2巻1号 日本語学会 p.1-15
- 江原由美子(2003)「付帯状況と逆接」『岡大國文論稿』31 岡山大学文学部言語国語国文学会p.208-199
- 奥山和子(2001)「留学生の日本語習得過程における接続表現の分析—作文・文章表現の観察・比較から—」『留学生センター紀要』7 神戸大学 p.35-50
- 奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『国語国文』8 宮城教育大学p.85-104
- 奥田靖雄(1988)「時間の表現(1)」『教育国語』 むぎ書房 p.2-17
- 奥田靖雄(1988)「時間の表現(2)」『教育国語』 むぎ書房 p.28-41
- 奥田靖雄(1996)「文のこと—その分類をめぐって」『教育国語』第2期22巻 むぎ書房 p.2-14
- 奥田靖雄(1997)「動詞(その一)その一般的な特徴づけ」『教育国語』第2期25巻 むぎ書房 p.2-11
- 岡本牧子、沢田幸子、安田乙世(2009)『はじめて日本語を教える人のためのなっとく知っとく初級文型  
50』スリーエーネットワーク p142-147
- 沖裕子(2000)「アスペクトからみた動詞分類再考：「気づかれにくい方言」にふれて」『人文科学論集  
文化コミュニケーション学科編』 信州大学人文学部 p.51-68
- 何志明(2002)「「様態・付帯状況」の複合動詞の組み合わせ」『日本語と日本文学』第35号 筑波大学国  
語国文学会 p39-59
- 影山太郎(2004)「英語結果構文と日本語結果複合動詞におけるforce dynamics」『人文論究』54(1)、  
関西学院大学 p.26-40

- 柏木成章(1988)「「ながら」小考」『語学教育研究論叢』5 大東文化大学語学教育研究所 p.64-83
- 加藤恒昭、畠山真一、坂本浩、伊藤たかね(2006)「語彙概念構造辞書構築のための設問セットの設計とその評価」『レキシコンフォーラム』 ひつじ書房 p.57-84
- 加藤陽子(1995)「テ形節分類の一試案—従属度を基準として—」『世界の日本語教育』5 独立行政法人国際交流基金 p.209-223
- 加藤陽子(1995)「複文の従属度に関する考察 主節のモダリティを中心にして」『Working papers』vol.6 国際大学 p.21-37
- 川越菜穂子(2002)「「ながら」節の用法の記述について—付帯状況・様態・逆接—」『帝塚山学院大学人間文化学部研究年報』4帝塚山大学大学院 p.51-62
- 川端芳子(2009)「副詞節「ながら」の一考察」『立教大学日本語研究』16 立教大学日本語研究会p.2-10
- 金水敏(1995)「いわゆる進行態について」『築島裕博士古希記念国語学論集』 汲古書院 p.169-197
- 金水敏(2000)「第1章時の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店 p.3-90
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15 p.48-63
- 工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌第』13-4号 p.51-88
- 工藤真由美(1989)「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学3』むぎ書房 p.53-118
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 工藤真由美(1999)「西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態」『阪大日本語研究』11 p1-17
- 工藤真由美(2001)「アスペクト体系の生成と進化—西日本諸方言を中心に」『ことばの科学』10 むぎ書房 p117-173
- 工藤真由美(2004)「研究成果の概要—アスペクト・テンス・ムードを中心に—」工藤真由美編『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を越えて—』 ひつじ書房 p34-76
- 国広 哲弥(1984)「「のだ」の意義素覚え書」『東京大学言語学論集'84』東京大学文学部言語学研究室
- グループジャマシィ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 黒田史彦(2000)「非逆接のナガラ節における主語の生起について」『Ars Linguistica, Linguistic Studies of Shizuoka(中部言語学会)』7 関西外国語大学大学院 p.41-52
- 小泉 保(1987)「譲歩文について」『言語研究』91 p.1-14
- 国立国語研究所(1985)『現代日本語のアスペクトとテンス』
- 酒井悠美(1999)「「—しておきながら」タクシス(時間的順序)と話し手によるマイナス評価の表現」『日本語教育』102 日本語教育学会 p.11-19
- 坂原 茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版会
- 坂口昌子、鄭惠先(2007)「ナガラ節に見られる日本語学習者の母語転移—韓国語母語話者が用いる「ながら」の始点的用法を中心に—」『京都外国語大学研究論叢』68 京都外国語大学国際言語平和研究所 p.191-198
- 佐藤直人(1997)「日本語のナガラ節の意味と位置の相関」『言語科学論集』1 東北大学 p.63-74
- 佐藤直人(1998)「「二つの」ナガラ節」『言語の内在と外在』 東北大学文学部 p.335-352

- 佐藤直人(1998)「日本語のナガラ節の内部構造について」『文化』61-3/4 東北大学文学会 p.55-65
- 柴公也(1995)「「～면서」と「～ながら」の対照研究 [時間]の「～면서」と[持続]の「～ながら」をめぐって」  
『熊本学園大学文学・言語学論集』2-1 熊本学園大学 p.153-176
- 鄭惠先、坂口昌子(2001)「誤用分析にもとづく「ながら」と「면서 (ミョンソ)」の比較 始点の用法と述語の  
持続性を中心に」『日本語教育論集 世界の日本語教育』11 国際交流基金日本語国際センター  
p.153-166
- 新川忠(1990)「なかどめ—動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のばあい—」『ことばの科学』4、  
むぎ書房 p.159-171
- 副島健作(2007)『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房
- 高橋 太郎(1976)「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』  
むぎ書房 p.331-350
- 高橋太郎(1995)『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』むぎ書房
- 高橋太郎(2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 高橋友子(1992)「「ながら」考」『九州大学留学生センター紀要』4 p.59-69
- 高見健一、久野 暉(2006)『日本語機能的構文研究』大修館書店
- 田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6(5) 明治書院 p.37-48
- 陳芬慧(1999)「接続助詞「～ながら」について 「～ても」と比較して」『日本語教育論集 世界の日本語  
教育』9 国際交流基金日本語国際センター p.163-175
- 陳芬慧(2000)「「～ながら」の意味・用法について-逆接表現を中心に-」『言葉と文化』1 名古屋大学大  
学院国際言語文化研究科日本語日本文化専攻 p.111-123
- 寺村秀夫(1983)「「付帯状況」表現の成立の条件—「XヲYニ……スル」という文型をめぐって—」『日本  
語学』2(10) 明治書院 p.38-46
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 豊嶋裕子(2009)「翻訳小説に見る「PながらQ」と“一边A一边B”類の対応状況」『東海大学紀要 外国語  
教育センター』東海大学外国語教育センター p.99-114
- 西鶴淳一(2013)「「やすい」「にくい」の意味」未刊行修士論文
- 仁田義雄(1983)「アスペクトについての動詞小レキシコン」『ソフトウェアのための日本語処理の研究』5  
情報処理振興事業協会 p.183-227
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと文法』ひつじ書房
- 仁田義雄(1995)「シテ形接続をめぐって」『複文の研究(上)』くろしお出版 p.87-126
- 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 仁田義雄(2004)『言語の科学5文法』岩波書店
- 仁田義雄(2009)『日本語の文法カテゴリーをめぐって』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6』くろしお出版

- 白銀志栄(2007)「(一) 辺A(一) 辺BのAとBについて」『神田外語大学紀要』第19号 神田外語大学 p.1-18
- 日本語記述文法研究会(2007)『現代日本語文法3 アスペクト テンス 肯否』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6 複文』くろしお出版
- 畠山真一(2007)「高知方言のアスペクト形式と時間性に基づく動詞分類」『日本語科学』21、p65-88
- 早瀬尚子(1992)「分詞構文におけるFigure/Ground性についての一考察」『Osaka Literary Review』31、大阪大学大学院英文学談話会 p.10-22
- 廣坂直子(1998)「「ながら」の変遷—主にアスペクト研究の一環として—」『国学会平成10年度秋季大会予稿集』大阪大学文学院 p.13-20
- 廣坂直子(2001)「「ながら」と「たまま」—並起を表す副詞節」『国文学解釈と鑑賞』第46号第2号 学燈社 p.122-124
- 廣坂直子(2001)「付帯状況を表すタママ節について」『語文』75 大阪大学文学部国語国文学研究室 p.89-96
- 藤井 正(1966)「動詞+ている」の意味」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』(1976)むぎ書房収蔵 p.97-116
- 堀口和吉(1987)「動詞の表す〈継続〉〈持続〉「～ながら～」をめぐって」『天理大学学報』39-1 天理大学 p.1-26
- 堀川智也(1994)「文の階層構造を考えることの意味」『日本語・日本文化研究』4 大阪外国語大学日本語講座 p.31-44
- 益岡隆志(1992)「日本語の補助動詞構文—構文の意味の研究に向けて—」『文化言語学 その提言と建設』三省堂 p.562-547
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志、仁田義雄、郡司隆男、金水敏(2004)『言語の科学5 文法』岩波書店
- 益岡隆志、田窪行則(1992)『基礎日本語文法』くろしお出版
- 松田真希子(2000)「ナガラ節の状態修飾性をめぐって」『日本語・日本文化研究』10 大阪外国語大学日本語講座 p.37-48
- 松本 曜(2003)『認知意味論』大修館書店
- 宮城信(2006)「ナガラ節の意味論的制約」『筑波日本語研究』11 筑波大学 p.30-46
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 三原健一(2000)「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8、p.54-75
- 三原健一 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人著(2002)『日本語の文法1 文の骨格』
- 三原健一(2004)『アスペクト解釈と統語現象』
- 三宅知宏(1995)「～ナガラと～タママと～テ」『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』くろしお出版 p.441-450

- 三宅知宏(1999)「日本語の付帯状況文」『国文鶴見』第34号 p.84-74
- 村尾治彦(2013)「認知形態論から語彙論へ」『認知日本語学講座第2巻認知音韻・形態論』くろしお出版 p.89-139
- 村木新次郎(2006)「「一ながら」の諸用法」『日本語文法の新地平』3 くろしお出版 p.1-24
- 茂木俊伸(2000)「とりたて詞の階層性について—動詞句及びスコープを手がかりとして—」『国語学会』安田女子大学 p.54-61
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 森田良行(1980)『基礎日本語2』角川書店
- 山口堯二(1980)「「て」「つつ」「ながら」考」『国語国文』49-3 中央図書出版社 p.1-16
- 山梨正明(1987)「文脈と言語理解の諸相」『日本語学』6 明治書院 p.26-36
- 吉川武時(1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』p.155-328
- 吉永尚(2008)『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院
- 吉永尚(1997)「付帯状況を表すテ形動詞と意味分類」『日本語教育』95 日本語教育学会 p.73-84
- 吉永尚(2006)「テ形接続に見られる誤用についての考察」『園田学園女子大学論文集』第40号 園田学園女子大学 p.157-163
- 吉永尚(2012)「テ形節における統語的考察」『園田学園女子大学論文集』第46号 園田学園女子大学 p.113-123
- 吉永尚(2012)「テ形節の意味と統語」『活用論の frontline』くろしお出版 p.79-114

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、あたたかく、率直なご指導を賜り、終始励まし続けてくださった熊本県立大学 馬場良二教授に心から感謝の意を表します。

馬場先生は、研究し続けることの大切さを常に教えてくださいました。1997年に熊本県立大学大学院修士課程終了後、2008年に同大学院博士後期課程に入学し、6年の長きにわたって在籍する間も、本研究をあきらめず、博士論文としてまとめることができたのは、ひとえに、馬場先生のご指導のおかげです。

また、認知言語学の観点から、貴重なご指導、ご助言をいただいた熊本県立大学 村尾治彦教授に心より感謝申し上げます。

本論文を書き上げる中で、馬場研究室修了生の皆さんや、日本語教育に携わる同僚には、本調査前のパイロット調査に協力していただき、論を組み立てる際には、貴重なご意見をいただきました。また、例文判定についても率直なご意見をいただきました。本当に、ありがとうございました。

最後に、現在所属しております、鹿児島大学留学生センター 大嶋真紀教授、畝田谷桂子教授には、本務の傍ら博士課程後期に在籍することを快くお許しいただき、支えていただきました。ここに、心より感謝申し上げます。